

Justice中章Ⅱ：蠢き轟
く脅威と去り逝く者達

斬刃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恩恵は沢山貰えたか？

愉快的旅は楽しめているか？

誰かを救済することを、満足にできているか？

隠れ潜めた黒い脅威は湯水のように溢れ、敵味方問わず牙をむく。

さあ、ここからが本当の命懸け。

歪と化した脚本と舞台には、その物語を彩る役者達がいる。

彼らは常に二択を迫られることとなる。

生を謳歌して抗うか、挫折して滅ぶか。

【※この小説は『Justice 中章：歌姫と蘇生と復讐と』の続編です】

今までの介入世界

ハイスクールD×D

魔法少女まどか☆マギカ

戦姫絶唱シンフォギア

未来日記

艦隊これくしょん

Fate／kaleid liner プリズマ☆イリヤ

Fate／zero

ギルティクラウン

【追加】

ゼルダの伝説 風のタクト

目次

決戦編開始前の悪天候	2
決戦編前	
1 話帰りを待つ者達の元へ	13
2 話無人島防衛戦	22
決戦編開幕―歌姫と蘇生と復讐と	
3 話海鳴市? (正輝ルート)	46
4 話敵襲「前」(正輝ルート)	62
5 話敵襲「後」(正輝ルート)	94
6 話開幕 (正輝ルート)	111
7 話深み (正輝ルート)	150
1 話一触即発「前」(レイナーレ・士郎	

ルート)	187
2 話一触即発「後」(レイナーレ・士郎	
ルート)	
3 話思慮分別 (レイナーレ・士郎ル	271
ト)	
4 話急がば回れ (レイナーレ・士郎ル	306
ト)	
5 話白昼堂々① (レイナーレ・士郎・正	335
輝ルート)	
	363

決戦編開始前の悪天候

11月30日

海鳴市 中丘町

その日の天気予報は、大雨だった。

夜になっても全く降むこともなく、家の中でも聞こえるほどの豪雨となっていた。テレビのニュースには、洪水警報の注意喚起が放映されている。

川や海辺に近づくのは危険だとのお知らせを聞いている少女、八神はやては窓越しに外の様子を見てがっかりとしていた。

「雨、中々止まへんなー。」

シグナムだけが、まだ外に出てるんやけど…大丈夫やろか」

「今さつき、もうすぐ帰るって連絡がありましたから大丈夫ですよ」

「そうか。そやったら、安心や」

雷も鳴り、天気が悪いことに深くため息をいっている。

シヤマルは残りの洗濯物を部屋に干していく。

はやては、窓をぼんやりと見ていると男の人影を見ていた。

「ん？何やろ、あれ…」

近くにいるザフィーラは狼モードで寛ぐ体制をとり、ヴィータはテレビを見たままで気づかない。はやてはずっと、窓越しに見える男の姿を目を細くして凝視する。

まず夜の豪雨の中でたった一人、傘をさしてない。フラフラと雨に打たれながら、右手で壁伝いに移動しつつ、左腕で腹を抱えて歩いていく。

(変やなー？何してるんやろ…?)

家の中から外を見ても、雨粒が窓に酷く散っているせいでぼやけてよく見えていない。

目を凝らして、細める。

彼は何かに足を躓いたのか、その場で倒れてしまった。

「大変やつ…!??シヤマル、ヴィータ！」

家の前で人が倒れとる！」

驚いたはやてはシヤマルとヴィータを呼び、は傘を持って外へ出る。家の前にはツンツン頭のした一人の男子高校生が地べたに倒れ込んでいた。近くで見ると衣服は出血で汚れ、身体も動けそうにもない。

い致命傷ではなかったものの、豪雨と流血のせいで体温は急激に低くなり、顔が青白くなっている。

身体は弱っており、立てる力はもう無かった。

「意識は微かにあるみてーだけど、かなり冷てえし…このままだと」

「早く家に入れて、すぐ緊急病院に連絡せんと。どないしよつ…血を流し過ぎとる。」

「このままやと、救急車が来て間に合うかも分からへんし」

「はやてちゃん。」

私に、その人の怪我を見せてもらえますか？」

少年が瀕死になっていることに、はやては少し慌てる。たとえ救急車を呼んだとしても、この出血じゃ来たとしても間に合うかどうかどうかすら不安だった。

体はかなり冷たくなっており、顔色も悪くなっている。

「クラーレヴィント、お願い」

治療魔法で当麻の腹部を治療していく。彼女が触れると冷たく震えている身体が、段々と弱っているのを実感した。

「…これで大丈夫です、なんとか治療できました。ザフィーラ」

「心得た」

ザフィーラが彼の身体を軽々と持ち、家へ連れ帰る。汚れた服を洗いに出し、ザフィーラの服を少年に着させる。大きいサイズではあるが、今ある男性の服はザフィーラの物しかなかった。

「すぐに傷も塞いで、病院に連絡…はしなくても大丈夫。血は出てたけど…長時間流してたわけじゃないみたい。」

致命傷でも無ければ、その患部も魔法で修復してる。

ただ起きててもすぐに動けないと思うから、起きたらしばらくは安静にするように言っておきますね」

「良かったつ。でも、さっきの怪我…一体何があつたんやろ」

治療魔法のおかげで撃たれた傷跡は塞がれていた。早期に治療したことで、出血多量で死ぬこともなく一命を取り留めている。

『みんな聞こえる？ちよつと彼の傷のことで大事な話したいことがあるの』

『…シヤマル。傷のことは黙っていたが、一体何かあつたのか？』

シヤマルが彼を掛け布団で寝かせている最中に念話をする。ザフィーラは怪我を間近で見ていることから、シヤマルが嘘をついていたことを知っていた。

『はやてちゃんには言うべきか困つてて…治療してた箇所が彼の腹部なのだけけど、銃痕が残つてたの』

『おい、それって…撃たれたつてことかよ。』

『一体誰なんだよ、そんな酷えことしたの』

シヤマルが暗い顔をして彼の傷を報告すると、彼女以外の全員が驚く。高校生と同じくらいの男性が、この平穏な街で銃撃され、負傷したのか。

撃たれた箇所を回復魔法で元通りにしたが、今のところ彼の意識がまだ目覚めていない。

シヤマルの沈んだ顔にも一同納得し、静まりかえる。

「…そやな、今は寝かせたほうがええな。

事情を聞くのは後からの方がええやろ。

みんな…ウチが面倒事を持ち込んですまんかったな」

「は、はやては何も悪くねえって！」

「あのまま放置しても、結局大事になっていたかもしれないし…」

家の前で倒れる人がいるのも、はやての性格上放っておくわけにもいかなかった。気

まずい空気で静まり返ったとき、玄関のドアが開いた。

「ただいま帰りました」

「あ！お帰り、シグナム。」

「雨大丈夫やった？」

シグナムの衣服と髪は少し雨に濡れており、残念そうな顔にしていた。その様子だ

と、家に入る前に豪雨で上半身が濡れている。

「豪雨だったので…服を着替えて来ます。」

その少年は？」

「家の前で倒れていたんや。話は着替えてからにしよ、そのままやと風邪引くから」

「分かりました」

シグナムは、替えの服に着替えるために更衣室に入る。狙われる理由なのかとはやて家全員が疑っているが、今の彼は話せる状態ではなかった。

ソファに寝転がし、掛け布団をかけさせている。

『シグナム、後で大事な話がある』

『…何かあったのか？』

『さつき主人が怪我をした少年を家に入れたことについてだ。』

詳しいことは、別の場所で話そう』

話すのはシグナムが着替えてから、あの少年のことについて話すこととなるだろう。

別の部屋のドアが開くと、金髪の髪と青いシャツをきた少年がリビングへ来た。彼はトレーを持ち、その上に飲食を終えたお椀とコップが置かれていた。

「あ、リンク君。」

綺羅さんの様子は？」

「うーん…まだ体調は優れないみたい。」

でも胃薬は飲んだし、おかゆも食べれたよ」

「ほうか…悪いことしたなあ。綺羅さんも昨晩にシャマルのカレーを食べてたら気分悪くなったゆーて寝転んどったし。」

綺羅さんが失神して倒れた時は、大慌てやったなあ」

「シャマルが料理下手なの、全く知らなかったもんな」

「私がいつも買い出しに行ってたから、料理もできるんじゃないかと…下手でも良いから食べてみたいって」

「一口であの有様だ。」

でも2日、3日になったら流石に治るだら」

トゥーンリンクは綺羅の仲間ではあるが、正式な仲間というわけではなく彼女に誘われてはやての面倒を見るよう指示されていた。

前日にシャマルのご飯を食事し、体調不良で寝込んでしまっている。

「約束の近日やなくて良かった。友達と会う約束で体調崩したら…どないしよって思ってたし」

「12月9日には、ご友人と会う約束ですよね」

「1人がいつもウチのこと嫁っていつも突つかかる子で、もう一人はその子を諫めとる。」

伽奈ちゃんから電話が来て、いつもの場所で会いたいって。こうして連絡するのも1

年半ぶりや…ほんまに久しぶりなんよ」

銀髪オッドアイの男と、赤い髪をした女の子が一緒に写真で写っていた。幼少の頃に仲良くなり、背景には図書館が写っている。

別れる際の記念として撮っていた。

その写真は、今でもはやての机の上にある。

「二人とも、元気にしとるかな…楽しみやわー。」

リンクくんも、いつも綺羅さんの看病とウチの家事を手伝ってくれてありがとな」

「うん、何か手伝ってほしいことがあったら言って！綺羅さんにははやてちゃんの助力をしてあげてって言われてるから」

トウーンリンクが元氣よく胸を張って綺羅の看病し、綺羅自身もはやての家で看病されるとは思ってもない。

守護騎士四人の目的と知らず、深く散策せず純粹にはやての家族を助けるということだけで動いている。

彼は、快くはやてのお手伝いに精を出している。

「ほんなら明日、新しく家で寝込んでる男の人と綺羅さんを看病することになるけどええか？」

「うん、いいよ！でもはやてちゃんは今日からずっと綺羅さんの看病してたし、明日は午

後から気分転換に図書館へ行っても良いから。

朝と夜に手伝ってもらいたいけどいい？」

「ほんまに、ええの？それやったら助かるで。

リンク君がここにおつて、ウチも助かるんや」

「アタシらが用事で外に出てる間、ずつとはやてのことも見てくれるもんな。

頼りにしてるぜ」

はやて家の野外には雨に濡れたブラックロックシューター達が見張りをしている。

綺羅の命令か、或いは別の誰かに攻撃していなければ彼女

達4人は微動だに動かない。

家近くにいた上条当麻のことを報告することも可能だったが、再起不能になりかけている彼に害がないと判断して無視していた。

綺羅の命令は、『許可なく八神はやて及び守護騎士への攻撃を禁止する。彼女らに干渉した相手がいる場合も、例外ではない。』

守護騎士の蒐集については、序盤までは様子見する。

後から助力し、闇の書を完成させること。

それ以外でピンチになった時に、牽制して撤退させるよう仕向ける。しつこく追ってきて、主人ことはやての危機に瀕したら始末すること』

というものだ。

四人は刃向かったところで脅威ではない上条当麻のことを報告せず、綺羅の命令通りのことにただ従うだけ。

綺羅の船にいる「マト達」と繋がりはされておらず、感情は殆ど機能していなかった。(なんで、こんなことになったのっ…準備しようとしてたのに、まだ気分が。

闇の書は必ず完成させないといけないのにつ。

完成させた暁には…黄色ロープにあの人を絶対に甦らせる。

今はこんな状態だけど、復活した時はどんな手を使つてでもっ…!!?)

―彼女の配下達は動けても言われた指示だけしか動かず、肝心の彼女自身はお腹を壊したことで全く動けなかった。

彼女は、話がまともにもできる状態ではない。

い。―――しかも、怪我をした少年が「上条当麻」だと言うことを彼女はまだ知らない。

その少年もまた、家にいるのがはやて達だけではなく誠司を殺した綺羅もまた住んでいることも全く知らないのだから。

この話は、決戦編が開始される2日前のことである。

決戦編前

1 話帰りを待つ者達の元へ

第四次聖杯戦争の激戦が終わり、正輝、アーチャー、杏子が自分の船へと帰っていく。「ただいまー！」

三人とも何とか生きて帰ってこれたぞー！」
変に弄って故障していた転移装置も、正輝達が奮闘している間に士郎達の手で修理されている。

「うん、おかえり。こっちも慌しかったよ」

「まあそうだろうな」

まず或が転移装置の近くで、お迎えで待っていた。やっと三人が帰ってきたかって顔で苦笑している。

「で、この船の転移機能は修復してるの？」

「士郎さんが何とかしてくれたからね」

「あー…ならアイツにはお礼を言っとかないとな」

そう言うのと、正輝の携帯から着信音が鳴る。

取り出して画面を確認すると、メールでは無人島での転移先による不具合が解消されたと連絡が来た。

そのタイミングに、浜風がやって来る。

「…やつと、連絡が来たか」

「あ、お疲れ様です。正輝さん」

艦これに介入し、事件を解決させたときに連れて帰る機能がメンテナンス中で操作できず、連れて行くにしても一人しか入れることができなかった。

今となっては、そのメンテが解除されて複数人船へ入れることができるようになってる。

「つし、これで桜達の元に船を入れることができるな」

「あの…私以外の艦娘達はどうするのですか？」

そこは折り入って相談だな。この世界にまだ滞在したいって事にもなるかもしれない。

でも…不知火はランサーとサーヴァント契約してるから確定だな」

令呪を持っている不知火を察するに大本営以外の色んな所から狙われても可笑しくない。

正輝側の都合で巻き込まれたとはいえ、殺者の楽園と提督が手を組むという事態もあつた。

寺にいたる艦娘も船に入れるなら、慎重に考えなければならない。先に入った浜風も、他の艦娘を入れるのかは気になっていた。

「前に俺が介入した艦これの世界にな。無人島に桜達が待つてるから、そろそろ船に連れて帰る。」

船でちよつと休むし、少ししてから介入するよ。まあ艦娘については無人島についてからでもまた考えて…なんだ？」

二人の話を遮るかのように電話が鳴る。

『どうした?』

『大至急、無人島に来て下さい。』

大勢の敵に襲撃されてます』

『…え? 敵って艦娘? 楽園の連中? それとも俺と同盟の二人以外の正義側?』

『…その申し上げにくいのですが、艦娘もいるのですが…とにかく来て下さい。』

出来れば、生捕にできる人をお願いします』

電話に出るとライダーから来て欲しいとの連絡だったが、敵が何なのかよく分からな
いと曖昧な言葉に正輝は首を傾げている。

「なんでこんな急につ……というか艦娘もつてどーゆうこと？」

浜風、秋瀬……土郎達とマミ、さやか、ほむら、翼、平坂を呼んでくれ。
無人島にいる桜達が危ない……今から助けに行く。

浜風もついて来い。

杏子とアーチャーの二人も、帰って早々悪いが……いけるか？」

「つたりめーだ」

「了解した。マスター」

桜達の増援として助けに向かう土郎・凜チームと正輝のシャドー同様に水分身を用いることで数の暴力を対応できるさやか、洗脳で敵の意識を翻弄する黄泉。

リボン・影縫いで敵の動きを止めるマミと翼で生捕にする。

結界で他勢の敵戦力を結界や幻の魔法で分断可能な杏子。

以上の8名を連れて無人島に介入することとなる。

——正輝達が帰ってきて早々、船で休む余裕は与えてくれなかった。

ヒトフタマルマル（12：00）

一方、無人島では桜達が呑気に暮らしていた。

提督と楽園のリーダーによる事件が起きて以来、無人島にいる艦娘達は音沙汰もなく平和に生活している。

「……ここに泊まって、もう2週間ですか」

加賀はそう呟いた。前までいた鎮守府から離れ、赤城と共にこの無人島へと辿り着いている。

「い、いつもありがと……」

「五十鈴さんもお昼になると思うので、そろそろ食べたほうがいいですよ」

「ご飯を炊きつつ、野菜を炒めていく。」

朝潮と摩耶、榛名の三人は家事を手伝っているが、五十鈴の方は一応姉妹艦の二人が付いてブレイキ役になってるお陰で、桜達や正輝に対する警戒も薄れていた。

「ただいま帰りました」

「おう、三匹も釣れたぜ。」

魚の方はまたいつものところに置いておけばいいか？」

「ええ、お願いしますね」

アロハシャツを着ているランサーとワンピースを来ている不知火が寺に帰ってきた。

二人とも外では釣りをしており、彼が持っている青いバケツの中には活きのいい魚が飛び跳ねている。

「釣りのついでに、見回りはしていたのか？」

「あつ…」

「あー、そういやあそうだったな」

「二人とも、魚を運ぶのに忘れてましたね」

見回りは、この無人島にもし誰かが流れ着いているか確認すること。短期間とはいえ、誰かがこの島に上陸する限らないからという理由。アサシンは寺の門番を、ライダーとランサーの交代で朝昼晩と見回りをしている。

無害の一般人もしくは被害に遭った艦娘が流れつければ事情を聞きつつ暫くの間は寺に入れるが、外敵ならば再起不能にしつつ武器を没収、捕獲してから襲った理由を聞くのだった。

「なら俺一人でちよつくら偵察してくるわ」

「あ、それなら私は代わりに魚の下処理をしておきますね」

「おう、助かる」

不知火はバケツを待ち、調理場の近くに置いておく。

彼女は餌と釣り道具を片付け、魚の飛び散らせている水で衣服が濡れないようエプロ

ンを着る。暴れている魚の調理する為に教えられた通りの下処理をしていく。

「不知火さんも、最近はランサーさんとの関係が良好ですし」

「いつも釣りに付き合ってますからね」

【この時はまだ、何人か無人島生活に終わりが来るのも、何十人も的人数が漂流してとは思ってなかった】

ランサーは寺から出て、降りた先にある高台へと向かっていく。そこから海沿い付近を確認し、誰か無人島に流れていないか見渡す。アーチャーのように鷹の目を持ち合わせていないが、英霊の身であるため少なくとも常人よりは目が良い。

「…何だ、ありやあ?」

高台から監視すると目が死んでいる艦娘達が海上を移動し、各海辺と海岸に上陸していく。彼女達はポケットから取り出した端末で操作すると、錠前とベルトをつけた学生と民間人が転移され、黒い槍兵へと変身していく。

特に一番人数の多いメンバーには長い髪の気の強そうな女の人が杖を持って後衛に

おり、顔を兜で覆う黒い軽装を纏った兵士達も転移されている。

無人島の奥に前進している光景を凝視していくうちに、彼らが無人島の搜索を開始し、中央に集まろうと移動する。

武装している彼らの様子から察するに、友好的のようには全く見えなかった。

「チツ……りや戻って報告しねーとかなり不味いな」

もし赤城達が噂で話した通り『麻紀と彼の配下』ならば、接触した時点で必ず敵として襲ってくる。もし彼らが寺の所まで探りに入ろうとするなら、たとえ正輝達と関わりがなくても見つけた相手は戦力増強の為に取り押さえ、再起不能にして船に連れて行くうとするだろう。

そして、気掛かりなのは正義側のリーダーでもない少女達が、持っている端末で何人か転移させたことだ。

(にしても何かの見間違いか？船とやらで仲間を転移させれるのって正輝のようなリーダー格じゃなきゃダメだっけ聞いたが)

ランサーは、とても嫌な予感がしていた。

彼らが無人島に上陸し、際限なく人数を増やされたりでもしたら、寺から脱出することもできずに逃げ場のない状況へと追い込まれてしまう。

(もし連中があの子正義側っていうのなら、あんな人数を続々と転移させることが出来て

んだ？

ま、詳しく探るのは合流してから考えるしかねえな)

危険を感じたランサーは、このことを桜達に報告するために寺へと帰っていく。

この島にやってきてきて敵が何を企んでいるのかよりも、報告してその後の事についてどうするか考えなければならない。

―正輝達の援軍が来るまで、この寺を守衛していくか。

或いは全員で、この島で隠れるか。

2 話無人島防衛戦

「お前ら、緊急事態だ。」

この無人島に何十人かやってきている」

偵察を終えたランサーが寺へ早急に戻り、全員に報告する。一人、二人なら漂流者で済む話だが、大勢で押し掛けてきている。

「艦娘はいたの？」

「ああいたな、奥に進んできている」

「つつ…!?」

「目的がある上に、この無人島に遙々やってきたって表情だったからな。着陸してすぐに重たそうな武装している時点で、ありや敵だろ。」

艦娘もいたが、鎧をつけた連中もそろそろというぜ」

ランサーはそう返答した。

無人島ならばある程度の軽装だけで問題ないのに、戦闘になることが理解した上で態々武装をしている。

「き、きつと……鎮守府を抜け出した私達を……始末しに来たんだ。そうじゃ無かつたらここまで来ないわよっ……!」

私が連れていったことも、加賀達の転移もバレたんだ」

「鎧というのは？艦娘絡みなら憲兵も一緒にいると思いますが」

この無人島を特定し、遙々ここまでやってきたと怯えていた。五十鈴単独で姉妹艦の名取、長良の二人を連れてきており、その情報が大本営にバレたと思っていた。

しかし、バレたのなら憲兵が疾走した艦娘を探り、大本営側の艦娘と一緒に捕らえるはずなのに連れてきたのは鎧の兵士達がいたこと。

どちらにせよ、彼らは自分の身を守る為に森の中に入るのならまだしも、島に上陸して調べるわけでもなければ、何の躊躇いもなく奥まで進んでいく。

「で、結局どうすんだ？グズグズしてたら囲まれちゃうぞ」

「そうなんです……この無人島を出ても、他にアテのある場所がありません」

「む、無理よっ……私達、鎮守府から出てやつと辿り着いたのがこの無人島だって言うのに。」

海に出ても燃料切れで追いつかれるに決まってるじゃない!!？」

五十鈴がそう叫ぶのも無理はなかった。

鎮守府からやってきた艦娘であるならば、十分な備えを持ち合わせた上でやってく

る。

対して妖精がない榛名達は資材を用意してくれるいなければ、艀装を修理することもできない。

桜達は強力な魔術・英霊の力で逃げきれても、武器も体力も万全ではない艦娘達には限度がある

「…ランサー、この島に来た人数はどれくらいですか？」

「ざっと60人くらいだったが…正輝達が来るまでの間、ここにいる俺達で寺を死守すんのか？マスターが良いなら、俺はそれでも構わねえが」

「看病しなくちゃいけない人もいます。

逃げ出すのは…」

「全員で脱出するのは難しそうですね」

「なら、決まりだな」

この無人島を出ず、守ることに徹する。

正輝達が救援としてやって来るまでの間、自分達の力でどうにかすることとなった。

島に上陸した敵の軍勢は、山を登り、寺の階段に登ってきている。

海辺にはランサーが向かい、寺の門にはアサシンが立ち塞がった。

「随分と大人数で寺参り……と言う感じではなさそうだな」

「私達に用があるのはこの無人島で生き残っている者全員、貴方もその内の一人です。貴方のような人間の意見なんてどうでも良い。

命が惜しくないなら同行してくれませんか？

あと、寺の中も価値のある物は差し押さえます」

「断る、と言えば武器を向けるのだろうか」

艦娘達が大砲を、黒甲冑達は持っている槍を向けた。

話し合う気は毛頭なく強行手段で利用できる物・人材を、攫い攫い、そして戦力にする。

「通りたければ、押し通れ」

彼らはそのまま階段を登っていくと、アサシンは鞘から長い刀を抜き、鎧の人が持っていた槍を真つ二つにする。

「や、槍が真つ二つに」

（何も見えなかった……!?? いつの間にか奴の手に刀を持っていたってことだけしか）

「つっ……突撃い!!?」

侍の剣技を見抜けなかった相手に、数だけでは易々と突破させてはくれない。

敵が強いことが分かかっていても彼らに後退は許されず、侍一人に多勢で特攻を仕掛け

るのだった。

作戦通りランサーは海辺の周りに駆け込んだところ、彼らは発見次第襲いかかって来た。た。

しかし、

(呆気ねえ…それどころか、戦う意思が感じられない)

ランサーのスキル、矢避けの加護で艦娘の砲撃は当たらない。黒い鎧をつけている彼らの攻撃は素人同然の槍捌きでは全く相手にならなかった。

それどころか、ランサーが近くの敵を薙ぎ払っただけで、すぐ再起不能になる。

手加減しているのに、余りに突破が容易だった。

「あー止めだ。他の連中にこの無人島から今すぐ出て行って連絡しろ。」

俺達もこの島から侵入する奴を追い出すだけで、本気で襲いに来たのなら始末するつもりだったからな。

ここへ来た目的だけ教えて、大人しくこの島から出ていけば手出ししねえよ」

変身が解除された学生達はランサーに怯えている。

艦娘達も青い顔のまま、答えづらい反応をしていた。

「き、強制…」

「あ?」

「強制契約させられたんです。」

「ここにいるみんな、被害者です」

彼らは武装を解除し、手を挙げて降伏した。

この島へ上陸するよう、強制的にこの島を搜索するよう指示されていた。

彼らは、この島を慎重に調べることもせず、奥へ奥へと進んでいる。

「…被害者ってどういうことだ? 攻めてきたんじゃないのか?」

「各鎮守府と、それ以外の存命している艦娘達を襲撃して、深海棲艦と艦娘及び妖精を無理矢理船に入れるように…命じられました。」

逆らったら…みんなっ」

そう返答した艦娘の皮膚は鳥肌が立っており、顔が青白くなっている。

ランサーがため息をついて槍を収めると、戦闘態勢に入っていた彼らは緊張の糸が取れたかのように立てなくなってしまう。

座り込む者もいれば、膝と両手を地面につけてゼイゼイと喘息気味に呼吸する者もいる。

「うっ…お、ええっ…うぶつつつうええっ」

「お、おいおい。大丈夫なのかよ?」

中には武装していた一人が変身を解くと、過度なストレスに耐えきれず両手を口で押さえ、吐き気を催す。

艦娘はともかく、命を賭けた戦いなんて無縁なごく一般的な民間人まで適当に力を渡して鬨に放り込まれている。

(ハア……たく、ひでえことしやがる)

そんな彼女らを見てランサーは不愉快だと感じている。特に戦いが素人な人達を、無理矢理勧誘して戦場に放り投げられた。

武器も防御しか扱えず殺されるという恐怖に足がすくんでいる時点で、何かと察しはしていた。

艦娘も傷だらけ、万全の状態ではない。

戦うこともままならない彼らに、こんな非道な指示した奴が全く以って気に入らなかつた。

「で、一体誰に命じられた」

「それは……正義側の」

返事を聞く前に鎌を持った大男が襲い、会話を遮る。避けた先には魔法陣が展開され、地面が隆起するも、着地してすぐにまた移動する。

「……チツ、今度は何だ？」

ランサー本人が最速のサーヴァントの一人であり、次の行動に転じるのも早かったことから、隆起による岩で貫かれる前に、避けることに成功した。

「分かってはいたが、やはり彼らでは力不足だったか。」

「いつ我々に気づいた？」

「この程度の気配に気付けなきや、英霊なんてやってねえよ。アンタ達が何者かは知らねえが、その二人からは殺気を感じたぜ」

大男の背後には杖を持った兵士達が構えている。戦わされた市民とは違い、この三人が戦い慣れをしているのは見て理解した。

「また次から次へと…変わった連中が上陸してやがんな。こいつらの仲間か？」

「利害関係、といったところか。俺の方は生け捕りできない強敵なら、手短に始末しろとの指示でな。」

殺さないようにしてるみたいだが、彼らを見逃しても無駄だ。

立場の低い連中は生きて帰っても地獄、進んでも地獄。むしろ殺してもらった方が楽になる連中もいるだろう」

「立場の低い？ ああ…薄々感じたが要するにおめーら仲間同士で差別してんのかよ？」

この馬鹿げた指示を送った奴は…いいや、アンタらが会話を遮ったせいで正義側しか聞いてなかったけど、その親玉が指示を送ったってことだよな？」

大男は、少し黙っていた。何と答えれば良いかと考えているが、瞳を閉じてから返答する。

「…想像に任せる」

「ああ、そうかい!」

答えを聞いたランサーは大男に急接近し、懐に入って心臓部位を貫かんと動く。

その男を確実に仕留めれば、残りの魔法使いの兵士を近接攻撃で倒せば良いだけ。指揮系統になっているのはその男のみ。

しかし、命の危機を察知したのか反射的に持つていた大鎌で凌ぐ。

「手短に殺るつもりだったんだが、少しはやるみてえだな。弱っているとこに来たつてことは、助けるつもりで」

「下手なことを喋るのは不味いから助けに行けとな。救う義理はない」

この男と二人の兵士達もまた親玉の指揮下で動いている。彼らが弱って情報を漏らさせないよう増援に来たのは確かだが、命を救うわけではなかった。

「そうかよ、ならここに来た以上殺される覚悟も当然出来てるつてことでいいんだよな?」

「無論、死にたくなければこの戦場にいない。

弱っているこいつらは例外だがな」

長々と話している最中に、転移陣が展開される。

ランサーと目の前の三人だけではなく、倒れている彼らにも転移される準備ができていた。

「時間か。この無人島にいる者全員が、決戦の地へと転移されるだろう。その見事な槍捌きと素早さ……侮れない強さを持ち合わせていると実感した。

我が名は、黒獅子ラルゴ。

再び相まみえる時があれば、こちらも全力で相手するとしよう」

「おい、決戦の地に転移つてのはどういうこと……何にも聞けずに行っちゃまいがった。

寺にいるマスターと嬢ちゃんらは大丈夫なんだろうな？

仕方ねえ、ちよつくら行つ」

そう呟きながら、転移陣が発動する前に残りの時間で寺に移動しようと移動するが、そう決める前には転移される。

ーもう砂浜には、誰もいない。

寺の正門では既に戦闘が開始した。門がダメだという情報が出回ると、別働隊が裏道から寺の中へ入って行く。

正門はアサシンが守っても、その外壁を守りきれなかったら拠点は瓦解する。ライダーと桜だけではなく、榛名達も艤装を展開して移動する。

あらかじめ寺の両側には大きな壁を作つて塞いでおり、寺の裏側のみ防ぐこととなつた。

敵には人数の差で負けてはいるが、無気力の有無で差は大きく開いている。ただ命令に従つて動くだけで、この場で指揮して全員を統治する者が誰一人いない。

何かに怯えており、まるで強迫観念で戦わされているように思っていた。

自棄になつて登ろうとすれば、艦娘の砲撃とライダーの蹴りで転落していく。もう彼らは登るのを諦め、戦う気力どころか正気を失つていた。

聞いていた話と違つたと作戦を投げて逃げ出し、戦うのが怖いからと戦闘拒否をして降りていく。

「桜、何か様子がおかしいと思いませんか」

「…ライダーもそう思う？」

「彼らにこの寺を、本気で攻め落とす気があるのかと」

彼らに全くの戦意が感じられない。

このまま臆して引き下がってくれば、苦難なく正輝達と合流してゆつくりと今後の話を進める事ができる。

「攻める気がないのでしたら、深追いは必要ないですし……このまま追いかうだけで問題ないと思います」

「その通りですね。」

寧ろそうしてもらった方が、こちらも」

しかし、それを許さない仲間がいた。

「……」

「お、おいつ、何やってんだ!」

その中の一人、五十鈴は無言で銃口を向けつつ、狙いを定めて砲撃しようとする。

無抵抗な彼らの背中を狙って殺そうとしたところを、摩耶に止められる。

「やめてよ! 狙いが定められないじゃない!」

今ここで仕留めないと、躊躇してたらアタシ達が殺されるのよ!?」

「おまつ……躊躇も何も戦意のない人をこれ以上追撃する必要はねーだろ!」

「最初は提督に足蹴りにされて、不要な五十鈴は何も廃棄されてきた!」

アンタだつて殺者の楽園っていうよく分かんない連中の都合で姉妹艦を魔改造され

て!」

「ふ、二人ともいがみ合うのはやめ」

そのとき、一発の砲撃が鳴り響く。

変身を解除して逃げ惑う彼らを、艦娘らは殺害した。平然とした顔で、彼女達は死にたくなければ無力な彼らに進めと命じる。

「だ、誰か助「さつきと進め、この人間風情が」ごめ、なさい…」

「いやああああっ！」

言う事を聞かないと今度は拳や蹴りで、奮起させる。さつきまで止めようとした朝潮もいがみ合っていた摩耶と五十鈴ですら漠然としたまま額から汗が流れ、その方向を見ている。

「お、おい。あいつら味方じゃ無かったのかよ…何の迷いも躊躇なく撃って、暴力で従わせて」

「うそ…私達が逆の立場になったら、彼女達みたいにああなってしまうの…」

「これじゃあまるで…人類を脅かしている深海棲艦のやっつることと何も変わらない」

提督や憲兵への迫害、自滅行為ストレスの強行突破の作戦、鎮守府内での環境の悪さと理由は様々だが襲って来た艦娘の大半は人間によって心を病み、そして嫌悪している。

『砲撃は威嚇射撃にしておいてよ。懲らしめるのも良いけど、死んだら勿体無いじゃないか。』

彼らには被害者役の出演をしてもらうんだから』

艦娘が人間を痛めつけている時に、ポケットに入っていた携帯が鳴っている。彼女が暴行をやめて電話に出ると、男の人が叱っていた。

遠くにいる桜達には、全く聞こえない。

突然、携帯の音が鳴ったと同時に艦娘全員が暴行をやめて指示を聞いているのを眺めていた。

そんな時、正輝の転移時間に守り切ったことで士郎と凜が迎えに来た。

「無事か桜っ!」

「先輩、姉さんも!」

正輝達が寺に転移し、桜達の加勢に向かう。

彼らの声のする方に摩耶達は顔を向けるが、冷静ではない。まだ正輝の仲間を紹介していないのだから、敵が味方か分からない彼女らは武器を構えていた。

「ちよつと、アンタ達誰だよ!」

「武器を下ろしてくれっ!!?」

俺の仲間だ、敵じゃない!」

「気持ちわかりますが、落ち着いて下さい!」

「浜風…戻ってきたのね!」

正輝が前に出て、攻撃しないよう声を上げる。

本当なら船に入れる云々の話をしてから、船内の仲間について落ち着いて話すつもりだったが、今の緊迫状態だと正常な思考ができない。

襲撃されている以上、警戒を解けないのも重々理解している。

だから、彼女らを抑えるために浜風を連れてきた。

「平坂はこの寺を襲つてきた人達を洗脳、動ける奴を暫く眠らせとけ！」

「はい、任せました!!？」

早速、平坂に指示し、催眠で眠らせるよう口頭で伝える。

疲労で身動きが取れない人は事情を聞くようにする。

(にしたって、あの連中が腰につけていた…まさか)

地面には彼らが腰につけていたベルトが転がっており、既に先程の戦いで破損している。

彼はその壊れたベルトを拾い、投影開始していくと、信じられない結果に目を見開いた。

「はあ!!? おい…なんだこれはっ!!?」

信じられるわけがなかった。

この力が悪用されていると竹成知れば間違いないと憤慨すると。

——魔術で解析した結果が、そのベルトが仮面ライダーの力と似ていることに。しかも、その力には制限が施されてなかった。

さつきまでそのベルトを使って戦っていた学生の男を捕まえ、彼らに力を差し出した相手か誰かを尋問した。

「おいお前っ！ 一体誰にこの力を譲渡した!!？」

「た、助けてくれ！ 俺達は戦わされて！」

「良いからさつきと答えろ！ この力が存在する世界の出身地で生きて手にしたか、うちの先輩くらいじゃないと貰えない代物だ！」

そうじゃ無かったら神様絡みの譲渡か、その力を掌握している奴がいるんだろう！

でもな、一番気がかりなのはこの力を大勢が持っているって事が問題なんだよ！

一体どう言うことか説明しろっ!!？」

それともこの状況を正義側の神が易々と許容してんのか!!？」

「な、何だよいきなり急に!!？」

そんなの知らねえよ!!？」

知るわけないだろ!!？」

制服を着た女の子：艦娘って連中が、その子の持つたカバンの中に渡されたもので戦ってくれて言われただけなんだよ！

こっちだつて何も知らないんだよおつ!!?」

(神様以外の他の奴から力を施されているだど!!?)

だとしても、渡すにもこんな大人数に力を譲渡なんてしたら。

んなバカな話が…)

能力に制限が掛けられている一般の転生者よりも、転生者以外の縛りのない民間人や他の種族達を強制的に船へ勧誘し、力を与えてぶつけさせる手段も例外ではなく一つの方法でもある。

この方法なら規約に違反しておらず、神に問い合わせてもやり方そのものはルール違反はしていないと門前払いされるだけ。

ルールのにはセーフだが、仮に転生者以外の人物がライダーの力を与えたとしても怪物と関係しているところがある。

そのライダー世界に介入して得たのか、その世界で能力の譲渡に長けている人にもでも気に入ってもらったか。

だが、この莫大な人数分の力を集めるのにも大量の時間がかかる。そして譲渡する者がいるとしてライダーの力を無差別に与えることがどれだけ危険なことかぐらい流石

に分かると。

「そうでなければ、ただでさえ様々な世界に介入しているのだから他の神も看過できないと動いている。」

しかし、大勢に使われているこの現状を神は許していた。その力で蹂躪しても構わないと、黙認している。

（それで敵の怪物まで無尽蔵に出現したら最悪…敵組織を倒す以前に世界が滅びかねないんぞ!?!?）

殺者の楽園が蹂躪する前に、ライダー達の敵怪物が大量に出現して蹂躪する未来しかない。

敵組織の数の暴力よりも、大いなる力に振り回されて自滅する方が早期にやってきてしまう。

仮面ライダーの力以外で例えるなら魔術も危険な代物であり、その力を大勢の民間人に公にするようなもの。その力も下手に扱えば危険だつてことぐらい凜や未熟だった頃の士郎ですら分かる。

「…アサシン、もう終わったのですか。」

「正門で襲ってきた彼らを始末しなかったのですね」

「寺を守れとは言われたが、命までは奪えとは誰も言わてはいない。」

私の好きなようにした」

アサシンも正門から寺の中へ戻っており、大した怪我もしていない。刀も、血で汚れておらず誰一人殺していない。

「案ずるな、暫くは動けん。」

あやつらの動きはまるで命じられて戦っているように見えた。

強い意思が感じられん、まるで機械のようだ」

「ああうん……まあいい。」

再起不能にさせたってことでいいんだな。

それじゃあマミは拘束魔法、翼は影縫いで残っている連中を動けないようにしとけ。

コイツらに聞きたいことが山程あるが、事が済んでからだ」

「ええ、分かったわ」

「承知した」

敵は戦う気力を失い、立つ力すら持てない。

正輝達が彼らを取り押さえ、一人一人追って説明を聞くこともなる。

無人島を調査したこと、何が目的で武装していたのか、誰の指揮下で動いているのか。

「無事、俺達がここへ救援に来れた以上、襲撃にきた連中もここを突破するのは」

敵は艦娘と仮面ライダーの力を得た一般市民だけではない。

「正輝達は譜歌・譜術の能力を知らないのだから。

ママが黄色のリボンで拘束をかけようとしたその時、女の歌声が聞こえる。その声を耳にした者達に強烈な睡魔が襲い、寺内にいた殆どが躓く。

(何だこの歌っ…急に眠気が!?!?)

「ちよつ、何よこれっ…!」

「聞いちやダメだ…俺達の意識を」

「眠気が…」

動けないのは正輝だけではない、艦娘達や士郎達、手傷を負った艦娘や仮面ライダーを身につけていた人達にも術をかけている。

「無事ですか、みなさん」

「セイバーっ…お前は大丈夫なのか?」

その歌の影響を受けてないセイバーは嶺からもらったアイテム『核鳥ソーダ』を使用して睡眠状態を回復する。

正輝達に使用したことで、朦朧としていた意識が復活した。

「ありがとう…にしても何なんだあの攻撃は」

「恐らく歌を用いることで意識を阻害し、強制的に気絶させる術です。

ライダーも私と同様、対魔力のお陰で凌げています」

「てことは、少なくともこれ魔力の類つてことだよな…つてか士郎達も眠りかける前に既に使用したのか」

歌が終わつたと同時に今度は何人もの兵士達が寺の周りに転移され、登っていく。

倒れている彼らを救出し、それ以外は腰につけた剣を抜いて構えている。

「あああつもう次から次へとつ…眠気を誘う攻撃をしてくるわ、敵も増援がやってくるわ…しかも俺達の知らない連中がぞろぞろと、つてなんだこいつら」

（襲つてこないだと？今になって倒れてる連中を助けてる…どういうことだ？）

正輝達と同じように敵も加勢に来たのかと思っていたが、今度は撤退しようとしている。今になって戦わされた連中を助け、正輝達が生け捕りにしないよう下がっている。

「それで、どうするかね？」

動ける者で攻めることは可能だが」

「深追いはしない。まずは仲間の回復と、寺を守ることを優先しよう」

アーチャーがこのまま追撃を提案するが、あの歌で仲間の殆どが強烈な睡魔に襲われたばかりだからすぐには動けない者もいる。

増援で助けに来た兵士達は仮面ライダーの力を纏わされた市民よりも、命を擲つてでも戦う覚悟が備わっている。寺から離れるように移動し、後方へ下がっていく。

しかし、また新たな異変が全員に生じる。

(ちよっ!? 転移陣!? 連絡も来てない上に、強制転移って一体何の冗談だ!??)
「今度は何!??」

今度は、一人一人に転移陣が展開されていく。

いきなり地面が光りだし、どこかに転送する準備が施されていた。

正輝があまり驚かなかったのは試練編の時に时空管理局の話に響が割って入った際、邪魔だった彼女を携帯を使って強制転移させているため、強制転移がどういふものかを知っているからだ。

この島にいる対象者全員に転移陣がかけられ、

着信音が鳴り、画面を確認すると神という表示されている。

『ワシじゃ。皆強制転移させられそうじゃな』

「一体これはどういふことだ!??」

あの仮面ライダーの力や転移のことも俺達何も知らされてないんだぞ…!!?」

『いや知らん知らん。全員を強制転移させるなんてこと初めてなんじゃが…これは異な
のかのう?』

「転移されるのは、私達だけでは無さそうです」

襲ってきた敵達もそのまま転移されていく。

意識のある人は怯えて、転移で拠点に帰ることを拒んでいる。

「も、もう時間切れなの!!?」

せめて一人だけでも」

「まだ俺は戦えます!だから」

「いや、戻りたくない!また戻っても閉じ込められ」

脅していた艦娘ですら青ざめ、転移する事を拒む。何の成果も得られないまま無人島に上陸し、ボロボロになっている。

画面が切り替わり、神の次は船にいる仲間達から連絡が来ている。

「今度は何だ!」

『ミッテルトフス!急に転移装置が始動して…船の中にいるウチらも転移されるみたいでみんなパニックになってるから急いで戻ってきて!」

とゆうよりも、突然装置が暴走してるみたいで何とかしないとかなりヤバいつてゆーか…』

「おい…おいおい、ちよつと待てよ。」

それじゃあ…」

『が、外部からの攻撃じゃ、まさかそんなつ…』

(外部からの攻撃って、こんな事初めてだぞ!!?)

ロープといった第三者側の陣営が出てくることもあったが、今まで船に直接仕掛けて

くるなんて事は一度も無い。

転移装置が故障し、ついさつきまで修理が終えたのに暴走したというのは不可解だった。

(修理したのに、また暴走ってどういうことだ!!?)

ただでさえ転移される世界のことともまだ分からないっていうのに：もし仲間全員がバラバラに転移っていう最悪な事態になったら。

いくらなんでもそれは不味いだろ!!?)

「おい神様！もう悠長に連絡してる場合じゃない！

さっさと強制転移と暴走してる装置をどうにかしろ！

下手したら全滅するかもしれないんだぞ!!?)

『わ、分かっとなるわいっ今すぐに』

神がそう言い切る前に転移は完了し、無人島には誰一人取り残される事はない。

一同、強制転移によって別世界へと飛ばされてしまった。

決戦編開幕―歌姫と蘇生と復讐と

3 話海鳴市? (正輝ルート)

「つつ…ん、ここって公園か？」

それにしたって見覚えがあるような…」

景色を見て、そう呟いたのは正輝だった。

無人島にて強制転移され、到着した先は見渡すと、そこには滑り台とブランコといった子供用の遊具が置かれてある。

「もしかして…最初にフェイト達と出会った場所に転移された?」

「そうみたいですな」

「おおつ、セイバーっ!?」

いつの間になっていたのかよ」

正輝の真後ろにセイバーが立っており、声に気づいて振り向いた。

「転移されたのは私だけではありません」

「あのセイバーさん、ここって」

「二人とも何か心当たりでもあるのか？」

「アタシらは全く知らないんですけど」

船に待機していた響とクリスも、同様に転移されている。正輝と同行していた浜風も、急に見知らぬ場所に転移されておどおどしていた。

「まだ船の存在や殺者の楽園すら知らない…最初にセイバーと介入してたのが、この場所だ」

「フェイトちゃん達とも出会ったんですか?」

「ああ、出会ったよ。」

泊めてもらう為にはジュエルシード集めに協力してたし、そんな時のフェイトは母親のプレシアとはまだ和解してなかったしな」

(帰ってきたなら、フェイトへの家にも行けるな)

懐かしい場所に辿り着いたのか、セイバーが教えてくれたおかげで正輝は少し安心していた。

クリスと響は前に来たことはあるものの、浜風だけがいきなり知らない場所に転移されたことで、オドオドと辺りを見渡している。

「その…私と正輝さん、セイバーさんはあの無人島で戦っていたはずですよ?」

「確かに戦っていたよ。だが、あの強制転移によって…無理矢理この世界へと介入させられることになったわけだ。」

他のみんなもどうなってるか、まだ確認できてねえが…それは、これからだな」
そう言つて正輝は、携帯を開く。

正輝から仲間として登録される以上、まず船にいるかどうかも分かる。もし全員が何処かに強制転移されたのなら、船には誰もいないはずだと。

「ちゃんと神も仕事はしてるみたいだな…まーた連絡取れないけど」

「船に残っている人もいるが、俺達みたいに転移された人もいる」

「そうですか…」

正輝が確認し、船の人員を確認する。

詳細を開き、船にいないメンバーを確認すると

衛宮士郎、遠坂凜、アーチャー、レイナーレ、ミッテルト、鹿目まどか、暁美ほむら、美樹さやか、バマリ、風鳴翼、天羽奏。

約11人の強制転移により行方が分からなくなっている。無人島にいた残りもどこかに転移されたか、まだ確認ができていない。

「うわっ、試練編までのメンバー全員かよ…それ以降仲間にしたのは船にいるんだな」

「では…士郎達も」

「何度も俺の船に転移するよう操作してるけどエラーで戻れないし、神とも連絡は取れないし。」

ほんっと、どうしたもんか」

誰が強制転移されたかは分かったが、次にどう分断されたかが問題だった。無人島の人達が、既に何人か船に転送されているかもしれないと。

「でも街灯以外周りが真っ暗すぎないか…?」

どんなホラーゲームだこれ。

それとも深夜の時間帯にでも転移されたのか。

にしたって暗すぎて先がよく見えないんだが…」

「正輝さん。上を見てください…月がありません」

「あ、ほんとだ。」

浜風ちゃん、よく分かったね!」

「…通りで辺りが暗いわけだ。」

てゆうか何で月がないんだ?」

浜風の言う通り、月が出ていない。

そのせいとか、街を照らすものは街灯だけであり、街全体を探すにも灯りを辿りながらでないと分からない。

「俺は周りをシャドーで散策させる。」

携帯を持ってしている3人は船に連絡取れるか確認しといてくれ。

ライトも渡しておくから、確認できたら公園の周辺を散策すること。

いいな？」

そう言い、投影魔術で作成した懐中電灯を四人に渡す。

正輝はシャドーが帰ってくるまでの間は公園に留まり、四人は渡された電灯を付けつつ電話をしながら確認していた。

なるべく奥の方へ調べる際は、目印がわかるよう正輝にランタンを貰い、

数分後、シャドーが帰還し情報を確認する。翠屋に小学校、フェイトとなのは家、至る所を探しても人のいる気配が全くしなかった。

『全く人が見当たりません。該当する人物だけではなく、マスター含む4名以外の生存反応がありませんでした』

「おかしいな…なのはとフェイト達がいらないどころか、民間人が見当たらない。

どういふことだ？」

「何処かに避難したんじゃないのか？」

「いや…避難した形跡が全くない。仮に避難するにしたって、ここまで綺麗に部屋を出たってなると逆に不自然過ぎる」

（全市民が用意周到にこの海鳴市から出て行いける余裕があったのか？

普通避難って危険が迫った時に部屋が荒れていてもおかしくない。

しかも水道も出て、電気も通って、ガスもちゃんも使えている。

そもそも人がいないのに何でライフラインが繋がってんだ? 災害があるわけでも無いみたいだし、逃げ出す理由が一体何処にあるんだ?」

建物にもブレーカーのスイッチと電力を入れればエレベーターもエスカレーターも起動する。

民家も、学校も、都会ビルも、コンビニやスーパーまでの至る場所が海鳴市を再現させていた。

まるで、正輝達が来る前までは誰かが生活していたかのように。

「まさか人だけ姿を消した神隠し…」

「人が完全にいなくなったら、ライフラインも機能しねーだろ」

『マスター。可能な限り散策しましたが、この街の建物は真新しく、そこに住んでいる痕跡もございません』

「おいおいマジかよ…ええ」

少し考え、何かこの街について変わっていることがあるか索敵することを閃いた。

「えーつと…それなら、人以外で…何か不自然な箇所があれば連絡を頼む」

『了解致しました』

人がいないなら、この街以外に何処か異様なところがないか探せるか、人がいなく

なった原因があるかもしれないともう一度散策させる。

「ところで、3人とも繋がったか？」

「電話しましたが、いいえ全く繋がりませんでした……」

「もしかしたら四人全員……回線が入らないから連絡できねーんだろーうな」

「俺の携帯は船内の確認は可能だったが……連絡は3人と同じく無理ってことか」

それから、数分が経つ。

電波の届かない上に正輝達以外誰もいないこの海鳴市で、シャドーの連絡をずっと待っていた。

『探索、完了しました』

「ご苦労。じゃ、戻って良いぞ」

散っていったシャドー達が正輝の影に戻っていく。

情報収集していた情報が正輝の中に入っていく、他の3人は遠くを探していた。

「さて、ここらまで調べて分かったことは……っ」と

・ 正輝と仲間が身につけている時計以外が全て止まっていた。

・ 月がないため、辺りが真っ暗。

温度は地球とほぼ同じ。

・ 民間人だけではなく、動物等の生き物すらいない。

・ バス・車・トラック等の乗り物が置かれていが、ガソリンは積まれてないから乗っても意味がない。

・ 食べ物といった腐っていくものは置かれていない。

得た情報を携帯のメモ機能を利用しつつ、入力していく。

なぜこの不可解な場所に転移されたのか、もしこの場所がまた今後関わることになったらここで調べた情報は絶対必要になる。

強制転移とはいえ、何の意味もなくここに転移させたとは正輝には思えなかった。

「それで…公園の方は限なく探したか？」

「ええ、気になるところがあります」

「公園付近の電柱です」

帰ってきた四人が目を向けていた方向は、電柱だった。

懐中電灯のライトを公園付近の電柱に当てると、複数ものバーコードのシールがびっしりと貼られている。

「こりや凄いな…誰がこんなに貼ったんだよ」

「他の電柱にもたくさん貼られます」

でも、貼られてるのは公園周りだけで遠くの電柱には何もされて無かったですね」
「なるほどな、シャドー…」

シャドーを使用し、再度リーダーを呼び出す。

詮索した中に柱と同じようなものは貼られてないから確認する。もし他にもあるのだとしたら、何かしら深い関係があるのかと思っていたが

「遠くにある電柱に、バーコードらしきものは貼られてなかったか？」

『この公園の電柱以外にバーコードが貼られるところは見当たりませんでした』
「てことはここ以外他には貼られてないってわけ？」

『はい。これ以外にバーコードらしき物は何処にもありません』

「あーうん。」

分かった、ありがとな」

結局、異様な所があるのは電柱のみで、え調べる以外他になかった。

「でも、こんなあからさまに貼ってるのも、罠って可能性もあるよなあ…うーん」

長々と考えつつも、ここに止まっても仕方のないことだった。仲間も離れ離れになっているのなら、燻っている間にも命の危険に晒されている。

「…考えても仕方ないか。」

ちよつと試しにかざしてみるぞ、みんな構えとけ」

「はいー!」

「分かりました」

響とクリスはシンフォギアのペンダントを、浜風は大砲を出現させて戦闘態勢に入る。バーコードの読み取り機能の画面に変え、電柱に近づきつつ、照合させる。

『確認しました。これより転送します』

「…は!? えつちよつ」

すると画面には認証が確認され、機械音声で鳴った。転移陣が四人の立っている場所に出現し、カウントダウンもないまま音声が終わると同時に転移される。

バーコードによって転移された場所は、前に強制転移された公園へと戻っていった。場所も風景も前来た場所と変わっていないものの、強制転移された時とは比較して空気が違っている。

前よりも辺りが明るかったことと、建物やマンシヨンの灯りもちらほらついていること。

「えつと…また、公園に戻っちゃいましたね。」

でも」

「ああ。同じに見えるようで、明らかに前来た時とは違う」

転移を終えると、正輝の携帯からメールの着信音が鳴り、メール画面には登録完了との件名が入っていた。

（バーコードの登録？）

こんな機能無かったと思うが…）

バーコードが表示され、いつでもあの場所へ転移できるようになっている。

こんな機能を神は何も話していない。

いつの間にか携帯に搭載されていた。

「正輝、アタシらまた同じところに戻らされてしまったのか？」

「…あの世界で動いてなかった公園の時計塔の針が、今じゃちゃんと動いている。

無かったはずの月もある」

正輝の言う通り、街にある時計の針は動いており、空を見上げると無かったはずの月が夜の街を照らしていた。

「人の声もする、道路も乗り物が滑走してる。

俺達は誰もいなかった海鳴市から、本来の海鳴市に戻ったんだ」

「ええ、以前転移された公園の電柱には何枚もバーコードを貼られてましたが、何も貼ら

れてありません」

何枚ものバーコードを張られていた電柱だったはずが、何も張られていない。

全くの別物として、転移されていた。

「でも結局あれって…一体何だったんですかね」

「…俺にもさっぱりわからんが、その話はまた後にするぞ。

すぐにも強制転移で分断された仲間と合流したいところだが、もうこんな時間だ。

まずはフェイトの家へと向かいつつ、各自連絡する。

家で休息を取って、それから作戦を立てよう」

(あの場所…最初は美遊達とのクラスカード回収の際に境界っていう場所と似てるな…って思ってたけど、少し違うかもな。だって探索させたら海鳴市を…もう一つ丸々用意してたんだぞ?)

幾らなんでも大規模過ぎるだろ)

そう言いつつも、正輝だけがあの空間のことで考えていた。

シャドーの散策結果は個人的になんとも信じれないものだったが、それを受け入れるしかなかった。

バーコードを貼られていたあの世界では、海鳴市全域を再現されている。そこから先の市外に出ることはできず、何かしら見えない壁で塞がれていたことも。

水道水も、電力発電も自動的に作っている。

(いやいや、待て…用意するとしても一体何の為に使うんだよ。

誰がそこまでやるんだ？

実際にあつたのは分かったけど、何であんなの用意した？

用意したとして、得する人物っているのか？

殺者の樂園か？俺以外の他の正義側？

それか、ロープ陣営の連中がまた何かしら絡んでいるとか？

そもそも人がいないはずなのに、どうして居住可能なこの仕組みにしたんだ？

でもバーコードで転移ってまるで…いや、幾らなんでもそれは考えすぎか？)

候補が多すぎて、心の中では気が動転している。自分達を強制転移された場所が何故あの作り物の海鳴市に転移されたのか、あの電柱のバーコードから元の世界に戻るとしてもどうして転移された場所の近くに用意されていたのか。

特に深い意味は無いのかもしれない。

が、どうにもタイミングが良すぎる。

まるで、あの場所へ誰かの意図的に転移させられたかのように。

「あつ、携帯の回線が回復しました！」

「これなら船に繋がりますね。」

他の艦娘達の居場所も知りたいです」

「よし、おい正輝…何考え込んでんだよ。」

今からでも船の方から連絡するのか？

どうするんだ？」

「ん…ああそうだな。家まで移動しながらでも連絡」

さつきまでいた場所から転移されたことで、船との回線も繋がるようになる。

これで船の状況を確認しようとしたその時、今度は人も車も消え、広域結界に巻き込まれた。

爆発音が近くで聞こえ、セイバーが先にその音の方角に反応する。

「結界つ…? それにこの音って…もう誰が戦っているのか!?」

「魔力の気配が複数あります。」

なのはの魔力も感知しました」

(あのバーコードのことも気になるが…考えるのはバラバラに転移された仲間と合流してからになるな)

なのは達だけを遅い結界を張っているということは、未だ敵対している綺羅と麻紀達か時空管理局がしつこく襲ってきたのかと考えられる。

いくら強くなっても多勢に襲って来ている可能性もあるため、すぐにも助けに行かなくてはならない。

「セイバーと雪音、立花はなのは達と合流！」

俺と浜風は裏から監視してる奴を探してポコってくる！

少なくとも、この戦闘を監視している奴がいるかもしれないからな。

船にいる仲間との連絡は、その後でやるぞ！

3人は先に行け！

いかなかったらいかなかったで、俺達は後から向かう！」

「分かりました！」

「正輝も、危険を感じたら令呪で呼んでください」

その声と同時に二手に分かれる。セイバーが前に出て魔力をたどり、クリスと響は歌で聖遺物を纏い、背後をついていく。

浜風は主砲の25mm三連装機銃と空を飛行する敵の索敵に用いる21号対空電探、爆弾用に使う61cm四連装魚雷装備一式を確認し、戦いに備えていく。

「…準備、整いました。いつでも行けます」

「よし、なら浜風は俺についてこい。」

で、シャドー……この戦闘に乗じて、高みの見物を決め込んでるやつを探せ。

見つけ次第、俺に報告しろ」

『承知しました』

正輝は再度シャドーを呼び出し、この戦闘に乗じて隠れ見ている敵を探すよう指示する。浜風もレーダーを探知させ、隠れて潜んでいる敵を探していく。

こうして正輝達四人は二度の転移から早々、なのは達と一緒に戦いの争乱に巻き込まれることになった。

もう、闇の書の事件だけでは済まされない。

正義側絡みも含めた闇が絡んでいるのを、思い知ることになる。

これはまだ、その始まりに過ぎないのだから。

4 話敵襲「前」(正輝ルート)

なのはとフェイトは、平穩に学校生活を暮らしている。

二人はジュエルシート事件から正輝達と、嶺達と出会い、その後も色んな事が起きたことは今も忘れていない。フェイトは正輝の暗い過去を知ったことも、高町なのはは洗脳されていたとはいえ自分の犯した罪を、少女達の胸には今でも深く刻まれている。

正輝達と嶺達と別れ、もう半年以上が経つ。

正輝が未来日記の世界に旅立ち、高町なのはとフェイトは嶺が留まるまでの間は日々鍛錬を重ねていた。

正輝の試練編をきっかけで、既に二人とも洗脳に耐性をつけるよう嶺に頼んでいる。

デバイスを彼女に預け、グランデイによってレイジングハート・バルデイツシユの性能は強化済み。

自分の身を守るためにも魔法を練習し、二度とあんな悲劇を繰り返さないよう頑張っていた。

既に、グランデイと嶺からデバイスにも上乘せして強化が施されている。

《お疲れ様です、マスター》

「うん」

嶺も別世界は移動するまでには家にも姉の改造が施され、なのは達には護身用として呪符とタロット等のアイテムを持たせている。

何も知らない正輝が嶺が何をやって魔改いたのかを知るの造は、少し先の未来となる。

1 2 / 2 夜

なのはとユーノは、フェイト達と念話で通話している。

フェイトとアリシアの二人が学校へ行くことになってからは、なのはが学校のこととずか達も魔法について知ってることで楽しく話していた。

ジュエルシードのような事件が起きることなく、二人は平凡に暮らしている。

『そう言えば…管理局のみんな、誤解してるのかな。』

正輝さんのこと』

『…そうだろうね』

試練編で起きた事件を、まだ管理局は引きずっている。

管理局に関与し、その一週間後にリンディからもう一度話をしましょうと約束したのも、試練編での事件が起きて以降からは碌に話すことが結局出来ないままだった。

管理局はジュエルシード集めの最中に正輝似せた差別者に襲撃され、正輝本人は濡れ衣を着せられる始末。

本当ならユーノも増えたジュエルシードを回収し終えた次第、故郷に帰ることになったはずなのにも戻れなくなっている。管理局には敵視され、なのは達で増えたジュエルシードを回収せざる負えなくなってしまった。

『その……ユーノ君、ごめんね』

『こればかりは仕方ないよ。』

僕も、気づくまでは誘導されたから』

二人も、正輝を責める事はできなかった。

反逆者がなのはとレイジングハートは洗脳し、フェイトに殺傷設定のスターライトブレイカーを撃ってしまったことも。ユーノもその影響を受け、なのはと共に騙されたまま動いた事を悔やんでいる。

『なのははレイジングハートは自衛の為に持つておかないと、もし前みたいに嶺さんがいない間に襲われたりでもしたら』

『うん……そうだよね。』

今のところ何もなければ安心してる』

前の時と同様に、なのはと家族全員が襲われる可能性だって十分にあった。だが、正輝が追い払って以降全く接触しようとはしなかった。

『それに管理局も下手に手を出したところで、戦力を削ぎたく無いと思うんだ。

ただでさえ、人手不足なのに…上条さんみたいな異能を消す力でデバイスを何度も壊されるのは絶対嫌だと思うから』

『あ、そっか。手出しできないんだっけ』

『うん…直接は無理だと思う』

一度目に襲撃された時は死亡者もいたが、正輝達を直接襲った時はデバイスのみしか壊していなかった。

リンディもこの違和感に、気づいてほしいのを望んでいる。ジュエルシード回収を邪魔し、管理局の敵になっても不利益なことを。

寧ろ、その戦闘中に乱入してきた敵は遠慮なく殺す気で襲ってきている。

『私やなのは…その関係者に手を出せば正輝達も黙ってないし。やり過ぎたら、その分の仕返しを恐れてるんだ。』

でも…本当に手が出せないのはそれだけじゃないのかもしれない。正輝と嶺さん達

以外にも管理局にここを襲われるのは、都合が悪い人もいる可能性があるってことなのかな』

『でも……正輝さんと嶺さん達以外に私達を守ってるのって誰なんだろう?』

『私も、思い当たる節がない』

正輝が襲撃者として襲った結果、男子高校生に複数ものデバイスを素手で破壊されるわ、横から第三者の襲撃を受けるわと、時空管理局は正輝を捕らえに行くたびに手酷く返り討ちにされたことは幾度かあった。

リンデイ達以外の他の管理局がやってくるかもしれないなかった。しかし、あの事件以来は何事もなくこれまで通り学校に行き、こうして平和な暮らしをしている。

《警告、緊急事態です》

なのはが夜にフェイトと電話している間、その日の夜に事件は起きた。誰かの特殊な結界が貼られてはいるものの、姉の改造（グランデイの強化）によつて念話が遮断されることもない。

『……誰か分からないけど結界が張ってるの。嶺さんのお陰で、念話が遮断されてなくて良かったけど……』

『分かった。私も、アルフを連れてなのはこのところに駆けつけるから』

念話の通話を遮断し、なのはは直ぐに出かける準備をする。

「ユーノ君は隠れながら、相手の出方を見て」

「なのはも気をつけて！」

「うん！」

なのははビルの屋上へ、ユーノはなのはがいる建物の近くへと別々に行動していく。一つの鉄球が浮遊し、なのはの方へ勢いよく飛んで来た。

《誘導弾です》

魔法弾を防いでるところを、今度は赤毛の少女が後ろから手に持っているハンマーで叩きつけていく。

「テートリヒ・スラーケン!!??」

攻撃を防御しても衝撃で吹き飛ばされてしまい、そのままビルから落下していく。

「レイジングハート！」

《stand by ready》

なのはは、咄嗟にデバイスを取り出して変身する。魔法で空を飛び、ハンマーを所持した赤い子に杖を構えた。

「いきなり襲いかかる覚えはないんだけど、どこの子！なんで襲って来るの！」

話しかけても、赤い子は全く返事をしようとしなない。なのはの声に耳を傾けようとはせず、ハンマーを振り回していく。

「話を…」

(「?」なんだこれっ…)

〈cannon mord〉

まずなのはポケットにある吊り男のタロットを隠しながら使用し、相手を痺れさせる。

杖を砲撃モードに変えて、攻撃する。

「聞いてっばー！」

〈divain baster〉

その攻撃を防ごうとしても、麻痺されたことで防御できないまま直撃した。

思っていた以上に生々しい音が聞こえ、逆になのはは襲ってきた相手を心配した。落ちて行く様子もなければ、かといって近づこうにも掴まれて防御できなくされるのも困っている。

(えっと、やりすぎちゃったかな…?)

牽制のつもりで撃つたはずが、大打撃を食らったような音で帰って心配する。煙の中にいたままで、無事かどうかよく見えていない。

〈ラケーテンフォーム〉

デバイスの音声が聞こえると煙の中から現れ、なのはは咄嗟の判断で防御魔法を展開

する。先程の砲撃で帽子を失い、怒りの表情になりつつハンマーを上を翳していく。

「ラケーテン…ハンマアアアアツ!!?」

「!?レijingグハートつ…!」

〈Protection〉

カードリッジを二つ使用する大技は膨大な魔力を込めて、確実に仕留めようとしていた。

特攻を仕掛け、

「ぶち抜けええええつ!」

しかし、身体が痺れていたことでバランスを大きく崩し、防御魔法は傷がついただけだった。先程の砲撃で赤い子は息切れをしており、ハンマーを振り上げようにも腕の力がそこまですていない。

(やべえつ…さっきのダメージで力が)

最初は勢いがあつたものの、先程受けたダメージのせいで段々と弱くなつて行く。

〈Flash move〉

(なつ!??)

「…ごめんね」

体力が落ち、麻痺でよろめいているのを見過ごさなかった。ハンマーの力が弱まったと

ここで、なのははすぐに防御から攻撃に転じ、高速で背後に回り込む。

初発で撃った砲撃魔法は三割弱程度のもので、掌に温存してある魔力弾は小さくさせ、本人の意思で一気に膨張。

そのままゼロ距離で爆発させた。

なのはの方が、一枚上手だった。

(アタシ、いつの間に背後を取られたのか。

それに体が痺れて動きづれえ…)

カードリッジで爆発的に魔力を高めたのに全く歯が立たなかった。デバイスは破損されなかったが、身体へのダメージが酷く思うように動けない。

『あ、フェイトちゃん。』

今さっき一人捕まえたけど…』

『もう少しで着くから、拘束魔法で抑えてもらってもいい?』

『うん、分かった』

両手両足で押さえていたバインドを、首、腹部、両手、両足まで念入りに拘束していく。フェイトが来るまで反抗できないよう徹底して身動きが取れないようにした。

「て、テメエっ…ここまでやるか普通」

「これ以上話せないなら、暫くはじっとしててね?」

(畜生っ…もう終わりなのかよ。

シヤマル、ザフィーラ、シグナム…はやてっ！)

ヴィータを逃さないようにじっと眺めていたなのだが、彼女の真上にはピンク色の髪をした女騎士が剣を振り下ろしていた。

レイジングハートとなのははそれを察知し、素早く避ける。

「勘がいいな、先程の攻撃を防ぐとは」

(仲間…一人だけじゃない)

女の騎士は、なのはがかけたバインドを魔法で破壊していく。ヴィータは拘束が外れでも麻痺状態のまま体の痺れが取れず、戦闘を続行させることはできなかった。

「助かった。」

でも畜生っ…思うように動けねえ」

「そうか、ならお前は引け。今の状態で戦えば、また返り討ちにされてしまうぞ」

「カードリツチでぶち込んでやったのに全くびくともしない。気をつけるシグナム、あの白いの…傷一つつけねられねえ。」

魔法以外にも何かしてきやがった」

2対1の状況に追い込まれるも、なのはは諦めるつもりはなかった。ヴィータは後退し、今度はシグナムとザフィーラが囲むようにする。

「多勢に無勢だが…悪く思うな」

「…3人かな」

なのは既に助けが到着し、機会を伺っていることも。3人の目はなのはだけに向けられており、ユーノが隠れていることに全く気づいていない。

「はあああつ!!?」

間を挟みつつ二人同時で、なのはを攻撃しようとしたその時、

『もういいよ、ユーノ君』

「何っ!?」

密かに隠れていたユーノがシグナムに急接近し、刃のような何かを振り下ろす。そのタイミング良くなのはは、シグナムの右腕をバインドで動けなくした。

シグナムはレヴァンティンで防ごうにも、腕はバインドで固定されており、すぐに曲げることができない。咄嗟の判断で左手に鞘を出現させ、防御に転じた。

「くっ…もう一人いたのか」

「なのは、大丈夫?」

「私は平気。ユーノ君はあの紫の人をお願い」

ザフィーラが攻撃してくるのをなのはは予見しており、振り向くことをせずし手を突き出しつつ物理防御の魔法を展開して防いだ。

シグナムは右腕のバインドを、左拳で叩きつけて破壊する。

「白いのだけじゃねえ……気配を消して隠れてやがったのか」

「間合いのタイミングも完璧だった。利腕を阻害し、防げないようフォローしている。

……判断が遅かったら、確実に斬られていた」

ユーノの持っていた武器を凝視すると、持っていた武器がデバイスでないことに気づく。

「……その刀、模擬刀か。」

魔力を纏わせているようだが」

「あ、うん。誤って殺すのはちよつと……ね」

助けに来たのは、ユーノだけではない。

ザフィーラが攻撃している最中に、頭上から黒い鎌が振り下ろされていく。察知した

彼は鎌を回避し、すぐさまシグナムのいる方へ移動する。

「ごめんねなのは……遅くなった」

「あ、フェイトちゃんにアルフさん。

来てくれたんだ」

フェイトとアルフも駆けつけ、これでまた人数差の形勢が逆転される。お互いの睨み合いの状態になり、それぞれの武器を構える。

「……多勢に無勢だけど悪く思うな、だっけ。

その言葉、そのまま返すよ」

「貴方達がなのはを襲った目的を、教えてもらおう」

「シグナム、やっぱ引くのは無しだ。」

いくら増えようが、全員ぶつ潰せば良いだけの話だろ！」

人数差で負けても、シグナム達は引こうとしない。それほどまでに勝てる自信があるのかと、なのは達は警戒しつつも互いに正面きつての戦闘が始まった。

結界の中、魔力の光が激しくぶつかり合う。

なのはとユーノの二人はヴィータ・ザフィーラを相手しているが、ヴィータは麻痺の効果によってあまり動けず、ザフィーラは攻撃してもなのはの防御魔法が硬く、守りに入る体制のまま攻撃に転ずることができない。

本当ならヴィータが攻撃の役目をするべきだが、今の不調では十分に力を発揮させることができない。

「くっ、防御が硬いかっ…長引けばこちらが不利になるぞ！」

「わーってるよ！くそッ…やっとなんかの痺れが治ってきてるのに」

なのはの方はまず砲撃魔法を撃ち、ザフィーラが防御魔法で阻止していく。そこから、ユーノが前に出てザフィーラの懐に入り、模擬刀で穿とうとする。

が、防いでいる間にヴィータが魔力弾を別に飛ばし、なのはと同じように遠くからの遠隔操作でザフィーラを守る。

『今ここでヴィータが脱落したら、戦況が覆されてしまう』

互いに攻防が激しいが、手負いを庇っている分にはザフィーラ達の方が不利になっている。嶺からもらったアイテムで一気に攻め込むことも可能だったが、

『……どうする？今なら二人を撃墜させることもできるけど』

『うーん……そうしたいのは山々なんだけど。』

何か引つかかることがあるんだ。

それが気になって』

(ヴィータって子がアイテムを警戒してるのもあるけど、他にも何か……)

このまま一気に攻めるのも、嫌な予感がしていた。

一対一での実力や、人数差でもなのは側が勝っているのに向に引こうとしない。それどころか勝機があるという気力で、二人とも襲ってきている。

相手の目論見はまだ分からないが、その勘は当たっていた。もう一人の守護騎士ごと、シヤマルが旅の鏡を使ってなのはのリンカーコアを狙っていることに。

「はああつ!!?」

「ふっ!!?」

一方のフェイト・アルフは守護騎士の将であるシグナムを相手している。アルフはバリアブレイクで破壊しようと、出方を見ている。

まだ相手に手の内は知られていないが、下手に横から割って入ろうとすればフェイトの邪魔になってしまう。

『アルフ…私に合わせて同時攻撃。

できる?』

『うん。

分かった、やってみるよ』

〈size form〉

デバイスフォームからサイズフォームへと変形させて、構える。

手を出さなかったアルフも、タイミングを合わせようと右手の拳を握る。

〈Arc Saber〉

シグナムの方へ振り下ろすと、鎌から光刃を飛ばした。

〈Sonic Move〉

「何っ…!!?」

飛ばした3秒後に、高速移動でシグナムの背後へ回り込んでいく。

「チェーンバインド!」

「ハーケンセイバーっ!!?」

振り向いたと同時にアルフが左手でチェーンバインドで動きを封じ、フェイトがまた更に強度の高い光刃を飛ばしていく。

二方向なら光刃が迫っていく、防御するにも鎖のバインドを素早く壊さない限り攻撃は免れない。

「つつ::レヴァンティン、カードリッジロード! 甲冑と焰を!!?」

〈Panzergeist〉

「バルディッシュユ!」

〈Saber explomed〉

カードリッジを使って魔力を一気に増大させる。まずチェーンバインドを破壊、レヴァンティンに炎を纏わせ、至近距離で光刃を爆発させる前に斬り裂いた。

真つ二つになった光刃は、落下して爆発していく。

「バリアブレイクっ!」

(この人::攻撃を受けてでも)

アルフのバリアブレイクによって魔力で強化させた甲冑を破壊したが、フェイト達の同時攻撃をカードリッジを何個か消耗し、凌ぎ切ったことで疲弊している。

(この場を切り抜けたとはいえカードリッジを使い過ぎた：数も残り少ない。連中も逃す気もないのなら、まだ効果を得ている時間内に一気に決めるしかないか)

「聞かせて下さい、どうして私達を襲ったのか。貴方達と戦うつもりは」

「事情を話すつもりも、引くつもりもない。」

我らには為さねばならないことがある」

フェイトには、かつて自分がこの地球に来た時と同じように、彼女達がこの街を脅かすような悪意を以ってやっているわけではないと思っていた。

直感ではあるが、彼女の曇りのない眼と信念で伝わっていた。

「為さねばならないこと？」

それってどういうこと？！？」

質問している最中に、シグナムのデバイスにカードリッジがまた装填されていく。人数差で押されているなら、まず一人を確実に撃破して形勢を崩そうと勝負を仕掛ける。

話すことはないと忠告し、それでも話をしようと試みている隙を狙った。

「紫電…いつせ、!?」

この一撃で、確実に一人を落とす。

レヴァンティンに炎を纏わせつつ、そのままフェイトに斬り込もうと斬り込むはずだった。

「つつ、もう一人いたのか!?？」

横から魔力を込めた剣圧を飛ばしたことで止められ、シグナムは飛ばした方向を見る。

そこには、青い騎士の甲冑を身につけた金髪の女性が立っていた。

「セイバーさん!!？」

「お久しぶりですね。」

二人とも、お元気で何よりです」

シグナムは、セイバーのいるビルの屋上へと着地する。風を纏わせた不視界の剣を持ち、魔力を放出させる。

「また新手か……」

「貴方達の目的は知りませんが、再起不能にさせてから教えてもらいますよ」

「クソツ、何でも敵が溢れてんだよ！」

シグナムの視線はセイバーに向けられた。

「魔力量も、剣圧を飛ばしてきた技量も相当危険だと判断し、浮遊をやめて地に降り立つ。」

(…並の騎士では勝てない程の実力を兼ね備えている。

私でなければ、落ちていた)

ヴィータの張った封鎖結界だけではなく、セイバーの接近に対して、二人が持つデバイスの探知に全く引つ掛からない。

「あの、セイバーさんが来たってことは…正輝さんも来てますか？」

「正輝は後から向かいます。現場で隠れつつ覗き見てる奴をちよつとボコつてくると言っていました」

「目の前にいる3人以外は見当たらないけど…他にもいるの？」

なのはとフェイトが魔力で探知しようとしても、目の前の3人以外は誰もいない。守護騎士達は彼らの会話を聞いて、ヴィータ以外は平静を保ちつつ念話で会話する。

『おい…まさか。』

シヤマルのこと、とつくにバレてるんじや。

こんなに仲間が来てるなら連絡だつて』

『ヴィータ、シヤマルのところに行け。』

ここはザフィーラと私で食い止める』

『で、でも…』

『表情を隠せ。もう一人こちらに居ることを感づかれたら不味い』

シグナム達は青い騎士が奇襲してきてからようやくと気づいた。だとするならば、何も聞かされてないシヤマルにも仕掛けてきている。

そもそもセイバーのような援軍が近づいて来てるなら、シャマルが感づいて三人に念話で連絡している。

しかし、シャマルからの通信が来ていない。

『お、おうっ…悪い』

「!??下がれヴィータ!」

しかも、正輝の仲間達は彼らに考えてる暇を与えない。セイバーだけではなく、今度はヴィータにめがけてもう一人が特攻を仕掛けていく。

「はあああっ!!?!」

感づいたザフィーラが拳を止めても、勢いは止まることなくそのまま建物の壁に激突。

(この女の拳…一撃が重くっ)

「ザフィーラっ!!?!」

「よそ見してる暇があんのかよ!」

ザフィーラが吹き飛ばされたと同時に、クリスが響同様、既に装者に変身してヴィータに乱れ撃つ。

今度は真下からガトリングによる弾丸の嵐が放たれる。

「なっ…んの野郎っ!」

ヴィータは物理防御で弾丸を防ぎ、その場から動けないように足止めされてしまう。シャマルを助けに行きたくても、もう2人も乱入し、こうして妨害されている。

『おい、シャマル！』

そつちは大丈夫なのかよ!!?』

こうして弾丸を防ぎながらも、シャマルに念話をするしか方法がなかった。

安否だけでも確認し、目眩しの閃光弾か旅の鏡を展開してリンカーコアを奪えるが、最悪闇の書のページが減っても

『ええ、大丈夫…でも』

『いるんなら、すぐに撤退の準備を』

『そうしたいのは山々なの。』

でも…やられたわ』

「動いたら、貴方を再起不能にします」

想像した通り、ヴィータ達の考えうる最悪なケースは当たっていた。

裏で動いている正輝は既に用意したシャドーによる影分身を5体向かわせ、シャマルを取り押さえいる。

少しでも魔法を使ってシグナム達を助力しようと思えば、一斉にシャマルを襲うことになる。

『念話で知らせようと動く前に、黒い影のようなのがいきなり襲いかかってきて』
『嘘だろっ…アイツらシヤマルにも』

彼女は手を出すことはできなかった。

全く身動きが取れず、少しでも何かしようものなら正輝のシャドー達はシヤマルの意識を失わせる準備はできていた。

守護騎士達が苦戦しているのを、眺めていた仮面の二人は焦っている。

早い時期にはやてと守護騎士達を監視していたが、

(クソっ…一体どうなっている!? 次から次へと…)

仮面の男は、彼女達守護騎士の監視をしていた。

本当なら徹底して動くのは管理局と接触して以降と考えていたはずなのに。きつかけは、仮面の男達とその背後に脅迫状が送られたことが全ての始まりだった。

「12月中に、八神はやて及び守護騎士を全力で守れ。約束を放棄した場合は、計画の全貌を守護騎士全員に暴露する」

この海鳴市には管理局の魔道士とは反して強大な連中達がこぞって集まっている。前の襲撃事件といい、殺人鬼の正輝を匿っているプレシアの拠点を攻め込むにも失敗し

た。

もし、彼まで闇の書に関わろうとしたら主人の凍結封印の計画が介入によってご破算になる。

その前に少し早めに行動し、出方を見るはずだったのに。

(奴らの仲間達の中心にいたリーダー、岩谷正輝が帰ってきているなら余計に不味い：連中がリンディ達を退けられるほどの戦力を持っているのは知っている。

そんな連中が、今度は闇の書事件にまで干渉しているのだとしたら……)

生半可な彼らの力では、彼ら相手に太刀打ちなどできるわけがない。

散々管理局の人を襲撃し、死人も出ている。誤解が解けてないどころか、彼への噂が局員内に広まっていた。

それもあつてか、地球へ行ってでも迂闊に奴の首となのは達を狙おうなどと思う局員はいなかった。

デバイスは完全に壊され、良くて大怪我、運が悪ければ何もできないまま惨たらしく殺される。

最悪、その関係者にまで手を出そうとするなら死んだ方がマシなくらいの尋問と肅清を受けるなんて話もあつた。

しかし、他の局員らの話は確証が無く、曖昧で信憑性が低い。

実際プレシアの家を突撃したリンディの部隊の殆どがデバイスを壊されているが、全員生きて還っている。

釈然としない表情をしていたクロノも助かっている。

襲撃した犯人が正輝を似せた誰かが局員らを襲っているという線も兼ねてリンディ達は調査する必要があつたが、既にその世界での介入にもジュエルシード事件のようないことが発生してない限りは極力干渉しないよう上から命じていたと聞いている。

正輝の調査をお願いする前に、別の局員らが地球に到着したが本部に戻ってきてないことにリンディ達は驚いていた。

——このことから、戻ってきてない局員達と正輝のことで『地球に到着し、正輝達のことを探ろうとすれば二度と戻って来られないという』という噂が広まってしまった。

そんな嘘か誠か不透明な噂をずっと考えていたら、そろりそろりと背後から誰かが迫っていることも知らずに。

「お前はお前で、なーに覗き見してんの?」

「なっ!? 気づつかれ…」

正輝が取り押さえた。

偵察させたシャドーには気配遮断を発動させて、仮面の位置を既に確認している。正輝の元にその情報が入ると、裏取りしつつ敵が反射的に魔法を使って動こうとする前に急接近しつつ蹴り飛ばした。

壁に激突させ、法皇のタロットを使用しつつ、敵の魔法を一時的に使用不可にする。ヴィータ達と同様に敵に考える隙を与えさせず、状態異常をかけて魔法も使わせない。

「が、はっ…」

「お前以外に協力者いるなら、さっさと居場所を吐け」

もう一人が、高速で助けに向かってきている。

片方が危機に瀕したのを察知したのか、正輝の背後からもう片方が砲撃魔法を仕掛けてくる。

が、この仮面の男がもう一人潜んでいることも事前に分かっていた。

(気づいてないと思っていたのか？馬鹿タレ)

屋上で待ち伏せしたシャドーが急降下し、真つ黒な槍状の武器を作り出して、それを一気に振り下ろす。

背後に気づいたのか、振り向いて物理防御の魔法を展開する。

が、判断が遅かったせいかわ防ぎきれなかった。

そのまま地面へ落下し、着地したシャドーが身体を掴んで地面を削りながら移動させ、待っていた浜風の砲弾に直撃する。

浜風にはサーチ機器を搭載させ、相手が透明であっても位置が丸わかりになっている。身体を魔法で守られているとはいえ、大砲で生じた高熱によって片腕に火傷を負っている。

(この女、一体どこから取り出した!??)

「上手くいきましたね」

「ナイスだ、俺の指示通りよく動いてくれた。

それじゃ、二人ともじつくりと『お話し』させてもらおうか?」

「くっ…」

「こんなあつさりと…」

誰かが、なのはを襲撃した守護騎士達に助けが入ってくる事も分かっていた。正輝本人は仮面の男の正体をとくに知ってはいるが、このタイミングで関与するとは思ってない。

(でも、どうする?)

正直、コイツらが早く動くとは思わなかった。

綺羅達が仕向けた刺客かと思っていたが：どうしたもんかなあ)

殺人鬼だけではなく管理局員を捕虜にしたなんてことも聞かされたら、また更に悪評が広まってしまふ。話は聞くけど、その後の二人の処遇に困っていた。

「やべえ……このままだとあたしら」

全速力でシャマルを助けに向かっているヴィータは、青ざめた顔をしたまま一言呟く。

このままだと、全員逃げることはできない。

仮にこの場から逃げ切れたとしても、必ず闇の書とその主の居場所も探られてしまふ。支援のシャマルを押さえられ、守護騎士達は数の暴力で追い込まれ、仮面の男の二人も正輝に捕縛されている。

この散々な様子に、結界内に出現したドローンや監視カメラで様子を見ていた男がキレ気味に叫んだ。

『あーあーあーあつ、ダメだこりゃ!!?』

ほんと見てらんないよ!!?』

守護騎士もダメダメ!!?仮面の二人が代わりにフォローしてくれるかと思つてたけど、甘かったわ!!?』

彼らを激しく罵倒し、目立つように大声で叫んでいく。

街にある全てのサイレンから、轟き叫ぶ。その声に、戦場のいる全員がどこからの声なのか周囲を見渡す。

『まあ良いさ、アイツらには引導を渡すつもりだったし。決戦編もいい加減、始まつちやつたわけだからさあ!』

「おい…またテメーらの仲間かよ!

一体何人呼べば気が済むんだ!」

「違う、これは…!?」

ヴィータは次々と増えていく増援に苛立っているものの、なのは達の味方ではない。彼の声はなのは達は聞き覚えがなく、動揺していた。

『守護騎士達、あと役立たずの仮面共!よく聞きやがれ!ここはさっさと引いて僕が何とかしておくからさ!!?』

「見えないところからあたしらに命令してんじゃねえ!そもそも何でアタシらのこと…なら、綺羅の言つてた協力者つていうのは!」

『いいから黙つて言うこと聞け!!?…それとも君ら管理局に捕まつて潰えるかい?』

反感はありつつも、この状況において最もなことを言われて止むを得ず引くしかな

い。シャマルを人質に取られている以上、蒐集を諦めるしかなかった。

「あ！おいお前らは逃げるんじや…つつ、今度は1stの野郎か!!？」

仮面の男達も、蹴り飛ばされた箇所と、火傷した腕を押さえつつ逃げるように立ち去っていく。正輝の方はグラスゴー、無頼が道を塞ぎ、逃げた先には既に雷光が転移して出現し、正輝達に三式弾を放射してきた。

「やばっ…っ?！」

散りばめた弾丸を防ぎ、仮面を追おうにも逃げられてしまった。シャマルの方にも動きが軽やかな白兜の機体が二機出現し、正輝の分身体をバリスで狙い撃ってくる。

『申し訳ありませんマスター。』

敵機体を取り逃しました。

一機、敵機体がセイバーの方へ向かっております』

複数も剣を射出し、影縫いで足止めしていく。

白兜を一機破壊したものの、もう一機はセイバーの方へと向かっていく。1stの攪乱によってシャマルもこの機に乗じて逃げられてしまった。

『結局蒐集できなかつた…一体何なんだよ次から次へと。』

でも、叫んでたアイツのおかげで逃げれたんだよな』

『ごめんなさい…私も背後を取られたなんて。でも、機械が助けてくれたお陰で抜け出

せたわ。

一旦散ってまたいつもの場所に集合しましょう』

『やむ終えん。奴の言うことには癪に触るかもしれないが、ここは引くぞ』

諦めた彼らを追おうとすれば、1stが用意した複数もの無人機が立ち塞がる。なのは達のところは空中にフライトユニットを搭載したサザーランド2機、ヴィンセント・ウオードを2機、地上にはグロースター2機が出現する。

シヤマルも仮面の男達の方も、無人機が盾になったせいで逃げられてしまった。

(なのはとフェイトには絶対に撃たなかった。

二人の攻撃をちゃんと回避してゐる。

となるとこの場での狙いは俺達のみか)

「目的は仲間と合流させないつもりか……しかも、セイバーを」

残った白兜一機がセイバーの方へ向かい、支援させないよう襲う。近づかれることを恐れて距離をとりつつ、スラッシュハーケンとバリスで牽制していく。

「私を警戒しているのか……!」

『ま、サーヴァントは厄介だからね。

倒すのは難しいけど、少しの間だけ足止めしてもらおうか?』

1stはサーヴァントを動かせまいと白兜以外にも無人機を手配し、セイバーを囲ん

でいく。

「浜風、ついていこー！」

まずは響達のいる方へ戻るぞ！」

「はー！」

一方の正輝、浜風の二人は久野のせいで仮面の二人組を取り逃したものの、雷光とグラスゴー、無頼の3機は既に撃破している。

機体の残骸が散らばっていた。

セイバーの方はシャドーが撃破した相手なら、問題なく対処できるだろうと信じ、なのは達のいる方向へと移動していく。

クリスの方は突如現れた無人機が、盾になったせいでヴィータを逃してしまった。

「させつかよ……っ？？」

逃さまいと深追いしようとしたが、一発の銃弾が片方のガトリングを貫き、暴発する。クリスが撃ってきた方向を見ると、そこにいたのはスナイパーのような武器を持つツインテールの少女が蒼い目を光らせていた。

（高層ビルから、誰か狙ってやがるっ……!!??）

綺羅の仲間であるブラックロックシューターがクリスの足止めし、シグナム達の逃走を補助する。黒いスナイパーライフルを構え、片方のマシンガンに一発撃ち抜いた。

「へえ…随分と味なことしてくれるじゃねえかよー」

下手なことをすれば、いつでも頭上を狙うことができると思えば、黒い少女は警告を示し、今度は威嚇射撃で地面を二、三発と撃つ。動きを封じられたクリスとブラックロックシューターの視線がかち合い、

『お前も、セイバー同様拘束されとけ!』

「なっ!?」

どつから湧いて出てきやがったコイツら!?」

今度は久野が心配したサザランの機体がクリスを囲んでいく。撃ってきたブラックロックシューターと決闘することもままならず、もう片方の武器で周囲の敵を蹴散らして行くしかない。

正義側の1st、2ndの陣営までこの戦いに乱入し、一斉に正輝達を襲撃してきた。

5 話敵襲「後」(正輝ルート)

セイバーとクリスが久野の無人機体達に足止めされている一方、響は撤退しようとする守護騎士の一人を捕らえていた。

『おい、ザファイラ!』

『分かってているっ!!?!しかし、離れようにも』

守護騎士の3人は撤退しようとしているが、ザファイラは響にがっしりと腕を掴まれており、中々離れることができない。

「ええいつ、放せっ……!」

「四人とも一齐に拘束してください!」

「この人だけでも確保するから!!?!」

なのは、フェイト、アルフ、ユーノのバインドが施され、ザファイラを何重にも拘束するよう促していく。

「あんのやろっ……!」

「いや、待て。あのシグナル……ヴィータ、手を出すな。」

「綺羅の言っていた合図だ」

ヴィータがザファイラを助ける為に戻ろうとするが、ブラックロックシューターは合図を出して援護に出ないようにした。一斉にバインドを仕掛ける前に、なのはの持つレイジングハートが気付く。

「マスタァ、近くに生体反応があります」

「…えっ!? みんな、待って!!?」

その建物の中に、もう一人何かいる…!」

姿は小さい身体に、両手には不釣り合いと言わんばかりの削岩機のような巨大なグローブを、背中には尻尾が付いていた。

ザファイラを助けようと、ストレンクスと響が対峙する。

唐突に出てきて驚いた響は自衛の為に手を離し、咄嗟に防いだ。

「うわあっ!??!」

解放されたザファイラは後ろへと下がり、空中へ避難していく。

ストレンクスがザファイラを横目で見て、めんどくさそうな顔でさっさと退けと首を横に振った。

「……助かった、礼を言う」

「ちよっ、逃さないよ!」

響を吹き飛ばし、追おうとするアルフの背中を狙おうとする。ユーノの防御魔法で防

いでいくが、ストレンジスは狂気的な笑みで防御陣を岩みたいに防御魔法を削ろうとしていた。

「うわっ!?」

そのままユーノを下へ吹き飛ばし、ザフィーラを救出するだけし、複数もの音が至る所で鳴り響いたのを察知したのか、路地裏へと逃げていった。

周囲に聞こえる音は、車輪やパラパラと言った音までチラホラ聞こえてくる。

空を浮遊しているなのは達が、下を見下ろすと

「っ!? なのは、前っ!」

「え、っ…:ふええええええっ!?」

なのはが驚いたのは、小隊が組めるほどの軍隊が押し寄せてくる光景だった。なのは達だけではなく、空を飛んでいるアルフとユーノ、守護騎士達までもが驚いている。

まるで戦争映画のワンシーンを見ているかのように、上から見上げれると壮観な光景が写っていた。

「なんだいつ…:これ」

「逃すために、ここまで用意するなんて…」

先程の襲撃してきたロボット達だけではなく、アパッチや戦車までが何十機か集おうとしていた。

「でも私達、狙われてないし…四人を追う？」

「やめた方がいいと思う。」

あの黒い子…今度は私達に銃口を向けてる。

深追いするより、正輝達を助けに行かないと」

次々と出現していく無人機達はなのはとフェイトのことを見向きもせず、正輝とその仲間に対しては集中的に狙っている。

対して、ブラックロックシューターの方はスナイパーライフルを大砲に変え、なのは達に構えている。

クリスは無人機を相手に、イチイバルの機能であるリフレクターを周囲にばら撒いて防ぐことしかできない。このまま戦っても、無数の機体が何体も出現し、この騒ぎに乗じて管理局側に気付かれるのも後々面倒になる。

「クソつ、キリがねえ!!? 片方が撃てないんじや攻撃も碌に」

「そのままリフレクターを張れ！」

俺が一掃する!!?」

武器が破損した状態のクリスは、苦戦を強いられていた。敵は銃を下げ、今度は一斉にケイオス爆雷を投げっていく。

複数もの爆雷から放たれる光ニードルで、隙間から狙おうとしていた。しかし、

「ジ・エンド・オブ・ワード 最期の劔ツ!!?」

周囲を囲んだサザーランドを相手に、黒い劔圧を放つ。無人機は真つ二つになると、高圧電流が流しながら爆散。

空間を亀裂を生じさせたことで、光ニードルと無人機の爆発で生じた爆風、飛び散った破片をそのまま飲み込んでいった。

「よし…無事か? クリス」

「ああ何とか…でも、こんなに早く援護してくるのかよ。Istつて野郎はアタシらが来る前から用意周到に待ってたってことだろ?」

「そいつと組んでいる綺羅も仕掛けに来ている…本人はいないが、彼女の仲間までいる。いずれにせよ、なのは達を襲ってきた連中と手を組んでいることだけは確かだ。そいつらとも相手しなくちゃいけない」

こうして綺羅とIstが手を組み、四人組を助力している。正輝は見上げ、ビルの屋上にいるブラックロックシューターを遠目で確認した。

(綺羅の仲間まで待ち構えてんのかよ…しかも絶妙な位置取りで撃とうとしてるなコイツ)

実際にクリスの武器を正確に狙い撃ち、フェイトとなのはの二人は正輝とクリスを発

見し、近づいていく。

「正輝さん！」

「他にも無事みたいだな」

なのは達と響達が駆けつけ、響を奇襲したストレンジスも無人機の大量出現を機に、この場から撤退している。

「…もうズラかるぞ。ただでさえ仲間と逸れてんのに。」

これ以上、無人機を増やされたら不味い。

今日のところは、なのは達を襲った連中を深追いするな」

「仲間とはぐれてるってどういう」

「話は後だ。とにかくここは引くぞ」

「綺羅の仲間もない…機体も、邪魔するだけして撤退か」

正輝達は守護騎士達を追わずに撤退すると、綺羅の仲間と、1stの用意した無人機達は引いていく。

(合流までの間に無理にでもここを死守するのは可能だが、それを許せる連中じゃないのも分かっている。

携帯を見た感じ……うちの姉さんや、竹成さんも連絡がない。

だから、今は引くしかないな)

シグナムと白い機体を相手にしたセイバーが、遅れて合流した。鎧にヒビが入っているものの、その奥では白い機体を聖剣で斬り裂かれている。

「只今戻りました、正輝」

「セイバー…無事か」

「ええ。あの白い機体が邪魔してなければ、こちらも一人確保することはできたのですが…」

「気にすんな、こればかりはしゃーない。

俺も俺で、捕らえた後どうしたら良いか考えてなかったしな……ここを離れよう」

I s t が用意した白い機体をどうにか撃破したものの、邪魔がなければ響とザフィーラのように、シグナムを捕らえることもできたかもしれない。

ヴェイタ達の張っていた結界が解かれ、正輝撤退していくのを確認したブラックロックスシューターは銃をしまい、その場から立ち去る。

久野の機体も同様に撤退し、破壊された機体は粉微塵にされていく。

戦闘の痕跡を隠滅し、粉末状にしたものを久野の船へと転移され、再利用の為に回収された。

――試練編における開幕の狼煙は、この戦闘を機に上がった。

正輝達となのは達は、近くのバス停付近まで移動する。

ヴェイタータの張った結界が無くなったことで、結界が解かれると人も車も元通りになつていく。

人の声、風と車の音が聞こえていた。

試練編前の時みたいは何事もなく再会することもなく、お互い別々での襲撃でそれどころではなかった。正輝達も急な転移の上に、なのは達が襲われているとは思ってもない。

響、クリス、セイバーの三人は既に私服に切り替わっており、浜風は武装のみを解除する。

浜風の格好は制服姿だから、服を変える必要はなかった。

「なのはちゃん。お久しぶりだね」

「……慌ただしい再会だが、二人とも元気で良かった」

「フェイトも結構腕が上がりましたね。

先程の戦闘、見てましてよ」

フェイトの稽古に付き合っていたセイバーは、彼女の頭を撫でて褒めている。

「ありがとうセイバーさん。」

…でも、話そうとしてる隙に油断して」

「仕方ありません。私も取り逃しています」

「ユーノ、お前その刀。」

「いや…模擬刀、なのそれ？」

「うん、魔力を纏わせて壊れないようにしてるよ。」

「恭弥さん達に剣術を教えてもらってるから。」

「騙されたことで、より一層心身ともに頑張ってるよ」

「戦いでフェイトの怪我は少なく、特訓の成果が出ている。ユーノも正輝の知らぬ間に高町家の剣術を磨いている。」

「模擬刀だけでは守護騎士を倒す事はできないが、なのはの護衛とサポート役では優秀なくらいに動いていた。」

「あの。少し気になってたんですが、正輝以外の3人は知っているけど…隣にいる人って誰ですか？」

「挨拶が遅れました、初めまして。」

「浜風です」

「正輝達五人の中で浜風だけが、なのは達とは初対面になる。」

「彼女は軽くお辞儀し、挨拶した。」

「まあ…慌ただしい形で再会したわけだが。

襲ってきた連中といい、あの無人機達といい…話をするにも結構長くなる。

とにかく、ここで話しするのよ」

「……家に帰ってからになりそう、だよね」

先程の戦闘中に色んなことが起こり過ぎて、諸々の状況を説明するにも詳しく話すのは時間が長くなる。

外に出てる時に話すよりも、家の中で通信した方が遥かに話しやすかった。

「俺達は当面フェイトの家にいるから、何かあった時は動けるんだが…なのはのところが手薄になるのは、どうしたもんか。

I s t に関しては性格はアレだが、絶対に狙わねーだろうし。

残る問題は楽園と、襲ってきた四人組とそいつらに協力している仮面の二人組だな」
（でも待てよ。もし仮面が蒐集が目的だったとはいえ強引になのは達を襲うことになつたら、それを見た I s t はその2人組を絶対に許さないんじゃないのか？

もし綺羅が守護騎士達の味方側についてるなら、そこそこで一悶着あるだろ。

あの女が、なのは達のリンカーコアを蒐集しなくとも集めれる方法でも考えてるのか。

……あいつら、一体どうするつもりなんだ？)

仮面の男はなのはかフェイトを襲い、蒐集するように仕向けさせる。幼女を傷ましめることに看過できるわけがない久野を、どうやって綺羅が説得したか。

「それと……なのは、家の方は大丈夫なのか。」

「たしか前回のことで」

「あ、それは大丈夫。」

嶺さんが去る前に色々と用意してくれたから。

「いない時に襲撃されることも考慮して、家と私の方にも常に札とアイテムを持つとい
てって」

「そうか。それならウチの姉は家にいるか?」

「ううん、嶺さんはまだ来てないよ」

姉も試練編の事で、なのはの家を嚴重にふるよう徹底している。何処までやったのかは聞かなかつたが、追々なのはの家を訪ねることになった時に驚くことになることも思
いもよらなかつた。

「…参つたな。俺達のところは強制転移で他の仲間と逸れてるし」

「アンタ、仲間と逸れてるって…それかなり深刻なんじゃ」

「逸れてる仲間全員も連絡しようとしたその時に、あの騎士の連中がなのは達に襲撃し
てきたんだから。」

まあこの話も長くなるから、それも家に帰るまでは置いておくぞ。

なんだか外が凄く寒いしな。

もしかして季節って冬?」

「そうだよ」

「通りで寒いと思った…」

この件で話さなければならぬことは非常に多く、外で話すには余りに全てを話しきれない。戻ってから今までの出来事を少しずつまとめていくしかなかった。

「それじゃあ帰るとするか。ここからフェイトの家へ行くにも海鳴市からだと遠くなりそうだし。」

「このまま警戒しながら移動かな」

そう言って、正輝達はフェイトの家へと向かおうとすると

「あ、待って正輝」

「ん?なんだ」

「アタシ達の家はそっちじゃないよ?」

「え?でも最初に会った時って」

フェイトとアルフが、正輝達を止める。

行き先は試練編前に帰ったはずの方向へ指を指しているが、二人は首を横に振って

た。

「その…実はね、つい最近引っ越ししてたんだよ。今は海鳴市に家を移してるよ？」

「え、マジ？」

「うん、なのはの家の近所にマンションがあるから。帰る方向はなのはと一緒にんだよ。ついてきて」

正輝達は、そのままフェイトに案内されて家へと帰っていく。

その道中で、正輝の着信音が鳴った。

画面にはミッテルトが表記され、電話に出る。

「もしもし?」

『あつ…えーつと、正輝っすか』

「おお、ミッテルトも無事だったんだな。

そつちがかけてくれて助かったよ」

本人の声を聞いて安堵するものの、ミッテルトの声色がどうにも元気のない感じであつた。

困り事でも起きたかのように

『ウチらも連絡できて良かった。あ、でも…ちよつとアタシじゃなくてレイナー様から話がしたいって言われたから。』

変わるっスよ』

「…? レイナーレのやつにも連絡用の携帯電話を持たせてなかったっけか?

まあいい、俺の方も離れ離れになった全員に連絡したかったところだし。

ミッテルトじゃなくてレイナーレが話をするつても、彼女も考えがあつてのことなんだろう。

それじゃあ変わってくれ」

すぐにミッテルトから、レイナーレに電話相手へと変わる。

『正輝? 今変わったわ…』

「レイナーレか、よし…まず、そつちにそつちに誰がいるか、何処にいるのか確認したい。

教えてくれ」

『電話に出てたミッテルトとさやか、士郎がこつちにいるわ。』

あと不知火つて子と、ランサーつて人もいるわね』

「無人島のメンバーも含めて飛ばされてんのか…あと海辺の公園つてことはもしかしたらなのはの家と近いかもしれんな。

今から海鳴市の地図を送る。

それと、レイナーレ達から先に伝えたいことがある。今さつきなのはとフェイトの二人が四人組の襲撃を受けたみたいだから気をつける。

特に魔力のあるさやかを狙ってくるかもしれないから」

『そう…分かったわ』

「仮面の男が二人先頭を監視していたから、そいつらにも気をつけとけ。

あと、そつちは転移して早々何かあったか？

ミッテルトが困り気だったみたいだが」

そう正輝は聞くと、レイナーレは何も返事をしてこない。返事がないことに何か答えづらいことでも起こっているのかと少し不安になり、何回も質問をしていく。

「…おい、どうした？」

聞こえてるか？それとも、電話中に何か変わったことがあったのか？」

『……いいえ、待たせてしまつてごめんなさい。』

大丈夫、何も問題無かつたわ』

「そうか、じゃあ引き続き頼む。

合流先は翠屋か、なのはの家。

どつちかで近い場所まで行けたら、さやかの念話でなのはか俺に連絡。いいな？」

転移して早々、魔導師四人と仮面をつけた二人組の男、1stの無人機と綺羅こと2ndの仲間による攻撃から、なのは達を助けに向かつていた。

よく分からなかつた海鳴市から転移して他の仲間と連絡しようにも、タイミングが悪

過ぎてどうしようもなかった。

「他は…クソつ、ダメか…」

『ただいま電話に出ることができません』

レイナーレ達の他に連絡をしようとしたが、全く繋がらない。遠距離から念話を飛ばしつつ連絡しようとしても、誰もその念話に干渉してこない。

「どうだったんだよ。風鳴先輩は無事なのか？」

「レイナーレ達以外のメンバーと連絡が取れない」

「そんな…翼さん、奏さん…まどかちゃんのみんなとも。」

「一体何処に転移されたのかな…」

「私以外の艦娘達も、訳もわからずに飛ばされてるなら…」

クリスと響は連絡が取れてない翼や奏を心配し、浜風も無人島にいた仲間側の艦娘も飛ばされているのではないかと落ち込んでいた。

「家に帰ったら船にいる秋瀬とはまた連絡するからな。」

船の中にいる仲間も心配してるし」

正輝含め一緒にいる4人と、今さっき連絡してきたレイナーレ達の他に、船にいない仲間達が一体どこへ転送されたのか。

今の現状では皆目検討がつかない。

——頼む、みんな無事でいてくれ
未だ行方知れずの仲間とは連絡が取れないまま。
今の正輝達には、無事を願う他なかった。

6 話開幕（正輝ルート）

フェイトの家は海鳴の方へ引越しており、転居した場所へ向かっている。

なのはの家から少し近くのマンションに移動し、家には前に戻ってきた時と同じようにアリシアとプレシアが家にいた。

「あーおかえりー!」

「ただいま、アリシア」

玄関では、待っていたアリシアが元気にお出迎えしてくれている。

フェイトに飛びかかって抱き締めている。

「ただいま…って言いたいところだが、帰って早々大変な事になったな」

「おかえりなさい。」

「話す前に食べましょ」

プレシアは着ていたエプロンを脱ぎ、リビングで一同食事した後話することとなった。

「…なのは、聞こえてる?」

『うん、大丈夫だよ。』

「こつちも準備できてる」

夕食を食べ終わると、今晚襲撃された件で話していく。フェイトはレイジングハートとバルディッシュで通信を繋いでいき、ここまでの話を初めていく。

「じゃ…今からここまでの経緯を話していいかうか。それじゃあなのは達の方から」
『えつと…夕方頃かな。フェイトちゃんと話してる最中に結界が張られたの。』

話をしよう呼び掛けても聞いてくれない様子だったから、ひとまず体力を減らした後、にバインドで何重も拘束して。

それで、フェイトちゃん達を待つてたら…すぐにその子の仲間が二人来て」

二人が話してる最中に結界が張られて、魔導士の一人がなのはの家へ襲撃されたことを説明していく。

(なのはが、ヴィータを返り討ちにしたのか…)

「それなら戦闘の映像はあるのかしら。

確か、嶺さんに改造を施してもらっているなら出来るはずよ」

『はい、レイジングハートとバルディッシュに撮つてあります』

ユーノがそう言うと、二つのデバイスが魔法で映像を展開し、四人の守護騎士達の姿

を見せていく。

「母さんは何か知ってる?」

「……この魔法陣、ベルカ式ね。」

「持っている本も知っているわ」

『ベルカ式?』

プレシアは研究員だった頃の資料を取り出し、歴史に関する厚い本を持ち出す。過去にあつた事故や、彼女が民間事業で働いていた間に調べていた魔法陣を開いて見せる。

「私達が使っている魔法には2体系あるわ。」

まず私達が主に使うミッドチルダ式：省略してミッド式っていうのはミッドチルダで開発された魔法。なのはちゃんと娘のフェイトのように射撃・砲撃が主に使われているの。

もう一つの魔法は、四人が使っていた魔法はベルカ式と呼ばれている。対人戦闘に特化させたデバイスで、彼らの剣やハンマーのような近接系のデバイスを使うのが主流よ。

特にベルカ式カードリッジシステムはデバイスにカードリッジを差し込みつつ、それを炸裂させて瞬間的な威力強化を施すの。

昔は2体系の魔法を魔導士は使用していたのだけれど、ベルカ式は先天資質の依存、

カードリッジシステムの扱い辛さとベルカの崩壊によって衰退していったわ。

そしてカードリッジシステムを扱える魔導士は、騎士と呼ばれているの」

「あの弾丸…：やつぱり一時的に魔力を高めていたんだ」

「端的に言えば、ミッド式は遠距離のバランス万能型で汎用性の高い魔法。ベルカ式は近接戦が主だけれど、扱いは一人一人の技量によるわ」

二人は、シグナムとヴィータが技を行使する度に、デバイス内にある弾丸を込めることで魔力を高めさせていたのを思い出す。

「ならさあ、あいつらが持っている本っていうのは？」

「闇の書…：持ち主と世界に破滅を呼ぶとされているわ。ジュエルシールドも集めれば危険だけれど、それより強力なロストロギアなの。」

時空管理局が危険視するくらいにね。

それにしても何でこんなものが地球にあるのかしら…」

ジュエルシールドだけではなく、闇の書も地球にあることにプレシアは動揺を隠せない。
い。

『破滅つて…：それじゃあ覚醒したら』

「全てのページが空白で、項目を集めていくことで闇の書の主人に力を得る。」

覚醒の為には…：なのは達のような魔導士を襲うことでリンカーコアの魔力を得つつ、

ページを増やさないといけない。

そして、覚醒したと同時に地球が減ぶ。

主人がそれを望んでいるなら、こうして守護騎士は動いているみたいだな」

「じゃあ…滅ぼす為に動いてるの？」

主人の為に私達を」

「シグナムって人は為さねばならないことがあるって言うけど、主人の覚醒をさせて世界を滅ぼすのが目的…なのかな？」

「…本来は4人とも闇の書のプログラムだから、感情はないはずなのだけれど」

プレシアに続いて、正輝も説明していく。闇の書のことについて聞けても、なのは達は釈然としない様子だった。

「…本当に滅ぼす気なら、手段は問わないと思うがな。」

もしくは覚醒後のことを全く知らない、か」

原作通りに真つ向から襲撃し、四人とも闇の書を蒐集しようとしてきている。襲撃を仕掛けた時には四人とも蒐集に焦っている様子もなく、冷静な判断で撤退していった。

「そういうえば、正輝アンタ…アイツらのこと、知っていたのかい？」

「ん…まあ一応はな。こっちの仕事上で深く関わることになりそうだったし。」

事前には調べてはいたんだが、正直こんな形で関わることになるとは思わなかったか

らな」

(守護騎士や闇の書については、原作を見て知ったなんて言えねーからなあ…)

「それと闇の書の守護者らしき女を一人、二人組の仮面の男がなのは達の戦闘を隠れて見ていたんだ。」

捕縛はできたんだが、あの無人機達に邪魔されて逃げられてしまったよ」

闇の書の四人だけではなく、仮面の男についても説明していく。

「それじゃあ…あの機械達や黒い子達も闇の書と何か関係が」

「違わなくもないが…えーっと、無人機や黒い子達に関してはまたこつちの問題だ。」

闇の書とは間接的に加担している」

(あの場で協力していた以上、闇の書が綺羅達と絡んでいるのは間違いなかったからな)
守護騎士達がなのは達に振り返りにされる事を予測し、タイミングよく乱入してきた。

闇の書の覚醒には助力してはいるものの、

「…皆さんは、正義側の事についてはまだ言ってますんか?」

「?アタシらは聞かされてないよ」

『私達は嶺さんから大体のことを』

なのはの方は家族の身に危険が及ぶとのことから嶺に何があったのか根掘り葉掘り聞かされているのが、

フェイト達には、未だに正義側の事象は何も分かっていない。

「あー…フェイト達には遠ざけさせたからな」

「正輝、いい加減話した方が宜しいのでは？」

家族にも、現状を知っておかなければまた危険に晒されてしまいますよ」

『うん、フェイトちゃん達の為にもその方が良いと思うの』

正輝はアリシアとフェイトの顔を見つめる。

試練編に巻き込まれ、危険に晒されてもフェイトの家族は正輝を信じてくれている。

（確かに、もう何が起ころるか分からない…か）

「ここまで関与している以上、黙っておくにはいかない。

なのはの方は既に姉さんから聞いてるみたいだし…俺達のことも話そう。この問題は、闇の書だけじゃなく俺達の抗争にも関与している」

「抗争？」

「今俺と姉を含めて4人いるんだ。

一人は味方なんだが姉と同様に連絡が取れてない。残りの3人のうち2人が今敵対

してて、闇の書の騎士達と結託している可能性が高い。

もう一人は…麻紀を覚えているよな。

あいつんところの中に響の知り合いがいるんだが、そいつとも連絡が取れなくてな。もう何やっているのかも検討がつかなくなっている。

敵は同じ正義側もいれば、敵対している組織も実在している。そして、ここに来るまでにもう一つ新たな陣営が俺達と相對している。

組織絡みだと管理局含めて5つどもえの状況だ」

正輝含めた正義側の6人のことについて話していく。ロープ達もまた掻き乱して圧倒的な力の差を見せつけられた事も。

介入して早々、闇の書よりも現状が一体どれほどまでに危険なのかを。

「…正輝達も大変だったんだね」

「問題はそれだけじゃない。さつきも言ったが、俺達以外にも仲間が大勢いたんだけど逸れている。6人の居場所と安否確認は取れたんだが…それ以外は。」

今やれるとしたら、俺達は逸れた仲間と合流する事を最優先にやる」

悪い現状に重苦しい空気が漂っている。正輝の話聞いただけでも、頭が痛くなりそうなものばかりだった。

正輝の着信音が鳴り、画面には秋瀬の名前が表示されている。

「ちよつと席を外す。拠点にいる仲間が心配しているから電話してくる。

詳しい説明は俺と一緒にいた4人に聞いてくれ」

そう言つて正輝は外に出て、或に電話していく。既に時間は9時過ぎになつており、無人島を襲われてからずっと考え事ばかりで心身疲れていた。

（気が滅入りそうだな…）

『ああ、やつと繋がつたよ。全員が轉移される事はなかつたみたいだね』

「秋瀬か。」

「すまん、連絡が遅くなつて」

『うん、急に消えたからびつくりしたよ。』

「君達がいなくなつてから何があつたのか説明してくれるかい」

「強制轉移されてから誰もいない海鳴市のこと、なのは達の世界に轉移されて以降の襲撃について現状を話していく。」

「電話越しに聞いている彼はずっと黙り込んだままで、ようやく説明を終えると」

『…これは裏で誰か動いているのは間違いなさそうだね。この様子だと今後も、混戦状態は避けて通れないみたいだし』

「まあ、だろいな」

「管理局だけではなく他の陣営にも襲撃される事になったら、この少人数でフェイト達

を守りきれるかどうか不安でもあった。

「それで……ちよつとメディアに代わつてくれないか？ フェイトの家族絡みで大事な頼みをお願ひしたいんだが」

『うん、ちよつと待つててね。』

今から呼んでくるから』

そう言つて或は電話から抜け、しばらく待つとメディアへと交代する。彼女にこの世界に強制転移されて以降の出来事と、今後出てくる外敵を説明し、交渉する。

『…それで、貴方が不在だったら代わりにフェイトつて子の家族を護衛して欲しいですつて？』

「色んな連中が俺達を狙う以上、フェイト達も危険だ。母親のプレシアだけじゃ、子供を守りきれないかもしれない。

そこで何人か、フェイトの家を任せるかもしれないつて考えてるんだ。魔術のことに長けてるキャスターなら、拠点の防衛を一層強くできる。

敵が襲撃したら、外をプレシアの傀儡兵と竜牙兵の召喚で徹底的に守りに徹する。マシヨンの正面を佐々木に、宗一郎が近くでキャスターとフェイトの家族を護衛する。

今のところ、三人か。本当にやばくなつたら俺からバーサーカーとイリヤにも頼む。

今から、家族写真を送るからな」

正輝がフェイトとアリシアの写真を見せると、急に黙り込んでいる。同じ格好で、一緒に買い物している姿は彼女を魅了させていた。

この船にいるキャスターと宗一郎以外は誰も知らないが、隠し部屋（アルトリア専用）を持っている彼女の好みにどストライクだった。

「おい、メディア？なんか返事がないけど…」

『二人とも可愛い…小ちやくて、健気で、衣服をパールックしているのとかもう尊いわよもおおつ』

「は？えつ…？」

『ご家族と仲良くなった暁に、二人にはセイバーと同じようにふりふりドレス、ゴスロリ、コスプレ、アイドル衣装の着せ替え放題…ウフフフ』

小声で調子づいた声色が聞こえている。

その声に不審に思いつつも、彼の声が届くのは少ししてからだった。

「お、おーい…キャスター？」

俺の声が聞こえてるか？」

『ハツ…んんっ！い、いえ。何でも無いわ…そう、何でも無いもの。』

いいわ、引き受けるわよ』

「お、おう。まあそれなら頼んだぞ。」

くれぐれも失礼のないようにな？」

(ほ、本当に大丈夫なのか?)

メディア達がフェイトの家族を守ると約束してくれた事に安堵はするものの、この交渉が返って彼女とプレシアの趣向が意気投合させ、フェイトとアリシアに色々と着せ替えていくのをまだ知らない。

正輝にも、その影響を諸に受けることにも。

12 / 3 朝方頃

「俺が先にご飯作っておいたから、2人とも通学の準備だけでいいぞ」

「はい」

アリシアとフェイトは学校へ行っており、しばらくの間は護衛の為に子犬モードのアルフを鞆に入れつつ連れて出かけている。

今のプレシアは在宅勤務で働いており、彼女の個室でテレワークとリモートを使いつつ働いている。

正輝達は朝食を終えた後、別の部屋で今後ことについて仲間と会議を設けていた。

既にゼロの通達で闇の書の主人の家、海鳴市全域の情報を受け取っている。

集めたのは、1stが牛耳っている地域全体のことと話をすることとなった。

「えーと、私達は外に出ては行けないのですか？」

「不用意な外出はダメに決まってるだろ。出歩いた途端、あの結界が展開されて1stが用意した無人機が襲撃してくるから」

「そんな〜」

「戦闘中とはいえ、すぐに駆けつけてきやがったんだ。あのタイミングで助けにくるなんて対応が早すぎるしな。」

黒い女共もさつきみたいに加勢してくるかもしれないねーし」

響とクリス、浜風の3人は外に出ないように滞在している。理由は1stが街中の監視カメラで発見し、速やかに機体を転移させて襲ってくる可能性があるからだ。

「クリスさんと響さんの二人は、変身するには聖詠を歌わないと戦えない…でしたっけ？目視して敵を発見する前に特定されたら、結局狙い撃たれてますしね」

「だから、アタシらは家にいろってことだよな？」

「そーいうこと」

響達が歌おうと変身すれば、すぐそば声に反応し、1stが大量の無人機を送り込むのは目に見えている。歌っている位置を特定されて、不利な場所へ追い込まれてしまう。

「でも、たかだか歌っただけですぐ反応するもんなのかよ。」

大丈夫なんじゃねーのか？

実際なのは達を助けた時だって、あの連中が駆けつけたのは後からだっただろ」

「試練編前まで俺達はずっと監視されてたんだ。聖詠を音の探知機ボイスセンサーで特定するなんて造作もないからな。

今回ののは緊急で助けに向かったけど、今後は聖詠した時点でI s tに特定、即襲撃されてしまうってことも考えておけ。

聖詠を歌って装者に変身することもでき、その上なのは達を守れたのはそこまで徹底してなかったんだろう。

かといってこの家にただ籠るわけにもいかないし…散り散りになった仲間が助けを求めたら、シャドーを送り込んで向かわせる。

ゼロからの地図も貰っておいたし、早速確かめるぞ」

ゼロから各種罠のデータが送られ、それを確認すると至る所に大量の罠が貼られている。検問、爆破、強制結界と街の中にはそこら中に罠が貼られている。

「マークが沢山あるんですけど。あの時みたいに無人機体が沢山出現したりするんですか？

だとしたら…」

「それもあれるけど、全部I s tが街中に用意した罠だ。公共に置かれてる監視カメラも、I s tが干渉している。」

情報を提供してくれるだけ有り難いが、それでも目が回りそうだ…考えながら眺めてるだけでもすげえ気持ち悪いって」

「それじゃあこれって、全部罠なんですか!?!?」

「逆に何だと思ってたんだよ……」

「その、てつきり出てくる無人機の種類かと」

クリスが呆れながらも響にツツコんでいく。

正輝は膨大な量の罠を見て嫌気がし、気分が悪くなりそうにもなった。街を散策して情報を得たり、助けに行こうにも罠を掻い潜って進まなければならない。

罠は罠でも響の言う通り無人機の兵隊達が配備し、戦闘中に横から割って入るなんてこともあり得る。

「…まあ、そういう捉え方もできるけどな。」

本当に配置まで無人機を用意するくらいなら飛行可能な機体なっけていてもおかしくない。

無人機も確かにあるかもしれないけど、対地砲・対空砲の設置、超至近距離での散弾・輻射波動、その他諸々…設置する箇所がわかっただけで、どの罠が飛んでくるかは分か

らない。

いずれにしても何の対策もなく外に出たら確実に襲われる。罨が発動した時に気づけても、判断が遅かったら奇襲をされてしまう。

「防御も、回避もできないからな」

「にしたって、このマークの量は流石にヤバいだろ…」

「通り道全部、確保されてやがるな。」

「俺達がここに来る前から予め用意してたんだろ」

橋も路地裏も、必ず通っていく場所全てがIstのテリトリーになっていた。管理局が転移してくる場所も、発見次第で速やかに排除できる。逆に、そうしなかったらなのは達や他の市民達が管理局員に襲われた可能性だってあったかもしれない。

彼が一概にこの海鳴市を守っていたのは本当のことだが、ここまで徹底して守っているのは彼の幼女好きな面と彼女らの住む街を徹底死守している。

「罨の位置は大体把握できた。」

それでも仲間との合流は、当分時間がかかりそうだな…リスクは大きいけどやっぱ一気にIstを叩くしかないのか？

「うちの姉がいつ帰ってくるかわからねーし」

「正輝さん。罨が幾らあっても全部を確認するのは流石に無理だと思いますし…突破口

の目処はあるのですか？」

「いくら嚴重にしても一人で全てを管理するなんて到底無理だ。この包囲網をたつた一人で作っているっていうゼロからの情報はかなり大きい。

いろんな場所と同じ時間で攪乱させているタイミングで、久野本人を討つことが可能だ。

ただ、その方法だと1stを直接叩く役と複数で暴れる役が必要になる。

それに…突破口の目処かあ…」

ゼロからもらった情報はかなり有意義なものだが、問題は1stの打破をすぐにやるかどうかだけ。

「ええ。攪乱させるにも今の私達だけでは人数が足りませんし、決行するにも相手の本拠地が分かればの話です」

「そうなんだよなあ…予想としてなんだが、あの騎士達の対応がかなり早かったのが気になってな。なのはとフェイトを手早く守る体制を用意するなら、海鳴市の市民街に隠れ潜んでいる可能性が高い。

後は殺者の楽園がいることと、どこまでロープ陣営の連中が絡んでいるかだな。

ロープ陣営も、楽園も一体どこを隠れ蓑にしてんだか…そこんところも地道に探すしかないか」

作戦が立てられていない以上、街中を闇雲に探そうとすれば設置された通りの罠に嵌り、仲間探しも碌に出来ないまま、探しているメンバーとまで散り散りになってしまう。「なのは達を襲ったあの連中も、散らばった仲間を襲撃する可能性だってあるし……あークソッ。」

ホントどうしたもんか」

「あの、本当に敵が多過ぎますね……」

「本当に……全く以ってその通りだ浜風。」

いつ何が起きてもおかしくない。

やっぱ1st打倒は現状無理そうだな……仲間を助けるときは、罠を掻い潜ってでも向かう事になるだろうし」

今のところは離れ離れになった仲間探しを地道にするしかない。久野が仕掛けた罠であっても、街に出て助けに行くことも考えなくてはいけない。

攻める事もできず、防戦一方になるしかなかった。

12/3 夕方頃

「ただいまー」

「おう、お帰り」

学校帰りのフェイト、アリシア2人が帰ってきた。

プレシアは料理中で、それを正輝達は手伝っている。

決戦編の間は、終わるまでは正輝だけが船に戻ることができない。仲間も戻す際は、かなり近い距離でないと船に戻すことができなくなっている。

仲間を船に転移させないのは、正輝一人だけでは守りきれないから四人はこの家に留まっている。

「あのね正輝…昨日のことで話したいことがあるんだ」

「ん？どうした、フェイト」

二人とも学校の制服から私服へと着替えると、アリシアは元気よく母親に飛びつくが、フェイトは正輝の方に近づいてきた。

「学校で、なのはの友達から聞いたんだけど。」

その、もしかしたら…？すずかの家に正輝さんの仲間がいるって。

桜さんと、ライダーさんって人なんだけど」

「…それ、本当かフェイトっ？」

さっき言った二人の他に、誰か無事なのか教えてくれないか！」

正輝が料理の準備をしてた手を止めて聞こうとした直後に、ドアのインターホンの音が鳴る。インターホンの映像機に近づくと、見知らぬ女子中学生が映っていた。

「何っータイミングで…」

「ねえ正輝、彼女は知り合いなの?」

不安げなプレシアが正輝の顔を向ける。

テレビドアホンの音を無視しても、彼女はなかなか離れようとしなない。必死にインターホンのボタンを何回も押し、鳴らしてばかりだった。

「…何回も鳴らしてるようだけど」

「つたく、しつこいな…俺が出る。」

フエイトはさっきの話を四人に伝えてくれ

「わかった」

(悪戯か?)

正輝は玄関のドアを少し開け、覗き込むように彼女を直視する。ドアの前に立っていた女の子が、グイグイと押しかけてくる。

「…あの、何の用で「こ、ここに来れば助けてくれる人がいるって教えて、もらったんですっ!!? 私、命を狙われて」は、えっ…?」

彼女は必死に助けを乞おうとするも、情緒不安定のせい彼女の言葉が良く聞こえない。

「ち、ちよつと。支離滅裂で何言ってるのか全然分からないから落ち着いて」

「は、はい……」

「とりあえず助けてもらいたくてここに来たってことだけは分かりました。それじゃあ、警察や市役所へは行かなかったんですか？」

「…行きたくても、行けない事情があるんです」

「命を狙われてるんですよね？それだけで十分理由になると思いますが…言えない事情でしたらどうして見ず知らずの私達に直接助けを求めるんです？」

彼女は、気まずい顔で質問を返していく。

正輝からしたら助けて欲しいのか欲しくないのか、よく分からないように感じ取っていた。

「た、協力してくれた人がこの建物の階の人なら助けてくれるって」

「じゃあその協力してくれた人が誰なのか教えてくれますか？」

「ごめんなさい…誰か分からなくて」

「証言、証拠でも良いです。」

一つでも特徴のある話し方だったり、録音機で声を保存していたり証明できるものつてありますか？」

助けてくれと言った言葉も、本当なのか分からない。せめて何か証明できる物を託されているのなら、入る余地もあるのではないかと。

「…その、持っていません。」

声も男なのか女なのかよく分からなくて」

(え、マジ?)

コイツ本当に助けを求めてるのか?)

その返事で彼女に対して信用することができなくなつた。

「…すみませんが、助けてもらいたくてなんて言われても貴方を助けた恩人のことについて何か手がかりがないと助けようがありません。」

そもそも、接点のないあなたがウチに助けを求めてるのか全く意味が分からない。市役所や警察がダメなら、責めて他の公民の施設に訪ねればいいと思うのですが?

もつと言えば探偵事務所にでもいけば親切に相談にのつてくれますでしょうし、なんなら私から電話しましょうか?

それくらいなら出来るかもしれ「で、電話するのだけはやめて!」え…? いや、なんで電話したらダメなの?」

「その…電話されると、私の居場所を特定されちゃうから」

「…いや、どうして特定云々になるんです?」

それともストーリーカー被害のような尾行の被害とかあつているのですか?」

また彼女は、気まずそうに黙つてしまう。正輝は微妙な反応に嫌気がさし、扉を閉め

ようかとも思った。

「…もう、他当たってくれませんか？」

これ以上言うなら警察呼びますよ」

「ほ、本当に待って！」

ここじゃないと絶対ダメなの！

守ってくれる間を居候してもらうだけだから」

「だから待ても何も、そつちが勝手に押しかけてるし。あとここじゃないと絶対ダメで…そもそも話何でここじゃないきやダメなのかも教えてもらえますか？」

「そ、それはっ…」

「…ここにずっと居られても迷惑なんで、今日のところはお引き取り願ってくれませんか？」

せめて考えがまとまってから、またこちらに来てください」

肝心なことを聞いてもちゃんとした答えをしてくれないことに痺れを切らした正輝は、辛辣な態度で入居を断る。

助けて欲しいって言っておいて、誠意がそこまでない相手を家に入れる気はなかった。

「わ、私っ！」

綺羅って人に命を狙われているんです！」

「…綺羅？綺羅って誰のこと？」

「せ、正義側の」

最後の返答に反応した正輝は、そばにいるプレシアに言伝をお願いする。

「…ちよつと出掛けてくるって俺の仲間に伝えてください。

ウチの事で関与してるみたいだから」

「そう…気をつけてね」

プレシアが正輝の仲間のいる部屋に向かい、正輝はリビングから外に出かける。

「ここだと長くなりそうだから…別の場所に移動しようか？」

「は、はいっ…」

正輝は彼女を連れて、近くの喫茶店へと移動する。1stが貼っている罨が仕掛けられてない道へ移動し、遠回りしつつ店に入っていく。

「で、名前は？」

「西園寺世界です」

「…一体何があつてこつちに助けを求めた？」

綺羅に何をされたんだ？」

事情を聞き、何をされていたのか聞く。逃げ出すほどだから、酷なことを要求されて

いたのかと思っていた。

「無理矢理連れてこられて、働かされたんです」

「…ふーん。」

働かされたって、具体的には？

嫌がらせとかされたのか？

「か、家事全般っ…嫌がらせというよりは圧迫した感じに脅されて。

嫌々ながらもやってました」

「それにしたって外見から見ると健康そうだけど、酷く働かされているようには見えなないんだが」

「脱出したのは3日後だったので、身体を壊す前に逃げ出せました」

「…そう、成程な。」

すぐに逃げ出せたってわけか」

「はい…」

（家事で逃げ出すか…いやまあ余りに細かすぎるところまで徹底してやれって言われたらなくはないが）

家事を2、3日程度で逃げ出すかとおも疑ったが、敢えてツツコむのを黙っておいた。

アーチャーこと黒沢よりも繊細なことまで過度の要求をされて、耐えられないなんてこともあるかもしれないと言及せずそのまま彼女の話を聞いていく。

「それに、その…私、新しい命を宿してるんです。いくら言っても、あの人は聞く耳を持つてくれなくて」

「…は？えっ？ち、ち、ちよつと待て。

いきなり何？新しい命？ドユコト？」

そう言った彼女はお腹を手でさすり、そうなった経緯を聞いていく。

「んー…えーつとつまり、そのなんだ。

お腹に子を宿してるってこと？」

「はい。

私だけじゃなくて、お腹にいる子にも危険に晒されて…暫くそちらに同居させて頂けますか？」

彼女は正輝の質問に頷き、彼は深くため息をついた。冷静になろうとしつつも、最初に店員が落ちた手拭きを取り出して両手を拭く。

拭き終えた後、少し右手で顔を拭う。

拭った後にガラスコップにある水を飲み、半分まで飲み干すと、今度は軽いため息を吐きながら瞳を閉じて冷静に考えようとする。

「ツーツ…フーツ」

が、平常を保とうとしても頭の中では彼女に対する盛大なツツコミが止まらない。

（…：…はあああああああつ！！？）

こんな年端も行かない子が身籠ってるってどういうこと！！？立花じゃねえけど言ってること全然分かんねえよ！！？

あああつ、もう、ふざけんなってホントに！こんな物騒な話を直接フェイト達に聞かせなくて良かったわマジで！！？

家の中で話さなくて良かったわもう。

あーもうつ、いや、もう、ふざけんなよ！

こんなヤベエ爆弾抱え込んでいる女の子を船に引き入れたのか綺羅は！！？

この子をこんな風にした奴も大概だけど！

大概なんだけど！！？

マルコと愛のカツプルとかこんな話聞いたら確実にキレるだろ洒落にならねーって。

その子を身籠らせた彼氏の顔をぶん殴りたいよ。まさか時限爆弾以上に凶悪な厄介な抱えた人が飛び込みで来るなんて…：…こんないつ爆発してもおかしくないって。

…まあ、一応外見で判断しちやいけないし念のために聞くか

頭を抱えつつも、何かしらやむ終えない事情で複雑な関係になったんじゃないかと深

読みしつつも質問した。

「…えーと、歳はいくつ?」

「じつ…16歳です」

「で、相手は学生か?」

「……はい」

(ええっ…自分で何言ってるのか分かってるの?)

質問をしても、答えて欲しくない回答ばかりが彼女に心の中で困惑していく。本当に歪な関係を持っていて、引き気味だった。

(あーもう、やめだ!やめ!)

懐妊云々は個人的にどうしてそうなったかすっごい気になるし、色々とツツコミたい事は山ほどあるが、ひとまず…今、この事を深く言及するのは無しだ!

若気の至りであってしまったのかもしれないが、彼女はそのことで深く聞いてほしくないと思ふ顔をしている。

これ以上その事で聞くのは野暮だと思い、本題へと話を戻していく。

「あーうん。もういい、その詮索は後回しにしよう。話が長くなりそうだから…今は、ここに来るまでの経緯を聞くのが最優先だ。」

同居云々もちよつと考えさせて、後から返事する。

それで綺羅が、お前を無理矢理船に入れたんだな」

「眠らされて。気づいた時には船の中に」

（やっぱ話聞いてもありえねーって：まず俺でなくとも姉と先輩がこんな話を聞いても、『自分は綺羅の船に引き入れてたんだー！助けてー！』なんてこと絶対信じないって。

あの二人でもこんな話されて、信じて欲しいなんて無理だろ。

つーか、冷静に考えて綺羅がコイツを入れる必要性があるのか？綺羅が攫ってるって言ってるけど、役に立たない人間は切り捨てるスタンスなんだから、絶対無視してるだろ。

てか子を患っているって言ってるののに船に連れて、家事をやらせるか普通？

船に入れたところで厄介毎にしかならないだけだし：身籠ってる学生を利用なんて余計に不憫なだけだよな。人質にする対象ならごく一般人を選ぶだろ普通は。

てことは消去法で：麻紀が仲間にしたのか？

え、あの麻紀がこの地雷女を？

マジに麻紀が仲間にしやがったのか？

それとも、もし正義側っていうのがもし嘘だったら、第三者側の殺者の楽園とかロープ陣営の連中に脅されて来たって線もあるし：マジに何がどうなってるの。

一体こいつ船に連れて行った奴は誰なの!? もしかして、殺者の楽園が無理矢理連れてきたとかじゃないだろうな!!?

ああ頭痛くなりそうだよもー…もう知らないところで厄介毎が次から次へと増えるような気がするんだが)

突拍子もない話を聞きながらも、頭を悩ませていた。

有耶無耶に返事する彼女が、安全ということはない。彼女が被害者だと発言しても、どうにも信用できなかった。

「…ふーん、そう?」

ならどうやって逃げ出せたんだよ」

「それは、逃げるのに必死だったから何も覚えてなくて…!」

「の割には服はそんなに汚れてるわけでも、かと言って大層な怪我をしてるわけでもない。」

なあ、お前本当に綺羅に狙われてたのか?」

「だから、本当に狙われてたの!」

(なんか嘘臭え…)

追い詰められて懸命に事情を説明しているが、対正輝の方は全く信用などしていなかった。強張った顔で正輝に訴えて、必死に助けを求めているも厄介毎を抱えている。

「ここに来れば安全って誰に教えてもらったんだ？」

さつきも言ったが助けてもらえる施設なんて交番とか市役所とかいくらでもあったろ。まあ状況を聞いた感じ、半信半疑ってなるだろうけど、別にこっちに助けを求めなくとも他なら最低限の保護をしてもらえたんじゃないのか？」

「貴方が綺羅の事を知ってるなら、民間に頼んでも意味ないことぐらい分かってるでしょ!!？」

もう頼れるのは貴方しか頼れないの!!？」

（それが人に物を頼む態度かい）

市役所に頼んでも意味ないのも、命を狙われて必死なのも話を聞けば分かる。怪しいと思われてしまうことくらい簡単に分かることだと思っていたが、それすらも考えられないくらい彼女に余裕がなかったのか。

それでも、不自然な点はあった。

「えっと、それじゃ逃げたのは一人？」

「そうです…はい」

「協力者が、いるなら何人いた？」

「姿も見せられなかったのか？」

「命を狙われているから姿は見せられないって」

「それじゃあ西園寺さんは姿も見えない相手をすぐ信用した。声も女か男かも分かんないけど、とにかく死にかけだったから生き残る為には疑う余地はなかったと」

「は、はい…貴方の言う通りです」

状況を見てないから、何とも言えない。彼女の言っていることが曖昧で、どうにも信用することができない。

幾ら必死でも、傷一つもないのはどうにも不自然だった。

（ハア…相当頭が悪いのかあ、コイツは。

ごく普通の女子高校生が綺羅達を相手に、たった一人で逃げ出せるほど間抜けな訳ねーだろ馬鹿か？

自分の情報を持っていかれる前にさっさと抹殺されているわ。

仮に協力者がいたとして、この女がここに来る事をどうして俺へ事前に話を通してすらいなかった？

こつちまで来てるってことは協力者が優秀だったとか？自分の命を狙われているのなら、俺の目の前にいるこのヤバい女は命を賭けてでも守らなきゃいけない程の大事な人だったってこと？

でも話を聞く感じ…なーんか辻褄が合わないんだよな。

コイツの言う通り通信や念話の傍聴がされてのを恐れてるなら…文字を浮かび上が

らせたり、ライトで文字を見えるような細工を仕込ませた手紙を送るとか。そんなにコイツが自分を危険に晒してまで本当に大事なら安全な所に連絡する手段なんて幾らでもあつたらう。

本当に優秀ならそれくらいは考えるだろうし、それとも綺羅に見抜かれて何も準備できなかつたとか？

：そもその話、綺羅がごく普通の女子生徒一人を見過ごすようなポンコツなら誠司と蒼海が死ぬ事だつてねーんだよ

正輝は拙い話を聞きながらも、余りに彼女にとつて都合の良い盛り盛りに盛つたような気がして長々と彼女の言い分をに呆れた返事をする。

（話聞いた感じ、総じて嘘吐きとしか思えなくなつてきた：証明するものなく海外に学校を作つてましたつて言つたくらい相当酷つてえわ。

黒寄りなんだろうけどさ：確たる証拠がないから確定じゃないし。かといつて命を狙われているのが本当なら見過ごすのはちよつと不味い気もするし）

「あーもう分かつた、よく分かつた。

ちよつと空き部屋を用意しておくよう交渉してくるから、ほとぼりが冷めるまでは暫くそこで大人しくしとけ。

こつちも忙しいんだ。

熱りが冷めるまでは部屋には出るなよ」

命からがら逃げ出せたにしても、衣服は多少汚れているだけで大怪我を負ったわけでも無い。

かと言って本当に被害を被っているが本当なら、後日狙われて殺害されるなんてこともありそうだと頭を悩ませている。

「……ましてや、海鳴市に身元不明の女子高生の死亡遺体なんてニュースで流された日には、相気が滅入ることになる。」

『後日、また来てくださいつて言つて追い出す』つつーのは逆に悪手になってたかもしれないなかつたしな……』

考えた末、折衷案として決戦編が終わるまでの間はプレシアの庭園にいる事を勧めるしかなかった。

その場所なら誰かに命を狙われることなく、落ち着くまで身を隠すことができる。しかし、

「大人しくつて……そんな簡単に！」

これだけ貴方達の家同居させれもらえますかかって頼んでいるのに……それを空き部屋つて……こっちは真剣なんですよ!!? 真面目にやって下さ「そんなにも不服か?」
ツツつ……!!?」

彼の提案に対して、彼女は反抗的だった。

望み通り狙われる事のない場所を用意したことで安心するかと思っていたはずが、別の場所に住むことに納得できない様子でいる。

「事情も、命を狙われて必死になるのも分かった。だから、こつちもできる範囲で保護する。」

悪いが話を聞いても、マンションに同居させることはできない。だからといって、部屋は部屋でも特殊な場所だからよっぽどのが起こらない限りは誰かに命を狙われることもないだろう。

アンタとアンタのお腹の子は俺達を守る、そこは信頼してくれ。

それでも以上喚くようなら……お前を危険人物として強引に牢屋に幽閉せざる負えない」

「わ、私はただこのマンションに同居させてもらいたいだけで！」

「【被害者】だから助けてくれと宣いてるようだが……俺側からしたらあくまでお前は面倒ごとを押し付けてきた【厄介者】か、【容疑者】でもあるからな。」

そもそも何で同居してもらおうことに固執している？不安だから俺達に守ってもらいたいのか？」

正輝が彼女に敵だということは言わないのは、確たる証拠がない以上、彼女を力づく

で脅すわけにいかなかった。

正輝側からしたら、彼女が本当に敵かどうかはまだ決めれることじゃない。

「気持ちわかるよ。正義側こつちの揉め事に巻き込まれて、命まで狙われてるのが本当だったのなら情状酌量の余地はあるのかもしれないな。

でも、俺からはお前の発言も信用できかねないし、安全な人間とは言い切れない。

納得できたなら、もう黙っていた方がいい。

お互いの為にも。

でも仮にもし…凶器とか隠し持っていたり、それを使って脅すようならそつから先はもう言わなくても分かるよな？」

（コイツが敵だっという線もある。

そんな時は誰の差し金かは知らないけど、その場合は俺達を陥れようとする敵ってこともあるな…これ。

…被害者面して、同情買わせるなんてことも）

正輝の脅しに、彼女の顔が少し青ざめたように見えた。

マンションに同居したいって願っていても、そんな不透明な言葉ばかりの返事でフェイト達と一緒に住まわせるなんてこと正輝でなくともプレシアも許せるわけがない。

「それで、他に聞きたいことはあるか？」

「その…探している人もいます。

ルークって男性はご存知ですか」

「…ルーク？知らない」

「そ、そうですか。

赤髪の長髪と緑色の瞳をした男性の人です。

見かけたら連絡をお願いします」

彼女は、正輝に人探しのことまで頼まれた。

写真を取り出し、それを見せていく。

若い男性で赤い長髪が写っており、現代人のような服装ではなかった。

「…少し外に出る、暫く待ってろ」

店から出る前に小声で、シャドーに指示を送る。

「…シャドー。西園寺世界って女を…当面の間監視しろ。ナイフとか凶器を持たせてる可能性がある。

監視役として4体くらい配置につかせる。

不審な動きがあれば、すぐ取り押さえろ」

『了解しました』

（アンタとアンタのお腹の子を守るって言ってるのに、何で少し残念そうな顔をした？

：母親なら子供を守ってもらえることに喜ぶだろ普通は、どんな感性してんだ？

世界に信用してくれと言っても、正輝自身は彼女に対してはほぼほぼ信用していなかった。

何処までが本場で、嘘なのか。

確証が余りに無いから、聞くだけ聞きつつ行動の様子見していくしかない。

用件を聞いた分身達は椅子やテーブルといった影に散り、正輝は喫茶店から出る。その店から少し距離を離し、正輝は頭をかきながら携帯を開いていく。

（問題が山積みで本当に頭痛えな…マジで姉さん早く来てくれ。

つーか連絡したい。

もうなんか悪い予感しかしねーぞ）

『…プレシア、ちよつと良いか？』

『何かしら』

開いた携帯を操作しつつ、今度は念話でプレシアにある頼み事をお願いをしていく。

『時の庭園の部屋を貸してもらって良いか？』

さつき来てた女と話してみたんだが、フェイト達と一緒にいるのは危険だと判断した。

かといって強引に追い出すのもな。様子見つてことで、当面の間はシャドーで監視す

る』

『…ええ、それなら部屋の確認をしておくわ』

『ありがとうございます。どういう話をしたかについては、部屋に入れてから二人だけで話しますね。』

フェイトとアリシアに聞かせるのは、余りに酷すぎるから』

プレシアのお願いも終え、最後に携帯の連絡先に登録している人物に電話をかける。証拠が無いのなら彼女の口から、証言をして貰えば良い。

「あー…もしもし俺だ。」

ちよつと頼みたい事があるんだがいいか？

今日すぐに取り掛かるわけじゃないが、ちよつとした準備をして欲しいんだ」

正輝は電話をかけた。彼女が安全かどうかグレーな相手に対して、善悪の選定が可能な仲間にいる。メディアでも可能だが、彼女にはフェイト達の護衛と陣地の防衛を強化する仕事を既に任せている。

正輝が電話で頼んでいる相手は、

『ヤハリ申告サレタ通り、電話シテキマシタカ。用件ハ女子高生ノ虚言ヲ見抜イテ欲シイトイウオ願イデスカ？』

西園寺世界の口からポロを出させる為に欠かせない人物だった。

7 話深み（正輝ルート）

1-1【正輝視点】

1 2 / 3 1 9 : 0 0

正輝はフェイトの家に行ってきた西園寺世界を虹の庭園に空いてある個室へ案内し、保護という形で彼女を軟禁することとなった。

虹の庭園から家へ戻った正輝は、フェイトに話の続きを聞いていく。

すずかの家に正輝達の仲間がいて、どうなっているのかを。

「…今から、すずかの家に電話する。

全員来てくれ」

正輝は響とクリス、セイバー、浜風を呼び、月村すずかの家電に電話をかける。

まず最初にメイドのファリンと話し、翼達の関係者とのことで彼女達に代わるようお願いしていた。

『もしもし、正輝さんですか？』

事情はすずかちゃんから聞いてます…ご迷惑をおかけしてすみませんっ」

「えーっと、ファリンさん…だったか？」

謝るのは、こっちの方です。

今は姉が不在で、連絡が取れてません。

仲間とそちらの誤解から、いざこぎもあつたのも聞きました。

翼達がいるのなら電話を代わってくれないだろうか。

仲間が無事かどうか、確認したいって」

そうして、ファリンから翼に電話を交代する。

『ああ、今変わったところだ…正輝か？』

「…翼だな。俺と話す前に先に響とクリスが心配していたから、まず二人に変わるぞ」

声を聞いた正輝は、隣で心配している響とクリスの二人にも話せれるよう音量を大きくするよう設定する。

「あ、変わりました！えーと、聞こえますか？翼さん」

『その声は…立花か。フェイトの家にクリスもいる事は、すずかという子供から聞いている。』

無事で何よりだ』

「たくつ、先輩も無事で良かったよ…」

お互いに、声を聞いて安心する。すずかの家には間藤桜、ライダー、風鳴翼、曉美ほむら、赤城、加賀の6人が住まわせてもらっている。

「あの、そっちは何かあったんですか?」

『いや…どうも説明がし辛くてな。私含めて全員、正輝のお姉さんが仕掛けた罠を喰らって…暫くは動けそうにない』

「えっ、正輝のお姉さんが?」

「どうしてそんな!?」

同盟を組んでいるはずの正輝の姉こと嶺がすずかの家に罠を設置し、仕掛けていた罠が正輝の仲間に対して作動したことに。

「…案ずるな。私含めて、軽い捻挫と打撲くらいで済んでいる。この別荘に住んでいるすずかの家族が罠を停止してなければ、自己防衛の為にシンフォギアを纏っていた。」

「どうやら侵入者だと勘違いしていたみたいだな。私含めた他の四人も武器を構えていた直前で、本当にギリギリだった…この家に罠を仕掛けたのは正輝の姉さんらしいのだが、正輝本人は家中に罠を張っていたことを知っていたのか?」

「響が困った顔のまま正輝の方に首を向き、話していたことをそのまま伝える。」

「あの…翼さんから、正輝さんはすずかちゃんの家の事を知っていたのか?」

「聞こえてる…だが、姉の事情について俺は全く知らんぞ?翼に何かあったのなら、

ちよつと変わってくれないか」

「それが、正輝のお姉さんが罨を仕掛けてたみたいで……あつ、翼さんから正輝さんに一度電話を代わって欲しいって」

響から受話器を受け取り、音量を調整しつつ電話を代わる。

「……あーもしもし、響達から俺に代わったぞ。ウチの姉がすずかの家に何か仕掛けていたのか？」

「メイドの話聞いたのだが、月村すずかとその友達が登校中に攫われた事例があったそうだ。

家が襲われる事も加味し、罨の設置も家族から公認している」

（ああ……まあうん。確かにウチの姉ならやりそうだな……すずかのメイドも迷惑をかけたって言ってたのもそういうことか）

正輝がフェイトと出会っている間に、姉がアリサ・バニングスと月村すずかの2人に会い、すずか家の別荘へ居候してたことすら知らなかったのだから。

「うちの姉が罨を設置する際に、侵入者が入らないように作動したんだろう。

まあ俺も姉からは何も言われてなくてな……怪我させてしまったのなら俺から謝る。転移して早々、四人には災難な目に合わせて申し訳なかった」

「気にするな、罨を仕掛けたのも家の娘を守る為に仕掛けたのだからな。

攫われそうになった前例だつてある。

他の三人も、事情を聞いたら納得していた。

…それで奏は無事なの？

それとも船に残つたまま？」

翼が次に聞いたのは、天羽奏のことだった。彼女も場所が分かればすぐ言えるのだが、まだわからない。

「いや…俺達と同じように散り散りになった。

まだ見つかつてもないし、連絡もとれてない」

「そうか…もし分かったら、また連絡して欲しい」

「ああ、とりあえず一人ずつ変わってくれ」

翼との電話を終え、今度は晧美ほむら、間桐桜、赤城の順番に正輝が対応していく。

翼同様、関係者達の安否を心配していた。

「…まどかは今何処にいるのかわかるの？」

「さやかだけは発覚してて、士郎達と一緒にいつて行つてる。他の四人は、悪いがまだ探してる最中だ…まどかのことを心配してるのは分かるが」

「…さやか以外は、まだ見つかつてないのね」

「悪いな…こつちもなんとか調べてみる」

「……」

「ん？おい、ほむら？」

「え、ええっ…何でもない。さやかと無事合流することと、まどか達を探すの…貴方達に任せたわ。」

それじゃあ、桜つて人に変わるわよ」

何か言いたげな様子だったが、そのままほむらから桜へと電話が変わる。

「あの…先輩や、姉さんは無事なんですか？」

「士郎にはランサー達がいるから、大丈夫な筈だ。遠坂は探してもまだ見つからない…最悪、俺の令呪でセイバーを士郎の元へ移動させることも可能だ。そっちは無事か？」

「無人島の頃にいた他の艦娘達はどうなってますか？」

「浜風はこっちにいて、不知火が士郎達と一緒に行動してる…他は、悪いが今のところ何処にいるのか分からない」

桜、赤城の順に話をし、安否の確認を終える。

もう一度、電話を翼に代わり、続けて今後の話をしていた。

「ああそうだ、四人とも携帯は大丈夫…なわけがないか。問題ないなら俺に電話するよりも先に安否を確認してるもんな」

「…私達だけじゃなく、正輝達も連絡が取れなくなってるみてーだしな」
「俺達も二日前に到着したばかりで、今はまだ待機だ。」

それで、お前らはどうする？

「さすがの家から、俺達の所に合流するか？」

正輝はそう聞いたが、翼はしばらく何も返事をしない。電話越し表情が分からず、話すのをやめて別のことをしてるんじゃないかと、もう一度確認する。

「…おい、翼？もしもし？」

電話繋がってる、よな…？」

「あ、ああ…いや、すまない。」

少し考え事をしていた。

悪いが、私達は暫くの間はさすがの家に泊まろうかと考えてる。仲間を探すにしても襲撃されるのなら、落ち着くまで合流するのは控えようと思ってる。

このことは電話する前に全員と話をして、皆そのことに納得してくれた。

寧ろ、正輝達は街中に散らばっていった仲間を最優先にした方がいい」

「…分かった。他の仲間の居場所を知ったら、そっちに連絡する。」

長話させて済まなかったな、それじゃあ切るぞ」

話を終え、電話を切る。これですぐかの家にいる翼達と話すことを済ませた。

「それで、翼さん達とはどうするつもりですか？」

「…いやそれがな、まだ俺達と合流はしないとのことだ。先にレイナーレ達のような外にいる仲間から合流させて欲しいとな。街にいる敵がそこらじゅうにいるから、控えるって」

「それじゃあ先輩達は暫くの間、フェイトの友達…：すずかつて子の家に居候することになりそーだな」

こうして、すずかの家にいる仲間達と電話を終えた。散らばった仲間の生存と居場所が分かったことに安堵する。

ただ一つ、正輝が少し気がかりだったのは何かあつたかと聞いたことに対してレイナーレだけでなく、翼達も返事に戸惑っていたことだ。

（四人とも…：やけに冷静だったが、なんで戸惑ってたんだ？）

特に翼とほむらも奏とまどかの安否を確認したいだろうから、二人の居場所をすぐ見つけてって絶対言いそうなものだ。

俺からも他の仲間を探したいって言われるかもしれないから、こつちで動くから待機してくほしいってお願いするつもりだったんだけど。

それとも、少し間を空いて返事したのもあつちでも何か言えないことでもあつたのか？

もしかして俺や響達には言えないような事故が起きてるのか?)

フエイトの家にずっといる正輝達が知らない間に、外で何か重大な事が起きているのかと。

(まあ…今は探つても仕方がないか)

考え事をしている最中に、今度はフエイトが不安そうな顔で正輝に声をかけた。

「あの… 私達から話があるんだけど良いかな?」

「ん、どうした? フエイトにも話さなきゃいけないことが、まだ他にあつたのか?」

「実はね…すずかの家のこともあつただけど、もう一つ話さなくちゃいけないことがあるんだ」

(みんな来てくれ、フエイトから重要な話があるつて)

正輝は翼との電話を終えて解散した仲間全員を、もう一度戻ってくるよう念話で伝える。

全員フエイト達の話を親身に聞き、囲んで事情を聞いていた。

「…それで、何があつたの?」

「登校と下校中に誰かに見られてるような気がして…正輝が電話してる最中に、もう母さんにはちゃんと話したんだ」

「見られてるつて…?まさか誰かに尾行されたとかか?」

「ううん。ただ私達を眺めてるようなだけで、尾行とかはされてないかなって、思う…もしそうならアルフの嗅覚で分かるし、バルディッシュも念話で警鐘をしてると思うから」

「見られてるって感覚はあったけど、学校の行き帰りで探りをしてくるようなことは誰もしてなかったかな。」

匂いを嗅いでたけど、フェイト達を尾行する人は誰もいなかったよ」

（ただ見られてて何もしてこないってだけか。

うっかり目に入ってしまったとか、

これも一応、調べてみるか…）

フェイトと一緒にいるアルフも、危険を感じてない。周りから見られているというだけなら何も問題なかったが、この芳しくない状況で二人を狙ってこないとは限らない。

「あの…曖昧な事を言って、ごめんなさい。」

なのは達も登下校する時に不安に感じたから」

「…まあ、気にすんな。フェイト以外にもなのはまでそう感じ取ったのなら、調査してみるよ。」

ただ視界に入ってただけなら、他の一般人と然程変わらないだろうし」

帰宅中のフェイト達を、ずっと見ている人がいないか調べることも新たに必要となっ

た。

「うん、ありがとう。」

それと……家に来た女の人はどうなったの？

近くの喫茶店で色々と話してたんだよね？」

「……まあ情緒が不安定だったからな。暫くは虹の庭園にある小部屋で大人しくしてもらうようにしたんだ」

「あの人は、正輝の知り合いだったの？」

「いいや。全く知らない女だったよ……」

苦い顔で、そう返事を返す。正輝やプレシアにとって助けを求める為とはいえ、急に家上がり込みようとして来た西園寺世界という女のことにあまり良い感情を持ってなかつた。

12 / 3 22 : 30

「お疲れ様。」

貴方、随分と参つてるわね」

「ああ……まあな」

フェイトとアリシア、娘の二人が寝静まっている間に、家に訪ねてきた西園寺世界について話をしている。

正輝の仲間も全員眠っており、まだ起きている二人は机に向かい合いながらも黙って考え事をしていた。静寂な部屋で、壁につけてある時計の針音だけがカチカチと鳴っている。

「……………」

レイナーレ達だけではなく翼達ともフェイトの家合流すべきなのかと正輝は迷っていたが、考えることが多過ぎて保留にするしかなかった。

プレシアと正輝はフェイト本人から誰かにじつと見られていると言っていたことにも気になるが、西園寺世界の話にお互い深刻な顔をしてずっと考えている。女子高生の内情を聞けば聞くほど、生々しい裏事情を抱えていることを察してしまうことに。

「……ああ、そうだ。」

部屋の件は本当に助かったよ、ありがとう。

俺達のことにも、気を使わせてしまった」

「気にしないで。さっきの話を聞いた通り、世界つて人を娘には近づけない方が良さそうね。」

こんなことアリシアとフェイト、アルフには絶対に言えないわ。

ごめんなさい。

貴方達の方もやらなきゃいけない事があるだろうけど……帰ってから、フェイトとアリアのことまで……余計に増やしてしまったわね」

「困った時はお互い様だ。世界つつー女の子は、情緒不安定だったのは本当だったから暫くは虹の庭園にある空き部屋に住ませるって表向きには言っておいた……が、子を身籠つてることについては一部の仲間やフェイト達には黙っているけどな。」

仮に聞いたところで分からないから首を傾げると思うが、今のあの子達が後々意味を知るのはあまりに危険すぎるし」

話を一区切り終えると、二人ともまた黙ったままになつてしまう。

テーブルの上には正輝とプレシアの紅茶があり、二人は椅子に座つてゆっくりと飲む。

一息ついたところで、これまでのことについて話を始めた。

「ねえ……西園寺世界、っていう名前よね。」

彼女について貴方はどう思つてるの？」

「まだ半信半疑の段階だ……これから調べる必要がある」

「私達が知つていることとしたら、彼女はまだ未成年で……そして、新しい命を授かつている事よ。娘達や貴方の仲間達に余計な心配をかけたくないという気持ちはあるけれど、今は少しでも情報が欲しいわ。」

それに、不自然なこともあるの。

このマンシヨンのことはフェイト、アリシアの友達と家族、会社と学校以外には誰にも言っていないの」

「…え？どういうことだ？」

「私に気になってしているのは、私達が全く知らない女子高生が、どうやって私達のいるマンシヨンや部屋のことまで知って来たのかってことも」

「協力者がいるとか言っているのは、俺達ですら引越したことを知らなくて、フェイトとアルフの二人に教えてもらったばかりだった。

俺達は知らなかったのに、なんであの女はこの家を知っていたんだ？

誰かに教えてもらったとは言っていたが」

フェイトとアリシアが見られているという言葉に引っかかり、もし二人を見ていた中の一人が、家に来た女子高生だったというのなら。

確定しているわけではなかったが、プレシアは椅子から立ち上がり、デバイスを取り出して虹の庭園に行こうとする。

「あれ、あの何処へ」

「虹の庭園よ、少しあの女の子のことで確かめたいことがあるの」

「…おい、まさかっ!?」

フェイトの話と、彼女が突然家に来たことが繋がっているのではないかと気が立っていた。目的が助けてもらいたいこととは別に、家に侵入してフェイト達を脅かそうとしているのではないか。

「彼女も娘達の下校中に尾行してた一人だったかもしれないと思ってるの。それなら教えてない家の場所まで訪問できたのも納得がいくわ…もしそうなら」

「ちよつと待て…冷静になれ！」

流石に早計過ぎるだろ!!?

仮にそうだとしても、俺のシャドーがとつくに知らせが来て探りを入れてる…つか、アルフの嗅覚で尾行されてることまですぐにバレちまう。

力づくで吐かせようとしたら、俺の仲間だけじゃなく娘達だつて」

「まあ確かに…それもそうよね」

彼女の反応に慌てた正輝は、改心してなかった時みたくフェイトに鞭で躰をした事を西園寺世界にもしてくるんじゃないかと抑えていた。

かつてプレシアはアリシアを失ったのだから、もう失いたくないと余計に子供を過保護にしたい気持ちもわかる。

が、乱暴な手段で世界に拷問をして吐かせようとしても、娘にバレたら幻滅するだけだ。

かといって、世界の言葉を信用できないのは正輝も理解している。

2人は、苛々する気持ちを抑えていた。

「あの少女の件は俺と仲間の一人が打開策を見つけたから、手短に済ませようと思っている。」

兎にも角にも、その怪しい連中が西園寺世界つつー女子高生と関与するしない云々以前に…娘の2人を危険な目に合わそうものなら、俺達も全力で助けに行く」

「…当たり前よ」

いずれにしてもフェイトとアリシアが危険な目に遭うことになれば、母親だけではなく正輝達も危険を顧みず全力で二人を助けに向かうこととなる。

（ただ調査するには1st達の仕掛けた無人機達と罫をどうにかしないと、迂闊に街に出掛けられねーし…まあ、助けに行く時とかはどうしようもないが）

1stの性格上、街に蔓延っている無人機がなのは達を襲わないことは幸いではあるが、正輝達が助けに行くにも必ず障害にはなる。

「ああそれと、貴方のデバイスを用意したわ。」

持つてなかったでしょ？

あつた方が助かることもあるんじゃないかと思って用意したの」

「おおマジか、助かる」

プレシアは立ち上がり、机の引き出しからペンダントを取り出していく。よく見ると、それは銀の首飾りに真ん中には緑色のデバイスが埋め込まれていた。

「十字架か…」

「起動させてみて」

正輝は、プレシアの言う通りに起動させる。

服に大した変化は無く、凧形のカイドシールドが装備される。

「盾と…服は俺が常時使ってるシステムと合わせるようにしてるのか」

「バリアジャケットが必要なら、設定で変えることができるわ。デバイスはフェイトと同じミッド式だけど、使い勝手は違う」

「…武器は盾しか出てきてないが…まさか盾だけで殴るの?」

「裏側を見なさい。盾で殴ったり、自分の身を守るだけじゃないのよ」

そう言われた正輝は、盾の裏側を見ると棒状の柄が2本か付け、ボタン押すと魔力の刃が放出される。

「確かにあるな…だが、柄が破壊されたり場合はどうすれば良いんだ?」

「盾に魔力を込めて、新しく柄を作るの。」

破損したら、フェイトと同じようにリカバリーの修復魔法も可能よ」

「やってみるか…」

そう言つて魔力を込めると、持ち手の下側に長方形の穴が出現する。

その穴から1・2本の柄を放出し、穴は閉じる。

「確かに補充はできるな。これで接近戦は聞いたけど……なのはとフェイトのような遠距離魔法は使えるんだよな？」

俺の場合はどうなるんだ？」

「それじゃあ、切り替えてもらえるかしら」

そう言われ、デバイスの機械音と共に遠距離用として盾から大型のクロスボウへと変形していく。

『ボウガンモード』

「魔力弾を弓矢状に変形させて飛ばすわ。柄を矢にできるし、魔力の質を変えたら、氷と火、爆弾矢にもなる」

「……へえ、流石技術者。よく考えたなこれ。」

まあ実際に使うのは慣らしてからじゃないと無理そうだし……今のところは盾メインで使うかな」

弓の形状をじっくりと見て、デバイスを元に戻す。

「それで、デバイスには何て名前をつけるの？」

「ん？名前か……そうだな。」

このデバイスの名は、ローワンにしよう。
今後ともよろしくな」

〈y e s . s i r 〉

12/4 7:00

「なんでこつたつ…istの仕業か。俺達の電話を盗聴するより、遮断した方を選びやがったな」

レイナーレ達との電話が、突然繋がらなくなってしまった。他に電話をしようにも、電波の届かない所にいますと返ってくるだけ。

強制転移も条件を科せられている。

……完全に、仲間と合流を阻止されていた。

『申し訳ございません。街の奥に進むのは現状の人数では不可能です』
「…それほどまでに時間がかかるのか？」

一応サーヴァントと同等の力を授けてるはずだし、気配遮断も施したはずだが」
『年齢、容姿を誤魔化せないような繊細なセンサーを備わっております。無人機の他に、マスターと同様の能力であるシャドーを、2ndの綺羅も使っているみたいです。』

彼らだけではなく、重装備の黒い少女達にも奇襲を仕掛けられています。

その上、気配遮断を使用して潜入したとしても、黒い少女達に狙撃されてしまいます』
街を偵察しようシャドーを向かわせたが、その進捗があまり上手くない。

『仲間の散策を継続させますか?』

「…継続だ、今度はシャドーを5、6体増やす」

『了解しました』

シャドーは現場に戻り、仲間の散策を継続させている。罠の位置もゼロに教えてもらったことで分かっているが、内通していることもバレないように敢えて罠に引つかかっている。

ただ問題なのは、

(センサーに、無限湧きの無人機と罠、その上に俺と姉さんがいつも分身で使っているシャドーを綺羅がコピーしたのか…これじゃあ仲間の散策どころか、昨晚に相談してくれたフェイト達を見ていた連中の調査すらままならないな)

フェイトの調査を調べるにも、まずistが配備させている無人機達が邪魔だった。そのまま罠と無人機を突破してたとしても、今度は騒ぎに乗じて今度は綺羅のシャドー達と、サーヴァントと同等の実力を持つ黒い少女達が奇襲を仕掛けてきたりと、踏んだり蹴ったり状況が続いていた。

既に、姉からもらったアイテムを活用させている。

特に使っているアイテムを挙げるとすれば、投煙球と呪符だ。

投煙球は戦闘から一時的に逃げることで可能だが、他のセンサーで戦闘が発生した時に綺羅のシャドーも見張っているから、今度は別方向から来る敵と戦うことになってしまふ。

呪符についても、鹿目まどかやアリシア・テスタロッサのような戦えない人でも護身用として扱える。

有効に扱える分、消費アイテムだから使用した分は消える。特に散らばった仲間達は、アイテムを補充することができない。

ある程度の戦闘は、避けられないだろう。

「……フエイトの家に到着してから正輝自身やる事が多すぎて、かなり気が滅入っていた。

「……正輝、士郎達の他に凜達は見つかりましたか？」

「綺羅達の妨害がかなり厄介でな、全く仲間を探すのも思うようにいかない。もうこうなったら100体一気に出して探索させることは可能だが……ロープ陣営や殺者の楽園

まで出てくると考えてたら、そこまでやる決断が出来ない。

こっちも倒しながら進んではいたが、碌に探索が進まない…結界が張られて、無人機達を倒すのにも時間がかかる。

市内の奥までは簡単に進ませてくれない。

仲間の探索や敵の散策をしようとしたら…まず、このフェイトの家の周りで戦闘になる。

向こうも嚴重に見張ってる」

「仮に数を増やしたとしても、簡単には合流させるつもりはないのでしよう」

「…そうなるな。とにかく区域を絞らないと、1人で突っ込んだところを袋叩きにされてしまう。

よっぽどの理由が無い限りはお前らも絶対外には出るなよ。久野の無人機が巡回している以上、仲間を探してる最中に狙撃されてしまうからな。

船から仲間を呼べるけど、それでも人数と転移範囲をかなり制限されてる。

いつでも仲間の元へ、助けに行けるよう準備しとけ」

スーツと私服を着ている男女が、街中にいる。

彼らは一般人であるが、この世界の住民ではない。元の世界に帰る目的が為に指示

に、麻紀に従ってカメレオンのように海鳴市に住む市民達に溶け込み、偽っている。

海鳴市に住む民間人と彼らに違いがあるとすれば、特殊な通信機を持つているだけ。市民に紛れ込み、なのはとフェイト達のような子供達の下校を遠くから眺めている。

見ているだけで、彼女達に手を出すことはない。確認してはポケットに入つてある端末を掴み、真ん中にある黄色のボタンをただ押していく。

子供達が散り散りになると、見ていた彼らは別の端末を取り出して誰かに暗号を伝える。見ていたのはなのは達だけではなく、他の子供にも遠目で確認していく。

なのは達以外にもバスで帰る子供もいれば、アリサのように高級車に乗って帰ることもあるだろう。

また、さすがが図書館に訪れた時、彼女が八神はやたと楽しく会話している。その図書館の中にも容姿は眼鏡をかけた学生か、主婦の格好をした人がはやて達を見て、同じ端末を取り出してボタンを押ししていく。

誰も怪しい行動をするような事はしていない。

側から見ても、誰も彼もが異様な行動をせずに平穏な日常を暮らしているだけ。

しかし、別世界に連れてこられた彼らに対してIstの罠が起動せず、分身や男女の識別を見分けるほどのセンサーですら全く引つ掛からない。

「……では何故、彼らはIstの仕掛けた罠に引つかからないのか？」

1stの罠に引っ掛かることも、綺羅達に襲われることは全くない。この決戦編で危険視されることもなければ、そもそも知らない人物のことなど全く眼中にない。

それは彼らはモブであり、モブであるが故に同時に一般市民の群れに隠れ潜むことが可能だからだ。

そんな彼らが行動を起こし、この回りくどい大掛かりな陰謀が明らかになるのも、もう少し先の話になるだろう。

12/4 0:30 フェイトのマンション宅

「あら、知らない電話番号ね…？」

ちよつと正輝、来てもらえないかしら」

この日も正輝とプレシア以外の全員は、ぐっすりと寝ている。家電が鳴り、画面に電話番号が表示されてもプレシアは困惑した顔で受話器を取らない。

「…いや、俺も分からん。

留守電まで少し待とう」

呼ばれた正輝も知らない電話番号だったから、困った顔のまま手に取らない。そのまま電話を取らないまま放置し、留守電話へと切り替わった。

留守電の伝言が士郎の声だと分かると、すぐさま正輝は受話器を取った。

『あの、この時間に電話してすみません…衛宮士郎って言います。持っている携帯電話が突然遮断されてて、こうして家電に電話してるんですけど…』

「あーもしもし、正輝だ。携帯を変えたのか? 『正輝か!こんな時間に起きてくれて助かった!』」

正輝と彼の仲間全員が持っている携帯電話で連絡できないことは、昨日のことで分かっている。

「電話番号も変わってるし、状況が状況だから仕方ない…だけどさ、今何時だと思ってんだ?」

「そもそも、なんでボソボソ声にしてんの?」

『ああ、今布団の中で電話してる。』

堂々とやってたら監視カメラがあるだろうし…それに俺達の携帯電話じゃ繋がらないから、プレシア達の家の電話番号なら大丈夫か試したんだよ。

夜に電話してきたのはその…悪かったと思う。でも試そうと思っても』

「ああなるほど…わーっつたよ。」

まずはそっちの現状を話してくれ、なるべく簡潔に頼む。長話してもそっちが大変だろうし、1stが怪しまれても不味い。

電話番号が変わったのも理由があるんだろうし……今から、俺もメモを用意するから少し待ってろ」

あの誰かも分からない電話番号から別の人から携帯電話を借りているのかと思っていたが、投影魔術で作ったことに納得がいった。

正輝はメモ用の紙を探し、小首を傾げるように受話器挟みつつ士郎達がどんな状態で何処にいるのかを聞きながら記入していた。

『さやかの水分身で散策したけど、近づくにつれて強力な機体が出現するようになって』

「そいつらの殆どが家の周囲に置かれてる。

俺達がバラバラ離れた仲間を探すのを邪魔する為だろうな。

街の奥なんてもつと無理だ。

2ndの奴、コピーの力か自前なのかは分からないが…俺と同じ能力であるシャドーで街を見張ってた。

綺羅に加担している黒い武装をした女達も、高所に転移して、狙撃してきたなんて報告もあるくらいだからな…」

1stだけではなく、綺羅と一緒にいるブラックロックシューター達も、正輝達の散策を妨害している。

「それで、フェイトの家とお前らがいる旅館まで約7kmってところか」

「…俺達の今の状況は、これで全部だ」

「分かった、俺から今いる仲間全員に伝える。」

話が終わったらすぐに投影した携帯電話を破棄して証拠を消せ。

また電話する時は、また留守電で自分の名前を言ってから連絡する事。ただ何回もかけたら、1stにバレるから程々に。

合流する時はさやかかの念話圏内に入ってからだ。

敵と鉢合わせて、本当に不味い状況になったら投煙珠を投げて逃げろ。良いな」

そう言って、士郎との話を終える。

今わかる仲間の散らばった場所と状況を知ったことで半分安心し、対して敵の出方が分からない事に少し頭が痛くなりそうで深いため息をついた。

11112 / 4 10 : 30 虹の庭園

「とまあ、()までが士郎達の状況だ」

虹の庭園の空き部屋で響達を招集し、作戦会議を行なっている。まず、昨夜に士郎と電話で話していたことを伝えている。

「電話って…でも、私達の携帯電話は」

「そうだ。俺達が持っている携帯電話は、四日に遮断されてることは分かってるよな。だがまあ、士郎なら一般人の携帯電話を投影して、その携帯電話でこの家に電話をかけてきた。」

プレシアの家の電話番号は、流石に知ってたからな。

ま、一応…ホテル内の監視カメラとかで見られてるかもしれないってことで布団に隠れながら、電話してたそうだからボソボソ声だったけど…」

「それじゃあ新しい携帯電話を買ったりとか、電話機を貸したりして仲間と連絡とかもできるな」

「買うのも人に借りるのも絶対怪しまれるだろ…この連絡手段が可能なのは、俺と士郎、アーチャーの三人だけだ。」

連絡を阻止しようとされたが、抜け穴があったのは大きい」

（…アーチャーなら、士郎よりも早く勘付いて俺の元へ連絡するとかやりそうだと思うんだがなあ。」

何ならまだか以外のママ達だって、市内にいるならなのは達の学校に近づいて、そのまま話ができるだろうし）

英霊エミヤであるアーチャーの性格なら、士郎よりもこの対策に勤づき、既に正輝となのは達に連絡をしていただろう。」

正輝が士郎の名案についてよく考えてみると、連絡手段は正輝の達に必ず通す必要はない。

なのは達のいる学校へ直接向かい、念話でなのは達と接触、無事だということを伝えれば良い。

1stはロリコンだから絶対に狙わず、2ndも学校を襲撃しようとしたら1stとの同盟は棄却され、敵同士で潰しあうこととなる。

無事を伝えれるとしたら、なのは達の通っている学校もまた安全だ。

ただフェイト達からそういった話を全く聞かされておらず、早く連絡することが出来ないぐらい危険な事態に遭ったのではないかと余計に心配になっている。

「携帯電話を投影して通話を可能にしたのも、敢えてそうさせたっていうのは？」

もし盗聴されたりでもしたら」

「不可能だ。少女以外の他人に無関心だつていうのに、その他人の携帯電話を盗み聞きするようなことはやるとは到底思えない。

監視だけじゃなく、海鳴市にいる一人一人の家電と携帯電話にハッキングして、通話記録を調べるのだから一人じゃ無理だ。

無人機達を自動化させてたとしても、俺達の動向が限界だろ。その上海鳴市にい一般

市民一人一人の電話の会話記録まで聞ける余裕があるとは到底思えない。

動くか、待つかを決めなくちやいけないことだが…俺は待つ方を選ぶ。勿論、こうしている間にもシャドーで助けに向かわせて、仲間を探している。

この場にいる全員で仲間を探したとしても、また分断されて、俺達まで一人きりになったところを襲撃されちまうだけだ」

「…今は、仕方がありませんね。でも、そろそろ他に動きがあつてもおかしくないのですが？」

「俺もそう思っている。ただ、これだけ日にちが経つても誰も動く気配がないってことだ…余りに静かすぎる。

こんなやばい状況なのに、俺達以外でも他の組織が絶対動くはずだろ。まず俺達の知っている敵組織…殺者の楽園キラエデンなら、お構いなしに暴れていた。

戦いに横から割つて入ることもあれば、人混みのいる場所で大暴れなんて事もあるかもしれない。

合流するのを阻止し、止めに行つた俺達を…綺羅達が何回も漁夫つて来ることも恐れてたからな。2ndの綺羅は本気で攻めに来るようなこともまだしていないし、1stも今は無人機の罫を張り巡らせているだけだ。

勿論、出てくる敵は雑兵ばかりで敵のリーダーが出向くなんてことはそんなに無かった。だが、今までの殺者の楽園の行動から考えても何もしてこない。

まるで、不測の事態を狙っているかのようだ」

正輝は、フェイトのマンションから海鳴市を見たのを思い浮かべる。

こんな場所で無人機が大量に配備され、誰も暴れることのない平和な光景は、本来安堵すべきことなのだろう。

決戦編が始まってから、どの組織も何もしてこないことに違和感を感じる。

それまで正輝達が出来た事とすれば、合流するまでの準備を怠らないようにするしかできなかった。

12 / 5 8 : 30 フェイト宅

「…そろそろレイナーレ達と合流する連絡が来るかもしれないから準備に取り掛かれよ」

(本当に何もなければ、それで良いが…)

正輝達は、さやかかかの話が来るのを待っていた。合流時に戦闘になる可能性が高いからと、事前の準備をしている。

電話して、7 km離れたとしても1stの妨害のこともあるから2、3日かかるかもしれないと予想していたが、思っていたよりも早くに連絡が来る。

『おーい、もしもーし。』

あたしの念話、届いてますかー?』

(来たっ…!!?)

『俺だ…今さつき届いたぞ。』

今日中に合流することは可能か?』

さやかかの呑気な念話を探知し、すぐさま正輝が念話に入って返事を返す。

『あ、来た。』

私達は合流の準備はできてるよ、そっちは?』

『今から仲間に報告して、合流先のバス停へ向かう』

『分かった。今から向かうね』

さやかとの念話が終えた後、次に正輝のシャドーが報告に来た。合流の直前で敵や罠がないか周辺を探るよう周囲を散策させ、こうして戻ってきている。

「…そっちは、どうだった?」

『旅館にいるレイナーレ達を、確認できました。全てとはいえませんが、何個か罠を発見しております。』

接触を避けつつ合流する最短ルートも用意しておきました。急いで出かける準備を

して下さい』

「分かった…なら、今度はレイナーレ達の護衛を頼む」

シャドーは正輝の指示に従い、別々の方向へ外に移動する。

『…おい、全員聞こえてるよな。さやかな会話と、シャドーの一人から連絡が来た。

今からレイナーレ達の迎えに行く』

「私だけでも、先行していきますか？」

「セイバーだけ行かせるのは不味い。」

クリスト、二人の影にシャドーも何体か追加させる。こいつらの指揮系統はお前に任せた」

「…私とシャドーだけで十分だと思いますが」

「相手は俺達と同じ正義側、しかもロープ陣営とも組んでるんだ…石橋を叩き過ぎても構わないと思ってる」

レイナーレ達と無事に合流させてくれるとは到底思えない。サーヴァント相手に間違ひなく警戒するから、セイバーの影に追加で分身を忍ばせる。

だが、事は簡単には行かない。デバイスの警鐘が鳴ったことで悪い予感は的中する。『特殊な結界が発動してます。』

警戒して下さい、マスター』

「大規模の結界……この近くで発動してるとして事は。やっぱりレイナーレ達との合流は阻止するつもりか」

敢えてさやか達を泳がせて監視していたか、合流しそうな場所をIstが注視していたのか。何処にせよ、正輝達は待っているレイナーレ達の元へ助ける為に急ぐ必要があった。

「…正輝さん。何者かが複数、近くのバス停の方に近づいてきてます」

浜風が21号対空電探を見せると、敵の信号が複数向かってきているのが分かる。プレシアのデバイスと、正輝のデバイスも迫り来る魔導士を感知する。

「フェイトとアルフを襲ってきた…あの四人の守護騎士もいるわね」

プレシアがデバイスを展開し、空間に映像を出現させる。

映像にはバイクに乗って移動中のブラックロックシューターと、彼女の頭上には浮遊する巨大な髑髏に座りつつ髪を弄っている黒い大鎌持ちのデッドマスター、フロートユニット付きの無人機ナイトメアフレームが数機飛行していた。

別の映像では2日前になのはを襲った四人の騎士達もまた飛行し、映し出されている。

家がバス停の近くならば、プレシアの元まで向かう可能性もあると、事前に話した通りにメディアと宗一郎へ護衛の依頼をする。

「プレシアさんは、家を守る為に傀儡兵を配備して下さい。

あれとは直接戦っちゃいけない。

もし戦って負けたら、蒐集されてしまう。

俺も後でキャスター達を呼んで、このマンシヨンの防衛を徹底させます」

「そうね…でもそれは、私達だけじゃないわ。

デバイスを渡した貴方にも、言えることよ」

「確かにそうです。だが、セイバーや響達だけに任せるわけには行かない」

話の最中に、響とクリスの二人が虹の庭園から家に転移して来た。

「来たぞ、正輝！」

「士郎さん達、もう戦ってるんですか!?!」

「二人とも来たみたいだな。思ってたよりも展開が早かったが、連絡が来た。

立花の言った通りレイナーレ達がもうすぐこっちに来るが、襲撃を受けてる。

フェイト達は学校だし、そこを襲うようならIstが許すとは思えない。あの二人や

なのは達にもよっぽどの事が起きない限りは、抜け出さずにそのまま授業を受けるよう

に言っている。

浜風も、艀装の準備はできているか？」

「…はい、問題ありません」

彼らの行き先は、レイナーレ達がいるバス停へと向かって来ている。バス停にはシャドーがおり、レイナーレ達が到着しているという通達が

来たばかりだった。しかも、

「合流地点で…既に戦いを始めてるみたいね」

「クリスは、セイバーと別行動して狙撃者スナイパーを潰せ。

前回同様に射撃武器を持っている黒い少女が、いる筈だ。

レイナーレ達の元に直接に行くのは俺、立花、浜風の3人で行く！良いな!!？」

立花とクリスはシンフォギアを纏い、正輝のセイバーと同様にベランダから外へと出て行く。

マンシヨンから外出し、響とクリスが聖詠を歌って変身する。

「…キャスター、合流する仲間が襲撃されてる。

先日話した通り、二人にはフェイトの家の護衛を任せたぞ」

『ええ、分かったわよ』

事前に話した通り、キャスターと宗一郎にフェイトの家族を任せ、正輝達はレイナーレ達の元へ向かう。

守護騎士だけではなく綺羅と久野を相手に、邪魔をしてくる仮面の男二人組のことま

で探す余裕はない。

たとえ強い英霊を持っていても、苦しい戦いになるだろう。

——この決戦編での始動、正輝達は敵を倒すことよりも散らばった仲間と無事に合流することを最優先で動いている。

それが吉となるか、凶となるか。

1 話一触即発 [前] (レイナーレ・士郎ルート)

12/2 午後20:30

「これは…見事に、分断されたわね」

「ううっ、ここどこっすか？」

波の音が聞こえるけど」

レイナーレとミッテルトが目覚まし、あたりを見渡していく。まず月が見え、近くの灯台の光が港周辺を照らしている。

夜に港のような場所に寝転んでおり、耳を澄ますと海辺の音、空を飛んでいるカモメの音が聞こえる。

「んっ、つつ…」

そんな二人の側にもう一人、衛宮士郎が地面に仰向けで眠っていた。

「ちよつと起きなさい。起きてもらわないと…私達、ここがどこなのかも分からないのよ」

「あ、あれ…二人ともどうして外に出てるんだ？船に待機したはずだったろ」

士郎は、レイナーレとミッテルトの困った顔を見てゆつくりと起き上がっていく。

「確か、あの島で戦ってたはず」

「港なのかしら……転移されたみたいね」

「あ、3人とも起きたよー」

レイナーレ達よりも先に起きていたさやかが、誰かに伝える。

その声で、二人ほど近づいてくる足音がした。

「おう、待ってたぜ」

「ランサーか……その隣にいる子がマスターなのか？」

「はい、私が彼のマスターです。起きた時には皆さん気絶してたみたいで、私達二人はその自動販売機にあるベンチで待ってました」

その証拠に、彼女は手袋を外して令呪を見せる。ランサー達は一緒に転移された彼らを移動させ、ずっと見守っていた。

「そのさやかかって青い子に色々聞いたが、コイツらは味方つてことで良いんだよね？」

「ここにいる全員、正輝の仲間だ。」

さやかちゃんも俺達のことを伝えてくれてありがとう」

「まあこれくらい良いって、士郎さん」

三人が起き上がる前に、既にさやかがランサー達に諸々の事情を説明していた。不知火達の二人は、正輝側の事情をよく知らない。

「それでランサー、結局無人島にやって来たあいつらは結局何者だったの？」

全員目覚めたのだから良い加減説明して頂戴」

「わーってるよ。」

連中の目的は素敵と略奪、入ってきた連中はマスターと同じ艦娘…他は無関係な民間人か。

腰につけてあるベルトを身につけて変身させつつ、それを兵力にさせてたみてーだが…初っから真面に戦える状態じゃあねーなありゃあ。

襲つて来た連中の一人から聞いた話だと、仕向けたのは正義側つつて言つてな。

その後には黒獅子ラルゴつて野郎が急に割り込んできやがったから話の続きが聞けなかったが」

「それじゃあ、正義側の誰かが…あれをやったつていうのか」

民間人を利用して島を襲撃したことに士郎は右手を強く握りしめ、怒りを露わにしている。無関係な人達の弱みを握つて、自分の利益だけの為に利用している。

「黒獅子ラルゴつて何者なの？」

「あの連中の味方をしていたわけでもないが、俺の槍捌きを凌ぐほどの技量を持ち合わ

せている大鎌使いなのは確かだ。

で、話は逸れるが…そこでコソコソ隠れ見てるあの二人組はどうすんだ？

まだ気づかれてねーが」

二人は気配を隠しているつもりでいるのか、素人の隠れ方だったためにランサーにはすぐバレていた。物音を立てて気づかれたくないのか、二人はその場所から動こうとしていない。

「え、うっわあ…マジ？」

「…これ、悪魔の気配ね」

ランサーの一言に、レイナーレとミツテルトはすぐに探知し、反応を確認して少し嫌な顔をしていた。

特に麻紀絡みでグレモリーとその眷属と毎度鉢合わせていたことが何度あったことか。

「悪魔？」

「ハア…まあ初めてだとそう言う反応をするわよね。

それ以上は話すのも長くなるから後にして頂戴。とにかく今は敵か味方で判断して」

レイナーレが自分達の事情を簡潔に伝え、不知火は納得する。

船内にいる仲間達はレイナーレ達の事情を知っているが、無人島組は何も知らない。

かといって、こんな場所で今までの事情を長々と説明している時間もなく、急いで正輝達と合流しないと危険だということは理解している。

「なら隠れ見ているのは敵つてことで良いのか？」

「少なくとも私達を感じ取れている悪魔なら、敵対しているグレモリー家の可能性が高いわ。」

様子見してるっていうのなら、構える前に一気に畳みかけた方が良さそうね」

「アタシも賛成…かな。ただでさえ離れ離れになつてるのに、そんな話し合える程の余裕は」

「正輝達と合流するのが最優先だけでも、付けられたりでもしたら厄介よ」

レイナーレ達の感じた悪魔がリアス達だというのなら、すぐさま戦闘になる。

ここを離れるよりも、仲間を呼ばれる前に隠れ見えている者達を始末する必要があった。

「…で、でもリアス達って確か5人組だったはずだよな。」

なんで二人しかないんだ？

そのうちの誰かが何か事情があつて抜け出したんじゃ…だったら話を聞くだけでも「無理よ。話自体も嘘で襲ってくる可能性だつてあるわ。裏では目的の為に眷属が散り

散りに動いてるのなら、馬鹿を見るのは私達の方よ。

それに正輝達の元に急いで合流しないと、いつどこで誰に狙われてもおかしくないもの。

今の私達に、そんな悠長なことをやってられない。

私達の敵だったのなら始末すること。

増援でも呼ばれたら尚更危険よ」

レイナーレが敵対している悪魔のことを説明している一方、ランサーだけが不可解な顔で釈然としていない。

「……まああの二人がオメーラの敵なのは納得した。が、増援つっても全く動いてないのは一体どういうことだ？

俺達を付けながら仲間を呼ぶにしたって、発見した事をすぐ呼び出さないのはどうにも引つかかるんだが」

「私達が気づく前から、もう既に報告しているのかもしれないわよ」

「だったら俺達がこうして話してる時間の間なら、とつくに仲間が到着してるんじゃないのか？

現に二人はその場に留まったままだ俺達を様子見て全くその場から動こうとしてないだろ」

赤の他人なら無視すれば良かったのだが、レイナーレ達が悪魔の気配を感じ取ったのなら一誠達でなかったとしても彼女達のいる世界の悪魔の可能性が高い。

「なあ…どうしても話し合い、つてことは出来ないのか。

隠れてるのがリアス達つてわけでもないだろ」

士郎の提案に、まず最初に嫌そうな顔をしていたミッテルトが主張する。

「…ウチはレイナーレ姉様と同意見っす。

仲間呼べないなら留まるよりはさっさとウチらが逃げれば良いと思うし。

レイナーレ様とウチだけしかないのならさっさと始末する方向で動いてるっつーの。

そもそもの話、なんでウチらが下手にでなきやいけないわけ？」

「し、始末つて…流石に早計過ぎないか。聞き出せば何か俺達に知り得ることもあるかもしれないだろ。

さやかちゃんも何か言つて」

「残念だけど…今回ばっかりはレイナーレさんの言うことが正しいかな。

まどかやマミさん…他のみんなのことだつて無事なのかも心配だし、そもそも私達にそんな余裕は無いと思う。

でも、アタシとしては捕縛してから後のことは考えて良いと思うかな…」

「…貴方達の判断に任せるわ」

「俺もマスターも、この通り二人が敵かどうかって話を聞いてもイマイチピンと来てない。

だが、いざそいつらと接触して俺達に攻撃するってことになったら…その時はマスターの命を最優先にさせてもらう」

始末するか、生捕にしてから後のことを考えるかで大半の意見が分かれた。

不知火はどっちつかずのまま他の全員に判断を任せ、ランサーもマスターの不知火と同じ意見であるが場合によつてその二人がマスターに危害を加えることになれば、その時点で矛先をその悪魔二人に向けて構えることになる。

武器を納めて話し合いを設けるのは、士郎以外誰もいない。

「全員が全員、始末しなくちゃいけないってわけでも無いけれど…少なくとも隠れ見ている二人が危険だということが殆どよ」

「…それはそうだけど」

「正輝がここにいても、彼も私と同じ判断をしてると思うわ」

本当なら士郎が他を取りまとめなければいけないはずだったのに、正輝の側近であるレイナーレが士郎以外の全員の舵を取り仕切りつつある。

皆が押し黙り、レイナーレが溜息をついた。

「…もういい。美樹さん、ミッテルト…私達三人で確実に捕らえるわよ。」

始末するのはその後でいいわ」

「なっ…!? おい待ててっつて!!? 何を」

「確かめにいくだけよ。」

そいつらが敵かどうかちゃんとこの目で…」

士郎だけ置いてけぼりにされ、他の全員が別方向へ散る。敢えて隠れてる二人の元へ真つ向から行かず、正輝の教えの通りに3人は慎重に動いた。

「はあはあっ…!!?」

「な、なんとか無事逃げ切れましたね」

ブロンドの金髪色の少女と高校生の男子が二人手を繋いで走っていた。

アーシアは平気だったが、一誠は遠い距離を走ったマラソン選手のように息切れを起し、落ち着くまで深呼吸を繰り返していた。

「…ああ。ここまですれば、もう大丈夫だろ」

そう言った瞬間に二人は、急に身震いが走る。

覚えのあるこの悪寒に、嫌な予感をしてしまう。

(墮天使っ…しかもこの感じ、まさか!?!?)

一誠は壁傳に覗き見ると、忘れもしない黒髪の女に聞き覚えのある声。前にアーシアの神器を奪おうとした墮天使レイナーレがそこにいた。

(墮天使の二人だけじゃない。見知らぬ顔が二人も、それすらも墮天使の味方か…!?!?)
レイナーレと子生意気な金髪のツインテールに

赤髪の青年と水色髪の中学生くらいの女子の四人には以前見覚えがあつたが、また新たにポニーテールのピンクの髪をした少女と青髪のアロハシャツの男がいる。

「レイナーレ様っ…」

「よりもよって何でこいつらが…くそっ!」

(しかも、前に会った時よりも数段空気が重くなってやがる!?!?)

悪寒がより増していることから墮天使の二人とは出会った時よりも強くなっていると実感し、一誠は冷や汗をかいていた。

彼らに、構っているほど余裕は無かった。

二人は麻紀達の元から離れ、彼の追っ手から逃げている、そうなった経緯は二人と麻紀以外誰も知らない。

「おい…待てっつて!!?!」

士郎の叫び声に反応し、再度隠れ見ると既に士郎含む3人が取り残されている。人数

が減っていることに気づき、一誠は周囲を見渡す。

(目を離してる間にレイナーレがいねえ……！)

一体どこに行った!??)

赤龍帝の籠手を出現させ、上を見上げる。

感じていた空気は更に重くなり、一斉の見上げた先には墮天使の二人が頭上を飛翔している。

「やばいつ……アーシア！早くここから逃げ」

声をあげて逃げるようにしても、すでに遅過ぎた。

視線をアーシアに向けたことで、レイナーレは光の槍を投げていく。

槍を破裂させ、二人を吹き飛ばしていくときやかが魔法で水分身を何十人も出現させた。

「……悪いけど、声を出さないでね」

捕まえられて叫ぼうとしたアーシアはさやかに口を押さえられ、怯えながら素直に頷く。

「よりもよって、また貴方なのね。

本当に……嫌な縁ね」

「レイナーレっ……！」

レイナーレと一誠の視線が合い、お互いを睨み合っていく。レイナーレが光の槍を爆発させたことで、その爆音の方に土郎達が集まった。

「3人も、ちよつと…待って言って言うてるだろ！」

走ってきた土郎が止めに入るが、3人は一誠達の拘束を解こうとしない。

「これって…敵ってことなの？」

「下がってな、マスター」

不知火は隠れていた二人をレイナーレ達が抑え込んでいる状況に困惑し、一方のランサーは前に出つつ私服を戦闘服へと変え、警戒する。

「…動かないでちょうだい。妙な動きをしたら、今度は至近距離で槍を爆発するわよ」

一誠とアーシアは、そのまま大人しくレイナーレ達の言う通りにするしかなかった。少しの間だけ睨み合いが続き、なんとも言えない空気が漂っている。

「えーつと、それで…取り押さえたのはいいけど、ここからどうするの？」
「情報を吐いてもらおうわ。」

何が目的で私達を隠れ見てたのか」

「ならその後は？」

「この二人を逃すつてのはやっぱり…」

「絶対にダメ。特にコイツは赤龍帝の籠手ブーステット・ギアで倍化させるなら、尚更生かしておけないも

の

『Boost!!』

「5秒数えるから、今すぐそれをしまいなさい。抵抗するなら、右腕を貫かせてもらうわ」

レイナーレとミッテルトは念入りに何本か光の槍を出現させ、それを二人の周囲に突き刺している。

が、光の槍を消しつつ正輝に電話していたのが一人いた。

「それでいいわねミッテ：ちよつと、一体何やってるの貴方」

電話画面には、岩谷正輝と表示されている。

何をどうするかまだ目的が定まっていないう状況で、士郎もミッテルトからしたら頼りがない。

だから、正輝にどうしたらいいか聞こうとしていた。

「：な、何って正輝に連絡を。」

離れ離れの状況だし、あたしらが独断で決めても結局揉めちゃうし：コイツらもどうすれば良かったって」

「ハア!!?なんで勝手に電話してるの!!この状況をそのまま話したら、一体どうなるか

聞かなくても分かるでしょ！」

「でもウチらさ……困ったことがあったら正輝に連絡するようになって」

「だったら、せめてアーチャーか士郎に相談し……そうだったわね」

困ったことがあるといつても、この状況をそのまま電話で報告するのは悪手過ぎる。士郎にも兼まとめ役に任せられることもあるが、一誠達を甘やかしてる時点で頼りづらかった。

「正輝に連絡してるのか？ だったら俺に」

「士郎……貴方、上手いこと2人のことを伏せながら説明出来るの？」

「そりゃ説明くらいなら、俺にもでき」

「ただでさえ優柔不断で判断が遅かった貴方が……正輝に電話を代わったところで2人の事を伏せないどころか余計なことを言うでしょ。」

正輝の側にいた私が対応するわ。彼も私の言葉を疑わずに信用させることもできるから」

本当ならこの状況でするのはアーチャーと凜の方が適任ではあるが、こうして正輝に連絡しているのならもう遅い。ミッテルトが士郎に交代しても、うっかり言いかねない。

彼が正輝に嘘をついて報告したとしても、信用できるかどうかもう五分五分になる。

かといって、誰一人ミッテルトの携帯を取り上げようとしなかったのも落ち度があった。

側近だったレイナーレが代わりに電話をとることとなる。

「あのさ……このことを正輝に連絡したら絶対に不味いよね」

「間違いなく血眼になって私達を探すわよ。」

美樹さんも……その二人が余計なことを言わないように口と体を縛り付けて頂戴」

二人の声が携帯の連絡で漏れないよう、口を塞いだ。2人とも暴れたりするが、さやかが謝りながらも水分身で押さえつけていた。

「んぐっ……!??!」

「ごめん、電話中はじつとしてて」

「押さえつけたわね……さっさと電話に出なさいミッテルト。」

出なかつたら逆に正輝に怪しまれるわよ」

ミッテルトはレイナーレの言葉に頷き、恐る恐る電話に出た。

『……もしもし、ミッテルトか。』

無事だったんだな。

そつちが、かけてくれて助かったよ』

「ち、ちよつとレイナーレ様から話があるって、変わるっすよ」

『…？連絡用に携帯電話を持ってないのか？』

まあいい、俺の方も離れ離れになった全員に連絡したかったところだ。

レイナーレもいるのなら変わってくれ』

ミツテルトは、自分の携帯をレイナーレに手渡していく。一誠とアーシアが暴れている中、4人が喋らずに待っていた。

「今変わったわ…」

『レイナーレか、今そつちに誰がいるか教えてくれないか？』

レイナーレは転移されて以降の大まかな事情を説明していく。

港に転移されて、誰と合流したのかを話した。

そしえ電話する前から全員、港から出ることもなくその場に止まっていることを伝えていた。

「…以上よ。」

それで、私達はどうしたらいいのかしら？」

『とにかく今日は泊まれる場所を探せ。』

俺含めて響とクリス、浜風の四人はフェイトの家にいる。

フェイトの家は引越して変わっているみたいだし、敵に特定されるのは不味いから、とにかく家近くにあるバス停付近に移動すること。

まず、なのはの家に近いバス停を調べてほしい。暫くはそのバス停付近に俺のシャドーで散策させるつもりだ。

お前らを見つけたら、家に案内させて合流ってことにする』

「その方針で私達は動けば良いのね…そう」

『…おい、どうした？

随分声色が変だが、何か困ったことでもあったか？』

レイナーレは電話を切ろうとしない。彼女は横目で一誠とアーシアを確認し、報告するかどうか迷っていた。

瞼を閉じて、少し置いて返事を返す。

「……いいえ、ごめんなさい。

何も問題無いわ。

他のみんなにも、家のことを伝えるわ』

(なっ…!??)

『そうか、じゃあ頼んだぞ』

「ええ」

レイナーレは電話を切り、一誠が驚いた顔でレイナーレを凝視していた。

電話を切るとさやかは塞がれた口を解き、2人は息付きしていく。

「ゲホツゲホツっ…!!? おい、一体どういうつもりだよお前らっ…! なんて俺達の事を隠して」

「…勘違いしないで。」

正輝が暴走すれば、只事じゃ済まないわ。

私達はそうなつて欲しくない…前の時のようにまたブレーキが効かなくなるのは」

「そんなのアイツが勝手にキレ散らかしただけじゃねえか! テメエらの都合だろ!」

「…その都合で貴方達は生かされてるのよ? そもそも散々貴方が鼻屑していたグレモリー家の娘と眷属と一緒にいないのは不自然なのよ」

「つつ…!」

特に一誠は、何があつたのかを頑なに喋ろうとしなかった。ずっと睨んだまま、レイナーレの不可解な行動に思考を回している。

「…それで、これからどうすんだ。始末しないなら二人はこのまま置いておくのか?」
「そいつらは後回し。」

家近くのバス停に合流するつて話だったから、そのことで話しましょ」

正輝から指定した場所へ向かい、移動するだけだったはずが、面倒な2人と接触したことでのこの場に留まっていた。

墮天使の2人のみの判断なら正輝の為に即切りするのは簡単だが、さやかや士郎、事

情を知らないランサー達がいる以上は時間をかけて全員の納得できる対処を模索する必要がある。

先制攻撃をされたのならともかく、一誠とアーシアの2人はただ隠れ見ただけで、リアスの元から何故抜け出したのかも聞かされていない。

まず一誠達のことを省き、正輝の言っていた合流のことを考えていく。

「まず私とミツテルトが上空を飛んで移動なんてしたら…アーチャーに指摘された通り狙撃か、囲まれたところを滅多撃ちにされる。

だから、飛行はできても周辺を偵察するのは絶対に狙われるからアテにしないで。

私達が結界を張っても、感づくでしようし」

空を飛んで合流地点へ辿り着けることは可能だが、移動中に狙撃されるのは目に見えるている。

(警戒網が張られてなくて、墮天使の翼ができるのなら。

こんな2日かからずで合流できるのに…)

レイナーレは、通路毎の弊害がある所為で少し苛立っていた。

新しく入ってきた二人はともかく、それ以外は姿が割れているのだから、少なからず邪魔が入ってくるのは目に見える。

「方針を変えて正輝とフェイト達に迎えに来てくれるよう連絡するとか?」

「それが出来ないから、正輝から来てほしいって言ってるんでしょ？もう一度連絡したとしてあんまり詳しく話したら通信を傍受されて、敵に待ち伏せされるから却下よ」

「タクシーとか、交通機関を移動するのは？」

それならばバス停まですぐに移動できるだろ。

流石に街のど真ん中で暴れるなんてこと」

「論外よ。I s t って人の能力で交通整備を支配されたら、一瞬で囲まれるわよ。

大体、敵だって結界を張ってくるんだから車ごと巻き込まれて逃げ道を塞がれて不利よ。

敵組織にも敵味方問わず正義側を潰す為なら手段を問わない連中もいるのだから自分達が不利な状況を作ってどうするの」

今まで結界を張ってから襲撃してきたのは良く覚えている。違いは民間人を巻き込むか、巻き込まないかだけで結局戦闘になることに変わりはない。

「…じゃあやつぱり」

「徒歩で、バス停に向かうしかないわね」

「マジっすか、ええ……まあ姉様がそうするなら仕方ねーっすね」

ミッテルトがジト目で面倒くさそうな顔をしつつも、納得していた。かなり遠いわけでもないが、道中に邪魔が入ってくるのは間違いないなかつた。

「言っておくけど……二人を生かしたとしても、絶対に連れて行けないわ。」

「こいつら信用できないもの」

「そんなの、こつちが願ひ下げだ！」

「誰がお前らと一緒になんて！」

レイナーレがそう発言すると、一誠は嫌悪感を抱いて拒絶する。危なげな2人（特に一誠）を守りながら移動ようとすれば、いつ気が変わって騙し討ちをしてくるか分からない。

「な、なああんた達……何が理由があつて逃げ出したんだ？ そつちにいた当麻は、今どうしてるかも知っているか？」

「……船で起きたこと俺達に教えてくれれば、もしかしたら二人の力になれるかもしれない」

「話しかけてんじゃねえっ!!?」

今度は不安そうに士郎が一誠に話しをかけようとするが、一誠はレイナーレと組んでいる連中とみなして敵意を向けていた。

士郎が事情を聞こうとしても、聞く耳を持つとうとしない。

「レイナーレと徒党を組んでるお前らなんかに話す事なんかねえんだよっ！ 俺達を敢えて生かしたのも、悪巧みを企んでるんじゃねえだろうな!!?」

「そんなこと思っていない！俺達はただ上条達のことだ」

「やめておきなさい…：そいつらに何言っても無駄よ。あの日、火蓋を切った時点で話し合うことなんてもう不可能なのだから。」

それに、このまま二人を正輝の元に連れて行けばどうなるかことぐらい分かるでしよ。

確実に正輝の逆鱗に触れることになるわよ」

一誠を連れてきたってことになれば、正輝の堪忍袋の尾を切ることになる。今の状況を抑えるのも大変なのに、その上敵認定されてる二人を連れてきたとただだけでも頭を抱えるのは今まで正輝達の船にいたレイナーレ達は目に見えている。

「それなら二人は置いていくのか？」

「ここにずっと長居しても仕方ねーが…：もう二人は正輝んとこの電話で合流場所を聞かされている」

「…」

「このまま生かしたとしても、この二人が俺達の事を言わない保証だつてない。寧ろ、怪我したフリをしつつ実は囷だったって可能性も十分あり得る。」

これが聖杯戦争だったのなら二人から情報を引き出すよりは、俺達を目撃した以上は刺し殺すのが妥当だと思おうが」

揉め事を黙って見聞きしていたランサーが口を開き、二人をどうするのを聞いていく。正輝から電話である程度の目的地を聞いただけで、まだ港を移動していない。

「この気配……まさかももう私達を探って」

そうこうしている間に、悪魔の気配が強くなっているのを感じた。

「アーシアを追いかけて来てみれば……堕天使レイナーレ。貴方もいるとは思わなかったわ」

「部長と朱乃さんに、子猫ちゃん！

俺達を助けに来てっ……!!?」

レイナーレ達は一誠達の事情をまだ聞き出せておらず、話に区切りをつける前に二人の追っ手が港に辿り着いてしまった。

三人からはレイナーレ達の他に、一緒にいる士郎達にも敵意を向ている。しかし、教会や試練編後でのいざこざの時は一誠達を含めて4人いたはずなのに一人、剣を持っていた金髪の少年が見当たらない。

その一方で、喋ってた一誠が途中で黙ったままなのは、麻紀も同行していたことに驚いている。

「……貴方、ナイトの子はどうしたの?」

「懲りずにアーシアを狙っていたのは本当だったみたいね……はぐれ悪魔を潜伏させて、

連れ出そうなんて。

レイナーレと、他もいるなら生け捕りにするように言われたけれど。そうよね麻紀「そうだよ、感情に任せちゃいけない。」

レイナーレと彼女率いる墮天使、その取り巻きは「今は生け捕りのみ」なんだから「…え、生け捕りのみ？」

レイナーレ含む事情を知っている士郎達は麻紀の言っていることに疑問を抱いていた。

前まで散々リアスの領地で暴れ、教会ではアーシアの神器を奪おうとし、彼女達に敵意を向けられていたはずだというのに、生け捕りで済まされているのだろうかレイナーレ達だけではなく聞いていた一誠にも理解できなかった。

「麻紀、当麻達はどうしたんだ！」

「彼らに耳を貸しちやダメだ。僕と神羅はあのはぐれ悪魔をやるから、他は好きにやってね。」

二度大事なことを言うけど、生け捕りだから殺しちやダメだよ」

「…私達を生け捕りして、どうするつもりなの？それとさつきからナイトの子はいないのって聞いているのだけど？」

「君達も、もし気が変わって命が惜しいって思うならアーシアを引き渡してくれないか

な。

両手をあげて、大人しく捕まってもらえたら嬉しいんだけど」

(私達の質問を返す気は無さそうね…)

レイナーレがいくら麻紀に質問しても聞く耳を持つとしない。

お互い睨み合いを続けてる中、麻紀とリアス達の話聞いていた一誠は納得できない様子で震えている。

「何勝手に話を進めようとしてんだよ…さつきからはぐれ悪魔を潜伏させたとか、レイナーレ達を生け捕りにするとか…!

そいつは俺を騙して、アーシアに酷いことをしてたんだぞ!!?

部長達だって知ってるだろ!

何みんなして納得してるんだよ!?!?」

一誠の言葉を聞いてもリアス達は視線を向けるだけの様子で、明らかに様子がおかしかつた。ボロボロの姿をしているのに、助けに来たという感じでもない。

「おい、麻紀…部長達に何しやがった!!?」

「はあ…しようがないなあ。レイナーレ達を確保する前に、その喧しい偽者は消そうか。」

それもここに来た目的だったし」

「そうね」

リアスが一誠に向かって滅殺の魔法を放つと、咄嗟の判断でレイナーレが光の壁で防ぐ。

呆然としていた一誠は、リアスが攻撃するだなんて思ってもない。

「貴方…自分の眷属を攻撃してるのだけど？」

「予想外だわ、まさか堕天使がはぐれ悪魔を庇うだなんて。」

それに、その子を眷属にした覚えはないもの」

滅殺の魔法で、一誠を消し飛ばそうとしていたのだから。どうして一誠をはぐれ悪魔と認識されているのか、先程の攻撃で思考を巡らせる。

馬鹿な一誠でも、麻紀が何をしようとしたかすぐに分かった。

「なんだよそれ。ふざけんよ、おい…俺とアーシアが逃げてる間に…部長達を」

『清き親友から聞いたよ。君の家族をリアスが暗示で操って、無理矢理納得させたじゃないか。』

逆になんか分かることも、承知の上なのかなって』

「嘘だ…嘘だあああああつ!!？」

リアス達は都合の悪い時は誰かの記憶を洗脳しようとしたが、自分達がされるのはごめん被るなんてのは通らない。

『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

「がっ……!?」

感情に任せて麻紀の元へ殴ろうとするが、別の方向から機械音が鳴り、もう一人が一誠を殴りつけられる。

「なんですって……!?」

レイナーレが驚いたのは、二人の赤龍帝がいたことだった。一誠を殴った者の姿は赤龍帝の鎧を纏い、彼の立ち塞がる。

「ち、くしよう……なんで殴られ。」

「誰だよソイツ、なんで俺と同じ力を」

「本物の赤龍帝に決まってるじゃないか。」

「君は……まあ偽者だったからね」

「……外野はすっこんでろ、偽者野郎」

リアス達の言っていた神羅という男が、一誠同様に赤龍帝の籠手を所持している。禁手化の姿で、その男は一誠を見下していた。

「一誠。リアスを、他の仲間のことを思っているのならその必要はないさ。」

「彼女達の幸せは、保証しよう」

「嘘だっ……嘘に決まってる!!?」

「みなさんの記憶を元に戻して下さい！」

「ああそう言えばアーシアもいるんだっけ。」

安心してよ、今までがおかしかつたんだ。

彼を始末したら…君にも調整させてあげるからね？」

狂気じみた言葉に、アーシアは青ざめる。

赤龍帝を代わりを用意し、今度は麻紀に刃向かった兵藤一誠の存在を抹消しようとしていることに。

「麻紀っ…テメエだけは絶対に!!？」

殴られてもなお一誠は立ち上がり、再度麻紀を突っ込む。偽者は麻紀を助けようとはせず、そのまま一誠の邪魔をせずに通した。

そのことに不自然に思わなかったのだろうか、考えなしに赤龍帝の籠手で力を倍化させ、よろめきながらも麻紀に殴ろうとー

「なんでだよっ…っ？」

するはずだった。

直前に、12歳児の子供を強制転移させていなければ。麻紀は幼い子供を盾代わりにしようとしている。

「ああ…【三度目】は、流星に止められちゃったか」

三度目が起きる前に、こんな事になってしまったのも。

「こんな風に子供の命は守れるのに、何で誠司を見殺しにできたのか…君にとっては無関心だったからだろ。」

良いよ、君はそうやって前進したんだから。

君と君の関係者が無問題なら何をやっても心は傷まないんだろうね。

今更一般市民だろうが、部長達を守るために、その拳にある神器でぶん殴っても平気か。

生身の人間である普通の神父も、リアス達の敵だったからって理由で殴り飛ばして進んでたんだ。

ずーっとその神器で敵を殴り通して来たんだから…たとえ相手が幼い子供だろうが、赤子だろうが【自分の障害】なんだから殴ってもそれは無問題だ。

僕も誠司も、弱くてどうしようもなかったから切り捨てたんだろ。

それなら自分達の敵だからと切り捨てて先に進めば良い。殴られた側は普通に死ぬかもしれないけど、心は痛まないよね」

「……おい、やめろ」

「リアスを利用して僕を許せなくて、強化させた赤龍帝の籠手で殴ろうとしたよね？」

その時、僕が強制転移された罪のない子供の頭を容赦なく脳天をかち割つ」
「それ以上、言うんじやねえ!!?」

やめろやめろやめろっ!!?!!?」

テメエいい加減にしやがれえ!!?!!?」

「赤龍帝の拳で人間をサンドバック扱いにしてぶん殴った気持ちはどうかな。

さぞ心がスカツとして、気分が良かっただろう。

前に殴った時の1回目で：子供は死んじやったけど、まあ仕方ないよ。最初は急に止められなかったんだ、何も悪くない。

誠司と同じく、この子も事故死したようなものだからね。

子供を殴った程度で、良心は痛まないでしょ。

外見だけ装って、蓋を開けたら醜悪だったって事はザラだったんだから。でも君が僕を殴ってさえなかったら、あの子は死んでなかったろうに」

一誠は何かを思い出したかのように顔面蒼白になっていき、立ち向かう気力を徐々に無くしていく。

一歩足を引いて、麻紀を恐れていた。

「リアス達……このはぐれ悪魔は最低だ。

子供を人質にしたのは、本当だったみたいだね」

「ふざけんな、それはお前が……」

そう言い切る前に彼の腹部と右足に2発ずつ撃たれ、転倒する。盾にされていた子供は落下して膝を擦りむき、ずっと泣き喚いていた。

「まきつ……アメモエ」

『Reset!』

幻想殺し・武器化の効力で倍化させた力は消され、初期状態に戻っていく。銃を何発も受けた一誠は目眩がし、瀕死になりかけていた。

「……どこまでも馬鹿な奴だよ、君は。」

誠司が死んで以来、僕のやることと言うことには一切気にするな。その感情を捨てろ、そう散々教えてやったのに、あの少女達を使うのでさえも嫌そうな顔をして……いつまで経っても中途半端だったんだよ君は。

そんなんだから、僕の親友を見殺しにしても平気だったんでしょ。

無能な奴は、結局側の奴の足を引っ張る。

神器が優秀でも、君自身が無能じゃ宝の持ち腐れだった。この決戦編前までは、心機一転してもらいたかったのにな。

一誠、お前のような間抜けはその辺でくたばって当然って思ってるよ……」

麻紀は拳銃を引き金を引こうとしたその時に、見てられなかったさやかが、レイピアを投げつける。レイピアは麻紀の肩に的中したが、刺さった箇所からは血は流れず、麻紀本人ではなく分身体であることがわかる。

魔法でできた刀は、刺さったと同時の破壊された。

「……なんで彼を助けてるんだい？」

「さつきから黙って聞いてれば……子供を盾にしたのはアンタでしょうが……」

彼女は嫌厭な顔で、麻紀を睨んだ。

一誠がかつての敵だったとはいえ、こんな胸糞悪いものを見れば、さやかのようにレイピア側の内の誰かが行動に出ている。

「あんた達だって、今さつき目の前で見てたでしょ！人質を盾にしたのは麻紀な事ぐらいこうして分かるのに、どうしてなんとも思わないわけ!?？」

「やれやれだよ……参ったなあ。」

責任転換なんて酷いじゃないか。

しかも、人に向かつて凶器を投げつけるなんて。

今だって人質にされた子供が目の前にいるのに……僕が分身だから良かったのに、流血

沙汰にしようだなんて君達に人の心はないのか！」

「…嘘でしょ、本気で言ってるの？」

さやかは麻紀の言い分に絶句し、士郎も声をあげて言及する。投げられたレイピアで流血したのなら彼の言う通りになっただろうが、一誠を殺すために人質にした子供の目の前で銃の引き金を引こうとした麻紀の方がよっぽど冷酷無慈悲ではないのかとドン引きしていた。

「おいお前っ…！」

言ってる事とやってる事が滅茶苦茶だぞ!?!？」

(ああ…なるほどな)

二人は納得してない様子だったが、ランサーは麻紀とリアス達を洞察し、何を考えているのか察した。たとえば言動が矛盾してても、絶対に悪者へと捏造しようとしているという魂胆に。

「ダメよ…あいつら強力な暗示を掛けられてるわ。目の前で不都合なことが起きても問題無いように…これじゃ話にならない」

「もう無駄話は済んだかしら…アースシアを返してもらおうよ。」

貴方達も捕まえて、要件が済んだら消えてもらおうわ。墮天使と、その協力者共々ね」
リアス達の戦力だけならランサーや固有結界が使える士郎がいるならこのまま返り

討ちにもすることも可能だが、一番の問題は一誠を踏み台にした神羅の実力と麻紀の持っている手札がまだ見えていないことだ。

「もうウチらでやるしかねーつすよ…あいつら逃す気なんて微塵もないし」

「くそっ…こんな場所で戦つたりでもしたら、子供まで巻き込まれてしまうのに!!？」

麻紀が子供を盾にして強制転移させた仕組みがまだ分かっていないことと、彼がリアス達の他に新たな戦力を手にしている事も十分あり得る。

ミッテルトは光の槍を出現させ、3人が巻き込まれることに苦い顔をしている士郎は干将・莫耶を投影していく。

「ランサー…お願い」

「あいや」

不知火は艤装を、ランサーは魔槍ゲイ・ボルグを構えていく。

神羅という偽の赤龍帝に宝具を放つても良かったが、膨大な魔力を必ず使用する事とリアス達クォー・プリンに自分の真名を曝け出すこととなる。

この状況を脱する為に宝具を使うのは、あくまで最後の手段ということだ。

一誠は倒れ伏せ、アーシアは身体が硬直して動いていない。麻紀の盾代わりされた子供はそのまま置いてけぼりにされ、訳の分からないままこの戦闘に巻き込まれてしま

『ちよつと待った！今戦うのは不味いと思うし、私達の最優先の目的は合流だから……こいつらと戦ってる場合じゃないと思う。

あたしに考えがあるの。

アーシアと一誠つて二人と、その子供はあたしがなんとかするから、士郎さんとレイナーレさん、ミッテルトは手順通りに時間を稼いで欲しいの。

今は戦わずに、こいつらを撒こう』

その時に、さやかが念話で作戦を提案した。

この場を戦わずに切り抜く為に一誠と麻紀のいざこざをしている間に水分身を密かに何十体か潜ませていた。

まずレイナーレが、硬直してたアーシアの腕を無理矢理掴んで前へ出る。

「ねえ……大人しく二人を引き渡しても、私達を見逃してはくれないのでしょ？」

「私の眷属を貶した貴方を、見逃すと思ってるのかしら？」

「……そう、そう言うと思つたわ。」

だからこうするのよ！」

レイナーレは、アーシアの首筋に光の槍を押し当てていく。攻撃体制に入っていたりアス達が、血が流れているのを見て躊躇する。

「なっ!??アーシアを離しなさい！」

「この子の命が惜しくないなら、貴方達の方のこそさっさと下がりなさい。大事な仲間なのでしょ？」

命を握られたアーシアは、今度はレイナーレを見て怯えている。神羅は拳を震わせ、レイナーレに指差して批判した。

「お前！アーシアの神器を欲しがってたんじやないのか!!？」

「ええ、確かに欲しがってたものよ？」

このはぐれ悪魔は本当によく働いてくれたわ。

アーシアを連れてきてくれたのだから？

でも私、神器を得ても貴方達に勝ち目が無いって思ってしまったわ。

まあ、死なばもろともってやつよ」

「死ぬんなら、勝手にテメエ一人で死ぬ！」

アーシアを巻き込むな!!？」

「保身だというのなら勝手にそう思って頂戴。

下手に粛清しようものなら、この子の命を奪うことにもなるわ。」

「なんて酷いっ……子供を人質に使うだけじゃなくアーシアまでもっ!!？」

麻紀の言葉が、レイナーレ達からはしてみればいちいち感に触る。強力な暗示を使つてリアス達を騙そうとしているお前に言われたくない、と麻紀に対して反論したいくら

이었다。

リアス達が慌てている中、もう一方の赤龍帝は様子を伺っていた。

「レイナーレ、様…どうして。黙っていたのも私達を助ける為に嘘をついたのでは…」

さやかが、助けてくれたはずのレイナーレが裏切りで軽くパニックになりかけている
アーシアに念話をかける。

『私らに考えがあるから、一誠って人を助けたいのならまだ黙ってて。』

無理なら、その一誠って子に助けを呼ぶくらいにして』

さやかが念話でアーシアに伝え、言う通りに黙ろうとしても疑心暗鬼で戸惑ってしま
う。

「アー…シアっ」

「い、一誠さん…!」

力を振り絞ってアーシアの名前を口にした彼に、アーシアは涙ながらに彼を叫んでい
る。彼女がリアス達ではなく一斉に助けを呼ぼうとしないことに少し違和感を持った。

「妙ね…アーシアが必死になって、そのはぐれ悪魔の名前を懸命に呼んでいるのはどう
してなの?」

「彼らが何かさせたんだろ。泣いているとならば…彼の名前を無理矢理言わせようとし
てるんだ。」

墮天使の茶番に付き合わされている。

言葉で彼に助けを求めても、心の中では悲鳴をあげているんだ。とにかくアーシアを助けて、レイナーレ達を退治するよ」

「無理矢理言わせようとしているだなんて…やることが狡猾ですね」

「アーシア先輩、すぐ助けます」

脅されても、リアス達はアーシアを助けようと試みようとして探りを入れていた。

「そつちがその気なら、こつちだって手があるんだ！」

『Boost!!』

(…まだかかるのっ!!?)

「プロモーション、ナイト!!?」

さやかが準備し、レイナーレはリアス、麻紀と神羅の3人を注視していた。平静を装いつつも、無言で後退りに下がっていく。

神羅はプロモーションで素早さ向上の能力を手にし、そのままレイナーレを殴り飛ばそうとする。

「な、にっ…!!?」

「神羅!!?」

ランサーがレイナーレを守り、神羅の拳を槍で防御しつつ、そのまま薙ぎ払われてい

く。

あの場で神羅だけが動き、リアス達と麻紀が全く動かなかった。その、ほんの少しだけ時間を空けてくれるだけで逃げる手筈は十分出来た。

『よしっ！これで十分時間が…稼げたっ！』

「うん、みんな逃げるよ！」

「投影二連っ！！？」

さやかかの呼びかけと同時に、水分身で子供と一誠を回収していく。

それと同時に、士郎が干渉・莫耶をリアス達に投げ、すぐに壊れた幻想で爆発させていく。
ブローケン・ファンタズム

「ミツテルト！」

「了解っすー！」

爆発で生じた煙から今度はミツテルトが拡散式の光の槍を飛ばし、線香花火の如く光の針を噴出させた。

「つつ…部長達がつ…？」

リアスと朱乃は咄嗟に防御魔法を展開して士郎の攻撃を防いだが、魔力暴発による破壊力は防壁を崩し、二人を吹き飛ばされている。

「大丈夫ですか！」

「ええっ…でも、墮天使の一人があんな姑息な能力を隠し持っていたとは思わなかったわ。」

それと、あの青いタイトの男も何者なの…ナイトの速さに追いつているだなんて「眩しいっ…!」

兜を被っている神羅は光の針を弾き、リアス達を助けている。麻紀は大型の折りたたみ傘を取り出し、幻想殺しの効力で降り注がれる針を打ち消していく。

「神羅、これをリアス達に渡す!」

あの針の放出は僕が止めるから、君はあいつらを!」

「ああ分かった!」

麻紀が傘を使用してリアス達を守り、一目散に逃げていくレイナーレ達を神羅が追う。

ミッテルトが放射させた光の槍を他の分身体で狙撃し、槍を破壊したことで噴射が止まった。

「逃すか!!?」

神羅はこのままレイナーレ達を追いかけようとするが、火災消化器が投げ込まれるなんて思いもよらない。

既に目を眩ませた数秒間に、今度は火災消化器を投影し、斬り傷をつけた消化器を転

がせていく。

斬られたところから噴射され、神羅の鎧や顔中に付着してしまう。

「ああつくそつ!!?こつちも視界がつ…あいつらあ!!?」

「この場から逃げても血痕だつて残っているのなら、そんなに遠くへは行けない!

焦る必要は全然ない!

リアス達も無事だし、一度体勢を整えてから彼女達と一緒に周辺を探すんだ!!?」

リアス達は低空飛行で、麻紀はすぐさま携帯で船からの増援要請を指示する。

(リアス達と真つ向から潰しあつて、その後には袋叩きにしても良かったけど…まあいいか。

二人を送ったのなら都合だよ)

リアス達がアーシアを助けるために焦っている一方、麻紀はレイナーレ達が逃げられなくても平気な顔をしていた。

12/2 21:00 廃ゲーセン2階

無事、レイナーレ達は一誠とアーシアを連れ、逃げることに成功する。港から離れ、なるべく人のいない場所を見つけて止まった。

誰も寄り付かない小さな店を発見し、そこへ入っていく。

扉は開きっぱなしで、店を管理する人は誰もおらず、クレインゲームの商品には何も置いていない。

レトロゲームの画面も画面は暗いまま電気は通っておらず、壁には何年前の古いポスターが貼られていたままだった。

「貴方…私を助けてくれたの?」

「そのさやかかって嬢ちゃんに、レイナールをフォローして欲しいってのも頼まれてな。個人的に俺も、女の顔を殴るような場面は気乗りしなかったからな」

転移されてから早々に二人のことで揉め、その二人を追ってきたグレモリー達と対峙し、麻紀が一誠を見捨てたりと色々と整理したいことが山ほどあった。

「そうっ…でも危なかったわ。」

よりにもよってリアス達と会うとは思わないもの。しかも一誠を裏切って、赤龍帝の代役とか用意していたなんて」

「いいや、麻紀の野郎も…どういうつもりか分からないが黙って伏兵を用意してやがった」

「なんだって!?」

士郎だけじゃなく、他のみんなも驚いていた。

ランサーは口には出さなかったが、周囲に誰かいるということは勘づいている。

「…お前ら、全く気づいてなかったみたいだな」

「仕方ないじゃない！」

逃げの一手を考えるので精一杯なんだから！」

殆どがリアス達と麻紀の衝撃的な言動に意識が向いており、ランサーだけが周囲を見渡しつつ、麻紀の目論見を見抜いていた。

時間を稼いでいたのはさやか達だけではない。

「一誠ってガキが撃たれて辺りからか？聞き耳で他の足音がしてな…20人くらいが駆けつけて、俺達を囲もうと動いてたからな。」

レイナーレがアーシアを人質にしようとした瞬間、足音が止んでたが」

「ええっ…それじゃあ、私の案が不味かったり、逃げるまでの待つ時間が長すぎたら」

「今頃、リアス達を陽動させて潰し合った後にでも麻紀のやつが兵隊を大量投入して、そのまま疲弊した俺達を取り押さえて確保してきただろうな」

「全く気づかなかった…でも、なんでランサーは麻紀だって分かったんだよ。兵隊を呼んだのだってリアス達かもしれないだろ？」

「レイナーレがアーシアを人質にしても、その男だけ全く動揺しなかっただろ？」

「そういうことだ」

麻紀がリアス達に内密で、伏兵を用意していることにランサーだけが気づいていた。さやかが身震いして、うまく行って良かったと安堵している。

「でも、麻紀がアーシアを助けることだって出来た筈だろ？」

「…流れ弾がアーシアに当たるから？」

「俺が投影魔術で色んな剣を投影できるように、麻紀だって銃を作り出せるなら、使いこなせるように準備するくらいのことではできるんじゃないのか？」

例えば、早撃ちが可能性なりボルバーとかで」

麻紀も、正輝と同様に成長したというのならここまで来るのに様々な銃に慣れてもおかしくはない。

士郎が投影した火災消化器をばら撒きながら撤退させたとしても煙の中で見えなからうが滅多撃ちを指示するのも出来たはずだった。或いは、誤射してアーシアを殺してしまうのは不味いと躊躇していたからかと深く考え込む。

「それでも本当に運が良かったわよ…：人質にしてた時に麻紀がアーシアに対して命令権を行使することだって可能よ。」

まあ動いたら、アーシアの首を槍で搔つ切る事になりそうだけど」

「あーそう言えば…：その線は全く考えてなかった」

「貴方ねえ…：唐突に案を考えて、本当に上手くいくかどうか疑わしかったわよ。」

念話で聞いても、かなり杜撰だったもの。

少しの間を稼ぐよりは、投煙球でさっさと逃げれば良いじゃない」

「でも…そしたら、助けることもできなかつたし」

（二人に話すことなんて、麻紀が殆ど言ったのだからそんなにもうないはず…まだ生かす気なの？）

さやかの場合通りに救出も逃走も成功したから、これ以上は何も言わなかつたが、一誠とアーシアを生かす考えがレイナーレからしたら半々理解してなかつた。

「…麻紀は本気でアーシアを助ける気が無いんじゃないのか？」

さっきのリボルバーとかの早撃ちをしなかつたにしても、こんな回りくどい事をしなくても強制転移で船に転送させれば良いだけだろ」

「なら、アーシアを助けようとしてるあの状況は麻紀からだ、ただの茶番だつたつてこと？」

見逃してたのが本当だつていうのなら…敢えてアーシアを泳がせてるってことになるわよ。

獅子身中の虫にでも目論んでたわけ？

もしそうなら戦闘になることも不本意だつたとか、私達が二人のことを守っているから同情して保護することまでも計算に入ってるの？」

「…いや、そこまでは流石に分からないけど」

「多分、アジアを死なせてもリアス達が全滅してもなんとも思わなかったと思う。

あくまで仮の話だ。

もし俺達があの場合でリアス達と分身の麻紀を倒したとして、位置がバレした俺達を移動させてくれる余裕を与えるとは到底思えない。

麻紀は他にも兵力を増やして、俺達の誰か一人でも確保しようするんじゃないのか？」

「なら、人質ごと撃ち殺した可能性もあるんじゃないのかしら？」

「そしたらリアス達が黙ってな…まさか暗示でアジアごとレイナーレを撃ち殺したことも捏造して、彼女の代役まで用意する気なのか!?!？」

「一誠の代役もアジアを助けるとか言ってたのだから、そいつにも暗示をかけそうね」
いずれにしても、麻紀はリアス達を利用してゐる事には変わりない。誠司と麻紀を見捨てた彼らが、急に麻紀が友好的に手を組んでいるかは分からない。

「リアス達はアジアを連れて帰りたいって目的があるけれど、仮に殺したとして一誠と同じように代役を用意させる可能性も十分あるわね。

でも麻紀に関してだけは本当に謎だらけで分からないわ…目的も、何を、どうしたいのかも」

「…でも、私らは逃げて正解だったんだよ。

戦ってピンチになるよりはずっと良かったんだ…」

「それにしても念話が可能なさやかがあいだだけでも助かったよ。そうじゃなきやあのまま戦うことになっていただろうし」

「逃げ切れたのは良いとして…結局コイツらも助けてどうするつもりなの？

しかもウチら、待ち合わせの方向と逆に逃げてるし…」

麻紀がリアスの記憶が捏造され、更には偽者の赤龍帝がいることにも困惑している。

「貴方達が麻紀と敵対したことも、赤龍帝の代役がいるだなんてのも初めて知ったわ。

追われてたのは本当のことだったみたいだけど、厄介事を押し付けてくれたわね。

しかも、禁手化までしてくるだなんて…余計に不味いわ」

偽物の神器とはいえ進化させた赤龍帝の力が一誠持っている本物の神器とほぼ同等だとするのなら、危険だということを理解している。

倍化させる力も、力を譲渡する能力も手にしている。

偽者の力量は一誠よりも確実に上回っており、上級悪魔と同等の力を持ち得ている。一誠は代償込みで禁手化させたのに対し、敵は制限なく禁手化を使ってきたのだから。

逃げていく道中で一誠の血痕を思い出し、余計に気分が悪くなる。今は止血させているが、道に血の痕がある以上港にも引き返し辛くなっていた。

「話を変えるけど…そいつの血は止めたの？」

「流れたままじゃ血痕を辿って追ってくるわよ」

「私がなんとかしたから大丈夫。」

「魔力で水を赤に添加させて撒き散らしてるから、私達を探すのも時間がかかると思うし」

「そういうところは周到なの…まあいいわ」

「さやかがフオローしてくれただけで彼のおかげで彼の流した血をたどって追ってくることはないが、港に戻ろうとすれば麻紀達が罾を張り巡らせつつ、待ち伏せて襲われてしまう。」

「あと盾にされた子供まで助けたのね。」

「一誠とアーシアの二人を助けた事といい、どこまでお人好しなのかしら。散り散りにされたのに、また更に厄介事を増やして…麻紀が用意した子供を何度も助けて保護するとかだったら、キリがないわよ。」

「そもそも、その子を助ける理由がないでしょ。」

「たつた今会ったばかりの、なんの事情もわからないのに。」

「この子が仲間として契約されてるのなら、麻紀が強制転移して、助けたことも徒労に終わるわよ」

「おかーさん、おとーさんっ…ひっく」

子供の方は麻紀に無理矢理連れてかれて訳の分からない場所に飛ばされて、不安に駆られている。

「マミさんや正輝さんでも、理由が無くても助けてたと思う…盾にされた子供を見捨てて、自分達さえ良ければ逃げてでもいいなんて思えないからさ。

あんな子を見殺しにするなんて、私には出来ないよ」

「たとえさやかが動いてなくても、俺が動いていた。

レイナーレの言い分だつて勿論分かつてる。

それでも、助けたかつたんだ」

殴られそうになり、死にかけて彼女は安心できなくなっている。助けてくれたレイナーレ達も何者なのか、信用するのも怖くてずっと泣き喚いている。

「ハア…もういいわ。子供を助けたのだから、最後までちゃんと正輝達のところまで送りなさいよ」

レイナーレは呆れながらも子供のことは士郎とさやかの二人に任せつつ、一誠とアシアの所へ向かっていく。

「大丈夫、大丈夫だから…私達は、貴方の味方だからね」

一番怖い思いをしている子供に、さやかが抱きしめて落ち着かせようとしている。背中をさすり、縮こまっていた少女は心を開かせていく。

「名前は？」

「か、甘露寺…八江」

少女は恐る恐る、抱きしめてくれたさやかに自分の名前を声に出して返事を返した。

12/3 午後21:15 魔ゲーセン1階

一方のアーシアは、死にかけてた一誠を聖母トウライイイトヒリシグの微笑で懸命に治療している。

「大丈夫ですかっ、一誠さんっ…！」

麻紀達と鉢合わせし、衝撃的な事実を知って休みたくなる気持ちばかりで寝込みたくなる。

それでも、悪魔が活性化するこの時間帯ではのんびりなどしていられなかった。

「れ、レイナーレ様っ…まだ一誠さんの身体を完治できて」

「駄目よ、彼にはまだ聞きたいことがあるもの。」

無理にでも起こすわ」

レイナーレは、傷が癒えて寝込んでいる一誠を叩き起こしていく。

「いつまで寝てないで、さっさと起きなさい。」

もう怪我は治ったでしょ」

「っっ…俺は」

目を開けた一誠が起き、自分の撃たれた箇所を確認する。治療された事を確認した後に、レイナーレ達の顔を見た。

リアス達を相手にアーシアを人質のことを思い出し、赤龍帝ブーステット、ギアの籠手を出現させる。

「なっ!? レイナーレ!!? やっぱりテメエら…やっぱりアーシアを利用するつもりでっ!!?。」

「大丈夫です、一誠さん。

私は何もされてません…」

「…どういう事だよ」

「あの場から脱するためにも、仕方なかったわ」

レイナーレが人質にしたのも、時間稼ぎを提案したさやかかの案で動いていたという事を明かしていく。

「どうして、彼らは貴方達にまで敵意を向けてた説明してもらおうわ」

「…俺から言うことは何もねーよ」

「貴方の眷属なら貴方を生きて連れ戻せって指示が飛んでくるはずよね? 大事なら尚更、二人のことで攻め込んで来る前に、内輪揉めになってもおかしくない。

…貴方、麻紀だけじゃなくリアス達にも追われてるのよ。討伐という形で」

「黙れ…!」

「なんで貴方が足と腹部を撃たれても何も思わなかったのかしら？」

そうじゃなかったらグレモリーの娘が黙ってるわけないもの、こんな作戦。もう分かったでしょ。

今のグレモリーの娘達全員が、貴方を助けることはないわ」

「黙れって言ってるんだろ!!？」

部長がそんなことするわけねえだろうが!!？」

これ以上テメエが部長達のことを語るんじゃ…つつ」

「一誠さん、落ち着いて！傷は治療しても…まだ麻紀さんに撃たれた痛みが」

レイナーレに本当のことを言われても、一誠は納得しない。怒りながらも、痛みでお腹や足を手で抑えている。

「そんな馬鹿な話が信じられるかよ…！」

そうだ…神羅って奴を倒してみんなの暗示を」

「…倒して暗示が解く保証でもあるの？」

「うるせえよ！」

そんなのやってみなくちゃわかんねえだろが！

墮天使のお前に言われたところで」

「なら、やってみれば良いじゃない。」

愛しのグレモリー家の娘：リアス・グレモリーの目の前で」

「お前に言われなくてもやってや「今のリアスにそれをやったら、確実に消し飛ばされるわよ」なっ……」

倒せばいいといっても、それは暗示をかけたのが代役だったらと言う話だ。リアスと一緒にいたのだから大事な眷属を殺されたりでもしたら、彼女がどういう反応をされるのか。

「もう分かっているんですよ。」

貴方の頭でも、どうなるかことぐらいいは。

確かに記憶が戻れば貴方にとっては万々歳ね。

でもその逆だったら：間違いなく悲惨な末路を辿るわね。

よくも可愛い下僕をつて言われてグレモリーの娘とその眷属に目の敵にされて殺されるのがオチ。

最強のポーンにしたはずが、偽物のポーンの為のために始末される。

最高の皮肉なこと。

大体、あの男が倒せばいいってだけで都合良く解決すると思う？書き換えた相手がその代役じゃなく麻紀って可能性もあるわよ？

だから神羅を倒してもダメなら、麻紀つて線もあるわよね。彼を倒す解決策がないのなら、その時は何度も何度も女子供を殴殺してでも倒さないといけなくなる。

ああでも愛しの紅髪姫とその愉快な仲間達を取り戻す為なのだから殺害も致し方ないことね？

今となつては女子供を殺した悪党つて思われてるんだから助けるためにはいつそのこと開き直つて殴りに行つても仕方がな「幾ら何でも言い過ぎだ……！」

二人の様子を見に来た土郎が、レイナーレの言葉を遮る。彼女にはリアス達のことと認められない一誠に嫌味を言っているが、レイナーレは反省の顔をせず話を続けていく。

「……私は本当のことを言つたまですよ。」

あの麻紀つて男がこんな手段で防御している以上、私達も他人事じゃないのは確か
よ

「だからつて……！」

麻紀を相手取るのなら、正輝達も子供を盾にしてくる対策を考える必要がある。麻紀を力づくで止めようものなら、いづれ一誠と同じ状況を強いられることになる。

「ならもう、貴方達は用済みよね。」

私達と一緒にいてもお荷物なだけだったみたい。二人仲良く消えなさい」

「私達を…殺そうとするのですか。」

でも、助けてくれたのは」

「もう考えが変わったのよ。」

貴方達を敢えて生かしたのも何かあるんじゃないのかって。

でも麻紀が知りたいことを殆ど言っただから不要よね。私達が同情して、そのまま正輝の元に潜伏させるって線も言っただもの。

最初は貴方達のことを黙ってたけど、やっぱり生かしても危険だと思えるわよね？」

「まさか…二人を殺すつもりなのか?？」

「だったら、どうするつもりなの?」

こんなこと私だけじゃなくて正輝だっで見過ごせないわよ」

レイナーレは仕切り直して光の槍を生成させ、二人を始末しようとする。レイナーレが一誠に近づくと、アーシアが前に出て庇おうとする。

「ま、待つて下さい…私はどうなっても構いません!」

一誠さんだけでも助けてもらえませんか!」

「…いや、流石に無理っすよ。今はリアス達と敵対しても、またソイツらが記憶が戻ったら調子に乗ってウチらと敵対するだろうし。」

結局、恩を仇で返してくるしか何も思い浮かべねーっすよ?」

「アーシアを人質に脅迫をしてたとしても、麻紀本人には全く効果がなかった。

そして…貴方達がどれだけ善意のつもりで私達のことを庇ったくれたとしても、結局暗示やら洗脳されてるといつて聞く耳を持たないわ」

降りてきたミツテルトが、レイナーレに賛同している。リアス達が正気に戻っても、レイナーレに懐柔されるから騙されてるんだと麻紀と同じような事を言われるのが目に見えている。

「ひっ…!!?」

「な、何やってんの!?」

さやかは八江と手を繋いだまま、不知火も二人の様子を見に行こうと降りていくと、レイナーレが光の槍で刺し殺そうとしている場面に愕然としていた。

手を離し、レイナーレを止めようとする。

「ち、ちよつと待つてよ！レイナーレさん！

二人を連れていくのは無理だとしても、流石に殺すのは」

「…止めないで頂戴。今この場で二人にトドメをささないで、いつ横やりが入って邪魔してくるか分かったもんじやないわ。

連れて帰るにしたって私達は外敵だけじゃなくてコイツにも襲われる危機感を強いられないといけなくなる。無事に到着したとしても下手をすれば正輝が本気で怒るわ

よ。

またあの時みたいに仲間同士で大喧嘩を起こして、内輪揉めにしたいわけ？そもそも正輝が、こんな馬鹿なことを看過してくれると思う？

…この二人をいつまでも過保護にしてたら、もつと酷い事になるわよ。本当なら時間が経てば強化される神滅具ロンギヌスを持っているのだから今すぐにでも

「だから、ちよつと待つてつてば！

アタシも連れて行つたらヤバいことぐらい分かつてるよ！」

「…じゃあ何が言いたいわけ？」

幾ら彼に問い詰めても、もう何も出てこないと思うのだけれど…それならアーシアが代わりに言ってくれる？

それとも、一誠が全部知ってることを言ったのかしら？」

アーシアに聞いても、彼女も彼と同じことしか把握していない。レイナーレは一誠を殺そうとするのをやめず、なんとか抑えるためにさやかが落ち着かせようと聞いていく。

「殺すのはダメっ。せめて、もう一度話を聞くだけでも…冷静になろうよ」

「私とミツテルトは試練編の時に一度この男に殺されて、蘇ったのだけれど？」

「コイツの私情で、話を聞く余地もなく襲われた私達の事を考えたことある？」

「……うっ」

しかし、本当のことを言われてさやかは言い返せない。

蘇生機能のあるシステムがなかったら、今頃は正輝がレイナーレ達の仇を討つためにリアス達を滅ぼした可能性もあっただろう。

同時に、試練編の時に正輝と響の関係が悪化するどころか彼女に対して激しい憎悪を向けることになったかもしれない。

「やり返してやり返されてなんて今に始まったことじゃないのだけれど。言っておくけど……私達、アイツらの良いなりになるつもりは微塵も無いわよ。

……正輝に勧誘される前に、私の仲間がグレモリー家の娘に二人消し飛ばされたのだから。

貴方のお友達まで、リアス達に殺されることになったとしても庇うことができるの？」

今度は士郎が横から割って入り、止めようとしたが無駄だった。彼女が彼の主人の手によって仲間を消されたという言葉に、士郎とさやかは返す言葉が見当たらない。

さやかは止めようとしてた手を離してしまった。行き詰まった二人に、もう一人レイナーレに尋ねる。

「あの……レイナーレさん。

私からも、今は槍を納めてくれませんか……」

「判断を任せるって言つてた貴方まで止めてくるとわね……どうして急に気が変わったの？」

二人が言葉に行き詰まっていたその時に、不知火が止めに入った。

「私は……二人のことは知らないし、どう揉めたのかのは分からない。でも最初に殺された貴方の仲間だつて、彼自身の手で殺したわけじゃない。

麻紀の元から逃げる前のことも、過去に仲間を殺されことに何があつたかも。まだ私達は二人のことについて断片的なことしか何も知らされていない」

「……あのいざこざを見てまだわからない？」

何度も説明するけれど、二人に付き纏われても邪魔、一緒にいたところで寝首を狙われてもおかしくない。

このまま生かしておいても、私達の障害になるだけなの。

いいから貴方は引つ込んでなさい」

「いいや、引つ込むのはお前の方だ。

レイナーレ」

今度はランサーが赤槍を取り出して、レイナーレに向けていく。レイナーレが彼を殺したい気持ちもわかるが、不知火のサーヴァントであるランサーはマスターとの主従関

係である以上、不知火の意思が最優先される。

「ランサー？？」

「…何のつもり？私を守ってくれたことは一応感謝してるつもりだわ。

でも槍を引けてことは、この二人に肩入れするつもりなの？」

「そう言うわけじゃねえよ。マスターも、二人

を肩入れしたくてあんな事を言ったのなら、初めっからレイナーレを守るようなこと
もしていないからな。

かといって俺とマスターは、お前らのいざこぎに水を差す気もねえよ。寧ろ殺しても
仕方ねえっていう判断は正しいだろう。

だがマスターが納得できないってならその意思を聞くのがサーヴァントである俺の
役目だ」

「だったら、武器を納めるのはそっちすよ。

レイナーレ姉様に一回でも傷つけたら、その時点でウチらの敵として始末するから」
ミッテルトも、不知火の首に光の槍を押し当てていく。八江は今度は四人が戦うん
じやないかと恐怖し、さやかの手を握りしめていく。

「……ここで私を殺すことになったら、そこにいるミッテルトや、正輝だって絶対に黙って
ないわ。」

貴方とマスターの不知火も、殺害対象になるわよ」

「だろうな。でもそうなつちまつた時は私刑を容認できないマスターからのお願いに聞く耳を持てなかったから、アンタらレイナーレ達の器量が小さかったことが原因で俺達とも殺し合う事になるだろうよ」

「止めろ！ランサーも、ミッテルトも！

俺達まで潰し合いをしてどうするんだよ!!？」

睨み合いの中、沈黙が続いていく。

一誠達を生かして連れ帰ったのも何か有力な情報があると思ったから黙っていたのに、それでも助けたせいかこうして意見が噛み合わない事態になっていた。

それを二人を可哀想だという気の許しがトロイの木馬みたいに内側から破壊することを許す事になる。

「ほんと、馬鹿馬鹿しい…ミッテルト」

「わ、わかつたつすよ。」

レイナーレ姉様が引くなら」

レイナーレは少し苛つきながらも槍を収め、ランサーも宝具を収めた。ミッテルトの方に顔を向き、ミッテルトも光の槍を解いていく。

「…あつちで何があつたの？」

彼の言っていた三度目ってどういうこと?」

「いい、イツセーさん……」

「話してくれば、今のところは光の槍を収めるわ。」

私もミッテルトも腑に落ちないけど、貴方達と鉢合わせしたことは一度正輝に黙っているのだから。

私達はまだ何も肝心な事を良く知ってない。

さつき見た麻紀の豹変ぶりの真相を、今後の事を考えるなら……ちゃんと知る必要があるわ。

全てを話せば、もしかしたらアーシアの命だけは助けられるかもしれないわね」

ミッテルトは納得しないまま光の槍を消し、ランサーも槍を収めて、壁に横たわっていく。

士郎とさやかは、四人が殺し合わない事に安堵した。

「……二人して何ホツとした顔してるのよ?」

ランサーは、私を殺す気なんて無かったのでしょうし」

「えっ、どういうことなの?」

「正輝達とも本気で殺し合う事まで覚悟してるのなら、間違いなく魔力切れを起こして死活問題になるわ。」

そのまま私とミッテルトを気絶させて、その間に残った人数でさっさと二人の処遇を決めるつもりだったのでしょ？」

「…本当なのか？ランサー」

「ああ。マスターから殺してでも止めろ、なんて命じられてなかったからな。大した女だ。

矛先を突きつけられても、ちゃんと見る目を持つてるじゃねえか」

二人が逃げ出した事情もまだ聞いておらず、何も知らずに巻き込まれてしまった。

それでも言わなかったら一誠を殺害されかねないと、彼の口から言えないのならアーシアは彼を守る為に話そうとする。

「その…私達、実は「良いんだアーシア…俺も血が登ってたんだ」

が、釈然とはしなかったが諦めた表情で今まで何があったのかを彼は話していった。船を出ていく前のことを話し、せめて僅かながら生き残れる可能性があるならと。

「俺は麻紀に、リアス部長をみんなを解放しろって麻紀を脅したんだ。でも、麻紀は挑発して自害させることだってさせることも可能だぞって言われたよ。

ああ言われて、俺はコイツを野放しにしたら危険だと思っただ。でも、完全に殴られる事を対策していたんだ…俺は余りに大馬鹿だったんだ。

直前まで、止められなかったんだ。

子供の頭を神器でぶん殴ったら、どうなるかことぐらい……俺でも分かりきったことなのに。

麻紀は、とつくに殴られることを予測したから強制転移を用意してたんだよ。分かってた上で挑発してきやがったんだ。

その挑発にまんまと乗ったせいで、殴る直前で子供が急に目の前に転移して……そのままその子達の顔面に」

「殴殺……してしまったのか。

麻紀が無関係な子供を転移させて、その手で」

「畜生……！」

上条のようなごく一般人の殴りならまだしも神器を備わった拳で未成長の頭蓋を破壊するなど雑作もない。たった一撃、重い拳で悲鳴を上げることなく絶命する。

一・二回目は二人きりだけの時だったが、三度目でもリアス達の目の前で強制転移させて保身したことに驚いている。

一誠はリアス達がいるのに子供を盾にするなんてできるわけがないと考え、特攻しようとしたが、麻紀はリアス達の目の前だろうと容易く女子供を盾にして実行した。

「命令権って……そんな事まで可能なのか」

「端末を押しただけや、条件で強制転移できるのなら、そういう芸当も可能みてーだな。

暗示をどうかけたかは分からんが」

殴打で脳震盪を起こすことも、激痛で叫ぶこともなく一瞬で子供の命を奪う。

善良な心を持つ人を相手にするなら人質を盾代わりにして少しでも動揺させれば、その隙をつかれることになる。

逆に、盾代わりにされた人質を誤って攻撃してしまったというのなら、その場に誰かもう一人無実を証明してくれる人がいないと一誠のよう周囲の人達からは「女子供に暴行した」という理由だけで一方的に敵視されてしまうことになる。

どちらに転んでも、人質にした側が得をする結果にしかならない。

「…まあ、そいつは甘い汁を吸えるだろうな。

踏み絵みたいに反抗してきた奴を悪党にできる。

理由付けなんて、さっきのを見ればどうとでも言える。レイナーレの言う通り、今のコイツは子供殺しの悪党つてことにされてるからな」

「違います…！一誠さんはそんな人じゃ！

あれは…あれは、本当に不幸な事故だったんです。

一誠さんは何も」

「別になんとも思わないわよ。

アーシアを連れておいて、理由もなく好き好んで子供の顔面を神器でぶん殴るほど性

根は腐ってないでしょうに。

大体：その子がどうか責める気は微塵もない。そんなの私達には知ったことじゃない。

でもこうして裏切られたのなら、丁度いいわ。

それなら次は、麻紀の戦力を全部教えて」

「言っただろ：：麻紀が一体何してるのか俺にはもう分からねえよ。誰を仲間に取り入れたとか、何を企んでるとか。

もう俺達が知っている事は全部話したんだ!!？」

仮に麻紀のことまで知ってたとしても：：今度はお前らが部長達を始末するつもりなんだろう！」

「そう：：全部話した、ねえ。

なら質問を変えるわ。

麻紀は三度目は防がれたって言ったのなら、少なくとも二人も殴ってたのよね。一体誰を殴ったっていうの?」

「殴った相手のことまでいちいち覚えてねえよ！俺だつて必死だったんだ!!？」

「：：三度目まで拳を止められたのなら、鮮明に覚えてるはずよね?」

レイナーレは、彼に対して怒りを通り越して呆れていた。隠していようがいが、

もうこの二人から知りたい情報を吐くこともない。

「私達が無理して守ったお陰で貴方もアーシアも命拾いしたのに、これでも言いたくないのかしら?」

「お前らに助けを頼んだ覚えはねえ…!」

「見捨てられても、かつての仲間は売らないってわけ?」

「当たり前だろうが、お前なんかにつ…!!?」

結局は平行線だった。

後の判断は、彼と関係のあったレイナーレがケジメをつけるしかない。話しても、彼への対応を変えることはできない。

「あつそ…なら、もう良いわ。」

ここから後の事は、私達の問題よね」

レイナーレは不知火に目を向け、ランサーもアーシア達を守るのを止める。元々彼は正輝の敵として相対していた関係であり、会ってから生かすかどうかも定まってなかった。

「…マスターが、どうしてもその二人を助けたいとかなら話は別だがな」

「なら、彼を殺す事に異論がある人は?」

士郎とさやかだけ?」

二人は口籠もつてしまい、レイナーレは光の槍を出現させていく。不知火も止める様子もない。

ただ、三人は気が引けて暗い顔をしていた。

「そんなつ…お願いします！」

私はどうなつて構いません！

どうか見逃して」

「…ごめん」

今度こそ殺すつもりだと危惧したアーシアは、一誠を庇おうとするが、さやかは水分身で羽交い締めにしていく。

「八江ちゃん…あの人は大事な話があるみたいだから。私達は少し離れようか」

「え、でもつ…」

さやかは少なくとも八江が殺害現場を見てトラウマにならないよう、2階へと移動させていく。ランサーはため息をつきながら腕を組み、邪魔をせずレイナーレを黙って見ているだけだった。

「やつぱりこんなのはダメだ、レイナーレ！」

俺から正輝に説得すれば!!？」

『土郎さん、止めちゃダメだよ…こればかりはちゃんとレイナーレさんが決めないと』

いけないことになりそう。

：私達が割って入れるのは、もうここまでだと思っから』
念話をかけて、士郎を論ずる。

一誠が言えることは全て吐いてくれたが、生殺与奪までは決断していなかった。そもその話、殺さずに生かそうとズルズル引きずっていたことが甘えであり、アーシアと子供を守りながら合流すること自体墮天使の二人組が神経質に確実になってしまふ。

試練編でレイナーレとミツテルトを殺したという事実は変わらない。蘇生機能があつたとしても、墮天使だけじゃなく正輝の仲間を襲うかもしれない危険人物を野放しにするのがどれだけ不味いかということも、さやかには少しわかるような気がしていた。

ここから先のことは、レイナーレが一誠に対してどう後始末をつけるかだけ。

一誠は、麻紀に撃たれた痛みはまだ残ったままで碌に動けそうもない。なんとか赤龍帝の籠手ブーステット・ギアも出すことは出来たが、タイミングが余りに遅すぎている。

「これ以上聞くのは意味がないみたい。

聞きたいことはもう十分に聞けた。

死ぬ覚悟が出来てるなら、これ以上は不毛…それなら、しょうがないわね!!？」

レイナーレが、一誠に向けて槍を振り下ろした。取り押さえられたアーシアからは、助けることもできずにただ悲鳴を上げることしかできない。

彼自身、船から出ていって麻紀に始末されてもおかしくは無かった。レイナーレ達と出会って、その寿命が少し伸びただけだった。

(くそっ…またか。

また、レイナーレに殺されて)

光の槍は悪魔にとって猛毒であり、刺さた激痛とその刺された箇所を焦がしたのは忘れもしない。

彼は目を閉じて、身を守ろうとする。

しかし、しばらく経っても刺された感触も痛みも感じない。一誠はゆっくりと目を開くと、身体は無傷で光の槍は顔の真横に刺さっただけだった。

「八江ちゃんは一階に残し…あれ、もう終わったの？」

「ええ、終わったところよ」

「…そっか」

レイナーレが生かした事にミッテルトは驚いた反応をする。さやかは一誠の姿を見て、彼が生きていることを確認した。

一誠を生かしたレイナーレには質問せず、水分身を解いてアーシアを解放していく。
「えっ……!?」

ち、ちよつと良いんすかレイナーレ姉様!

コイツらがグレモリーの連中が元に戻ったら絶対に調子乗るっすよ!!?

私らの手で終わらせないと、また報復されちゃうかもしれないし…それに他の仲間まで手を出すかもしれないって言ったじゃないっすか!?!?

今コイツらを逃したらまた」

「二人は適当な所にでも放置してなさい。

もう別に放つても良いわ…麻紀って男に恨まれて、グレモリー家にまで命を狙われるのなら私達の障害にはならないでしょう。

いくら構ってても、時間の無駄よ。

私直々にトドメを刺さなくても、コイツらが暗示を解く前に勝手に野垂れ死ぬだけよ」

「本当にそれで良いんだな? レイナーレ」

「…」

ランサーはそう聞かれても、レイナーレは返事を返そうとしない。ミッテルトはレイナーレの言葉に納得はしつつも、一誠とアーシアを見て少し嫌そうな顔をする。

一誠は何とかして起き上がり、咄嗟に問いかける。

「お、おいつ……ちよつと待てよ！」

俺のこと殺すんじゃないのかよ！」

「…煩いわね、理由なんて別にいいでしょ」

「はあつ?!? 別について…信用できるかよ！」

俺を騙して殺して、アーシアに酷い事をした時だつて自分は何も悪くないように否定してただろ！

俺がお前らを襲つた逆恨みだつてあつただろうが！

それが…それが何で今になつて俺達を助けた！

麻紀だけじゃねえ…お前もお前で、一体何がしたいのか全然訳わかんねえよ!!?」

「ならどうするの、もう一度戦いたいの？」

私達と殺し合いたいわけ？」

「お前の答えを聞いてからだ！」

またデートの時みたいに冗談でからかつたつもりか?!?」

レイナーレの返答を聞いても、一誠は納得してない。あれだけ一誠とアーシアを殺すことに懸命だったレイナーレが、いざ実行しようとしたら気が変わったなんて事を言わ

れても信じていない。

「二人も死体を出して処分するにも、面倒だから……さつきそう思ったから、それだけよ」「んだよそれ!!? 全然理由になってねえだろ!!?」

「なら、本当に殺されたほうが良かったの？」

「アーシアの目の前で？」

「そう言うわけじゃ……ねえけど」

「あんな態度しておいて、何動揺してるわけ？」

「ハッキリしなさいよ」

「一誠は腑に落ちず、レイナーレの反論に言い返せない。

それでも面倒臭いからという気が変わっただけじゃ納得がいかなかった。

「麻紀のせいでリアス部長達を居場所を奪われた、ね。その程度で済んで良かったわね」

「その程度って……お前、喧嘩売ってんのか!!?」

「一番最悪のは命令権でリアス達全員に虐殺させることですよ? 下手したら復讐の為に手段を選ばないでしょうに。」

「そうなったら、貴方はリアス達のことを本当に信頼できるのかしら?」

「尊敬できる自信があるの?」

「……何が言いたいんだよ」

あんな状態の麻紀がどういう行動を取ってくるのか、馬鹿であろうと大まかな予想をつくことをしてないことに、レイナーレが助言していく。

「麻紀が今後の方針で、最悪の手段を取ろうものなら……もつと大勢の人間が地獄を見ることになることを一度は考えたの？」

一番最悪なのは民衆を虐殺すること、しかも平常心のままリアス達が執行することよ。

さつきの暗示みたいに。

事故で子供を殴り殺して、その上にアジアを連れて逃げたのでしょ。

でも結果的に良かったわね？ 貴方達に大量虐殺を命じられてないだけ幾分かマシだったわ」

「それは、つ……俺だって部長達のことを考えて!!？」

「そうなつてたら、最悪子殺しだけじゃ済まなかったわよ」

一誠は今の麻紀がそんな事を命じるわけがないと、否定できなかった。最悪なケースを考えようとはしない楽観的な為に、レイナーレからそう言われて気づく。

それをなんとかしようと思おうと防ごうと動いたが、彼の考えが麻紀よりも甘かったことと、彼自身の心が弱かったからだ。

一誠は麻紀の凶行を止めることができなかった。

「いい？」つだけ言わせてもらおうわよ。

もし麻紀とグレモリー家の娘と眷属が私達だけじゃなくこの街と市民全員にまでも蹂躪することになったら正輝は一体何するか分からないから。

そうなたら逆恨みしないでよ。

貴方達も麻紀に加担する形になったら、もう私達は今みたいに貴方を助けることも勿論できない：とゆうより、ここで命を取りたいくらいよ。

貴方が私達のをいざござのことで無関心なように、貴方がリアス達に殺されようが私達だつて知ったことじゃない。

この騒動は貴方達のしくじりと、麻紀の暴走が原因で起きたトラブルだつてことよ。

分かったなら：…今後は私達の動向に干渉しないで、本当に引つ込んで頂戴。

そののアーシアが本当に大事ならね。

また私達に突つかかってくるなら、今度こそ心臓を突き刺さすわ。

分かったなら：…ここから、出ていきなさい。

貴方達のすることは、私達の目の前から消え去ることよ。

もう、お互い時間がないのだから」

一誠は立ち尽くしたまま黙ることしか出来なくなっている。

レイナーレがあの時はどうして殺さなかったのかと問いただしても、レイナーレ達と共に動こうとすれば警告通りに殺されることになる。

一誠達から先に、この廃ゲーセンを出て行かなければならなかった。

「…俺はっ」

この場で一誠から騙してレイナーレを殺す事になれば、この廃ゲーセンにいる他の四人とも戦うことになるだろう。

それだけではなく、アーシアを確保するリアス達と麻紀を相手にしなくてはならぬ。

二人だけで頼れる相手もおらず、自分達が原因で起こした問題なのだから当麻達も呆れて助けてくれるかどうか分からない。

一誠は廃ゲーセンのドアノブを掴み、この建物から出ようとする。その時点でブーステット・ギア赤龍帝の籠手の力は既に最大まで溜まっているのを感じとっていた。

(このまま出ていくのは簡単だ。でも…)

せめて離れていても、僅かながらにレイナーレ達が麻紀を押さえ込んでくれるのなら。

気を許して、またデートの時みたく殺されるかもしれないと恐れていた。彼なりに必死に考えて、出ていこうとする足を止めていく。

貯めていった力を、振り上げた拳をどう使うのか

「レイナーレええっ!!?」

「なっ!!?」

やっぱりコイツ、レイナーレ姉様を!

一誠は振り返って赤龍帝の籠手を握りつつレイナーレの元へ走っていく。ミッテル

トは一誠の反応に光の槍を取り出し、レイナーレの前になって守ろうと前に立つ。

『Transfer!』

一誠は拳を突き出し、ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物でレイナーレを強くさせた。

「貴方っ…!!?」

「俺は、お前のことを許しちゃいねえ…でも。」

もう自分でも何してんのかよく分からねえんだ」

誰の指示に従われることもなく、悩みに悩みきったが故に憎むはずのレイナーレに力を与えた。

リアス達と一緒にいた頃なら、絶対にしない行為だった。

「…誠司を見殺しにしたのは本当のことだったんだ。部長達が無事で心底ホッとした事も。」

でも俺達が裏切って、誠司が死んでからアイツは余計に悪化してしまった。

木場は復讐心に駆られて、子猫ちゃんは豹変した麻紀を恐れるようになって、部長と明乃さんは仲間に命令権を下されたら不味いから逆らえずに黙認するしかできなくなつたんだ。

麻紀自身は俺達の知らない間に新しい戦力を次から次へと船に引き入れて、もうアイツが何考えてるのか知る事すら出来ねえんだ：部長達は無事だけれど、みんなして暗い顔をしてるんだよ。

もし麻紀に逆らつたつてなつたら、今度は俺達の誰かが誠司みたいな犠牲が出るかもしれない。

そうなる前に、俺がああの携帯で部長達に酷い命令をする前にぶつ飛ばして、権限を取り上げようと動いたんだ。

でも俺は：俺は：麻紀を殴ろうとしたら、転移した目の前の子供を殴り殺したんだ。強制転移させて自分の身を守りやがったんだ。

だから俺は目の前に転移させないように麻紀を掴んで殴つても、今度は死にかけだった艦娘と入れ替わつて：その子まで殴り殺して。

麻紀は安全な所について、麻紀が引き連れた連中が一齐に憎悪の目を向けてくるんだ。：逆らつたらどうなるか、もう検討をつけてたんだ。

反抗する時期が余りに遅すぎたんだ。

今度は俺が、罪の無い子供と女を殴り殺した畜生だつて。何回も抵抗しても、アイツらは立ち上がって死ぬまで弾圧しようとしてきたんだ。

抵抗する度に勢いは全然止まらなくて、もうどうにもならなかった。

俺はアイツらに恐怖したんだ。

鳥肌が立って、酷く震えて、上手く息もできなくなつて：もう嫌になつて逃げ出したんだ。

耐えられなかったんだ。

そしてアーシアを連れて、無我夢中で必死に逃げ出した。

もう怒るべきか、悲しんで良いのか、俺自身：頭ん中ぐちゃぐちゃで、自分ですら何がしたいのかよくわからねえんだ：」

今度は詳細に、逃げる前のことを明かした。

悪魔になる以前の彼は、ただ根っからエロいだけの男子高校生だ。

レイナーレのようにリアス達に相対する敵が目の前に現れたのなら、容赦なく殴り飛ばしていただろう。

しかし、一誠自身が徹底して相手の息の根を止めて殺すような残虐性までは持ち合わせていない。それ故に、事故とはいえ二人の女性を手にかけて殺害したことに酷く動揺

している。

力で抵抗しようとする度に殺した事への怒号と殺意は止まないどころか増していき、彼の精神は恐怖で蝕まれていそうになっていた。

彼は、心が壊されてしまう前にアーシアを連れて麻紀の船を出て行った。

【部長達の解放を放棄する程、それほどまでに兵藤一誠は疲弊して追い詰められていた】
そうでなければあの場でレイナー達と接触した時に、すぐさま逃げる判断もできていた。船を出てからの彼は、もう心の安息が取れずに憔悴状態になっている。

「だから一回だ……一回だけ、助けてもらったテムエラには借りを返す。

今の部長達には手伝わない、お前らの邪魔はしない、もう麻紀には二度と手を貸さない。
い。

これで、これで本当に……終わりだ」

「ふざけるな……つての……そんな話。あんな挙動しておいて、信じて虫が良すぎでしよ。

そんなの無理に決まっ」

ミツテルトはレイナーレが許した事に少しでも我慢しようとしたが、彼の突発的な行動に口を出さないわけにもいかなかった。

「お願いします。

どうか、一誠さんを信じてもらえませんか。

さっきので驚かせてしまったことは謝ります。

それでも子供の目の前で争うことも、関係のない人達まで襲うような人じゃありません！

一誠さんは私を守るだけで本当に精一杯なんですっ…だから、お願いします」

そう言つて、疑わせるような事をさせてしまった事に対して代わりに許して欲しいと震えながらアーシアが頭を下げていく。

ミッテルトはかなり苛つきながら光の槍を持っているままだつたが、それをレイナーレが手を差し出して抑える。

「…もう良いわ、頭を上げなさいアーシア。

私達は何もしないから。

貴方にはちゃんと謝ないといけないわね。

利用しようとしたこと、本当にごめんなさい」

レイナーレが同情した顔でそう言い、アーシアは彼女の言う通りに頭を上げていく。レイナーレはアーシアから一誠に視線を変え、彼の顔を見つつ今度は冷静な表情を切り替える。

「それと一誠…貴方には、謝らないわよ。

お互い、一度は殺し殺されたんだから」

「…お前なんかには、気休めの言葉なんていらねえんだよっ」

一誠は暗い顔のままレイナーレの目を見ようともしなかった。二人はこの廃ゲーセンを出ようとするものの、アーシアだけが扉の前で振り向き、レイナーレ達に頭を下げていく。

「レイナーレ様も…皆さんも。」

「…ここまで私達を守って下さって、ありがとうございます」

「本当なら、二人にはもう二度と会わないことを願いたいわ。」

だからせめて、遠い場所で生きて」

「…行こう、アーシア」

二人は廃ゲーセンを出ていった。廃ゲーセンを背に向けて、遠くにある街の方へととぼとぼ歩いて行く。

『良いんだな相棒』

「…何がだよ、ドライグ」

『奴の持っていた神滅具はシステムと酷似させたものだが、俺のように意思は待ち合わせない。』

贗作なのはアッチだってことも証明させることが可能だ。

だが、まさかお前があの墮天使に力を与えるとは、大きく出たものだ。予想通りにあの連中が俺達の追っ手を殆ど請け負うことになるかもしれない。

実際にあの墮天使達も逃げるのに精一杯なのだから、力を与えたところでお前の眷属達をすぐに始末するなんてこともまずない。

それを分かった上で』

「知るかよ…いままで俺を散々騙した罰だ」

『本当にそう思っているのか？』

心の底じゃかなり複雑な筈だろうな。

憎むはずだった相手は改心し、リアス・グレモリーとその眷属は今でも麻紀の手駒に

されていることに』

「…くそっ」

ドライグの言う通り、一誠は素直に喜ばなかった。騙した女に命を奪われ、今度は助けてもらったことが今でもかなり困惑している。

「あの一誠さん、もしかしてレイナーレ様のこと」

「…それ以上は言っちゃダメだ。アーシア」

ただ、助けられたとしても間違っても一誠の口からレイナーレを許すという言葉は絶対にしなくなかった。

アーシアに許した事を聞かれるが、それを遮る。

彼女への本心は、わかっていても誰にも打ち明けずに彼自身の心に留めておく事にした。

レイナーレは自分をちゃんと見て欲しい人を望み、一誠は彼女を見てたと思い込んでいた。

だが、彼が見ていたのは「自分の彼女」でレイナーレ自身のことを知る機会も努力も出来なかった。

——彼は最後まで彼女のことを深く知る機会もないまま、縁がなかった。たった、それだけの話。

「俺達は俺達で、アイツらの抗争に巻き込まれないように安全な場所に移動しよう。

「…はい」

(グッバイ…俺の恋)

一誠は廃ゲーセンの方を振り返ると、寂しそうな顔をしつつ少しだけ眺めていた。

2話一触即発〔後〕（レイナーレ・士郎ルート）

12/2 21:50 廃ゲーセン

「さやかさん…さっきの二人は？」

「急用があるから、私達より先に出て行ったんだよ。もう大事な話も済んだから」

「そ、そうですか」

一誠とアーシアが出ていった頃に、さやかが2階に置いた八江の元へ向かっていた。

階段を降りていくと、一誠達が出て行った数分した後に、今度はレイナーレが士郎をジト目で指摘する。

「これで、私達が麻紀達を引きつけちゃう形になっちゃったね」

「ほんと、どうしてくれんのよ…」

「でも、聞いてなかったら麻紀が一体何をしてるのか分からないままだったんだ。少なくとも、麻紀側の有力な情報を俺達は手に入れることはできた」

「それは私達が生きて情報を持ち帰れたら、の話でしょ」

この場を脱せる方法があるからと乗っていたが、こんな揉め合いをするくらいなら一

誠達のとリアス達含む麻紀で潰し合わせても良かった状況なのに、それでも助けようとするお人好しさに呆れている。

「あの場で二人を見殺しにさせることを選んでたら、その時間稼ぎもままなかつたしな。すぐに追いかけてきた可能性だつてある」

「それも、そうだけど…」

「これ以上は俺も小言になりそうだからな。」

これで、あの二人のことは済んだ。

俺達もこの建物から出る準備をしておくとしよう」

そう言つてランサーは、マスターである不知火と共に準備をしていく。

「なあレイナーレ、どうして一誠達を…死体を処理するのが面倒だつて言つたのだから。」

いや、何でもない…言いたくないならこれ以上は聞かない」

士郎は、レイナーレが殺すのを諦めたことに不可解な気持ちではあつたがこれ以上聞くのを諦めた。ミッテルトはムスツと頬を膨らませた顔のまま、不機嫌そうにしていく。

「姉様がそれで良いなら何も言わないつすけど。ウチは、まだ納得してねーつすよ…」

「ミッテルトがそう思うなら、それで良いわ」

今まで麻紀の船にいた一誠が、誠司の死を証言したことで彼の死が確定したものだど

はつきりした。二人に出会ったせいでも厄介事には巻き込まれたが、話を聞いた限りだと麻紀の今の状態について大体の想像できた。

「でも一誠の言っていることが本当なら、誠司は死んでしまったんだな……」

「麻紀があんな風に狂ってしまったのも、アイツの死が原因になるわね」

麻紀が子供を盾代わりにしても、なんとも思わなかった事を彼本人が言動で示している。

「だが、これで分かったこともあった。

あの無人島を襲撃したのは、麻紀で間違いない。突撃させた民間人達や艦娘も俺達ごとあの歌で眠らせようとしたのも……!!?」

「絶対に許されないよ、そんなの！」

それで一体どれだけの人が……!!?」

「麻紀って男が艦娘達を悪用してるなら……私も許せないわ」

「胸糞悪い気持ちになるのは、俺も同じだ。

マスターなんかは、同じ艦娘だからな」

士郎は一誠達の事情を知って悔しそうに拳を握りしめ、さやかも憤っている。ランサーと不知火の二人も、一誠達の話から無人島での出来事を思い出して嫌悪な顔をしていた。

「…麻紀って奴が、殴り返される覚悟が無いってのはさっきの話で分かったな。

あの無人島で何人もの群れを使つて散策させたのも人材集めてことだ。海辺で戦つたのも、全く歯応えが無い連中ばかりいたのはこれで納得もいった。

要するにだ、ソイツは殴り返される覚悟が無いから何人もの身代わりを用意して、罪をおつ被せて、ずっと安全なところに居続ける…卑怯者つてことだ」

(赤龍帝によつて施された力…確かに漲つてくるわね)

「ありがたいけど…力を与えるなら、私じゃなくて士郎かさやかにしなさいよ。

馬鹿なんだから」

ランサー達が話している一方で、レイナーレは一誠に託された力に驚いていた。

光の槍を取り出すと、赤いオーラを纏つて強化されている。

授けられた力は麻紀達から逃げる為に活用しようと考えているが、どんなに強力な光の壁を展開しても相手が幻想殺しである以上、一撃で破壊されるだけ。

レイナーレに渡すよりは、さまざまな物を投影できる士郎や水分身を扱えられるさやかに譲渡して貰えた方がまだ助かった。

「…とにかく急いでここから出ましよう。

全員準備はできてるわよね」

「ああ、駆けつけてくる前にこの店を」

休息は済み、レイナーレ達も廃ゲーセンから出る準備は十分にした。全員が店の出入り口から出ようとするが、レイナーレとミツテルトが悪魔の気配を察知する。リアス達と麻紀が、この店へやってきたことに。

「…いや、タイミング悪く。」

あの連中が来たみたいだな」

「やつぱり、ここまで追って来ると思ってたわ。流星に時間をかけ過ぎたもの」

まだ外に出ずにドアノブに手をかけようとしたのが幸いだ、リアス達が廃ゲーセンの前に待っている。

「探しても見つからないと思っていたら、ここを根城にしたのね。」

隠れてないで出てきなさい」

(うわあ…これじゃ出れないよっ)

さやかかドアの覗き穴を見ると、港で会った時と同様に待ち構えていた。リアス、朱乃、小猫、神羅と麻紀の5人が立っている。

「足跡から察するに…出て行ったのは二人か。」

もしかしたら、この足跡から見るとアーシアとはぐれ悪魔の二人が、あの街まで一緒に逃げてたみたいだ」

「あらあら…墮天使がわざわざ囹になるだなんて」

「アーシアをはぐれ悪魔一人に委ねるなんて。

一体何を企てるのかしら？」

一誠とアーシアが出て行つてから、そんなに時間が立つておらず、二人が残した足跡もそのまま地面に残つたまままだ。リアス達は墮天使だけしかない事に気配を察知し、はぐれ悪魔が遠くへ行つたことに気づく。

「君たちの最優先事項は、アーシアを助けることだ。コイツらは僕が相手するよ」

「……良いのかしら、麻紀に任せて」

「彼らを殺すのは簡単なことだ。」

でも、生け捕りにするのは大変だろ？

君達の代わりに僕がやるからさ。

街には無人機達が牛耳つてて探すのはかなり大変だと思うから、敵が集まったら逃げ
てよ」

「そうね。なら彼らの確保は任せたわよ」

こうしてリアス達は街の方へ向かい、麻紀は廃ゲーセンの前に留まる。幻想殺し・武器化でメガホンを取り出し、士郎達に警告していく。

『君達は既に包囲されている！』

全員捕まる気がないのなら、四肢のどれかを撃つてでも行動不能にさせて連行させるしかない！

それでどうだろう！

今いる正輝の仲間を一人渡してくれたら、他の誰かが痛い思いをすることもない。

僕も大人しく下がる事にするよ！』

「何よそれっ…そんなふざけた提案乗らないに」

『3分間待とう！時間が過ぎても沈黙を貫くか、逃走或いは攻撃を始めた場合は突入する!!?』

レイナーレ達は麻紀の提案に乗るつもりはなかった。リアスは「用が済んだら始末する」と言っていたのだから、渡したところで生かすことは絶対がない。

「不味いわね…たった3分間でこの店を出る準備を模索しないと。」

このままだと突入してくるわ」

「窓から確認したが、この建物の周囲を分身達が囲っている」

店にある窓を確認すると、警告した通りに店の周囲を待ち伏せしていた。何処から逃げ出しても対処できるように、窓の方にも銃を向けて構えている。

「こうなったら…光の槍を刺しても効かないのなら、いつそ地面に突き刺して爆発させるわ。」

それで吹き飛ばすだけでも」

「待って一人だけじゃないっ……五人以上は間違いないわ。」

槍を投擲しても意味がないと思う」

「だったら本体を探せば、分身だって消えるんじゃないんっすか？」

メガホンで警告してたソイツならワンチャンどうにかなるんじゃない」

「……いいや、そんな甘い希望は考えない方がいい。もしかしたら囲んでいる連中全員が分身達って可能性が高そうだ。」

……こんな危険な場所に本人が出向くとは到底思えねえ。ましてや子供を盾にする奴が、危険な前線に出て戦う必要なんてないからな」

「え、マジっすか。」

包囲してるの……マジに全員分身なの……？」

士郎達が慌てている中、時間は迫っていく。

この廃ゲーセンは既に麻紀の分身達に包囲され、どうすれば良いかを模索している。

このまま残っても、突入して蜂の巣にされてしまうだけだった。

『残り一分！まだ返答がないのか!!？』

「それが本当ならどうしようっ……アタシが水分身で戦うにしても当麻みたいに異能力を打ち消せる分身体なんでしょ？」

「そいつらを正面から相手にするってなると流星に部が悪いし」

「でももう時間ないっすよ！」

「どうするんっすか!?」

『もう3分経った！』

「答えを聞かせてもらおうか!!?」

麻紀が時間を測りつつ、再度メガホンを使って警告する。警告してから2、3分待つても、廃ゲーセンの中からは物音も立たず、士郎達からは何の返事も帰ってこない。

「沈黙は解答と捉えて良いんだ。」

「誰一人仲間を売る気はないと…ああそう。」

「全員突撃!!?」

麻紀はメガホンを消し、他の分身達に命令を下していく。続々と麻紀の分身が廃ゲーセンへ突入しようとしたが、窓を開けてミッテルトとレイナーレが空高く飛翔していた。

「…へえ、あれだけ時間をかけたのに結局観念して上空に逃げたんだね。」

「でも無駄だ。そんな所にいたら、どうなるかぐらい分かってるだろ。」

「わざわざ逃げ場のない上空に移動するなんて、もう万策尽きたのかな?」

麻紀の分身達が猟銃を用意し、レイナーレ達を見上げていく。堕天使の羽で上空に浮

遊している以上、麻紀の言う通り銃弾を守る障壁もなく、逃げ場もない。

二階にいる分身は窓からレイナーレとミッテルトを狙おうとしている。

(でも二人だけ上空へ逃げ出した?)

他の連中は見捨てたのか?)

全員の分身が上を見上げた隙を狙い、ランサーが不知火と土郎を抱えつつ全速力で走り去っていく。さやかはデバイスで魔法少女に変身し、八江を抱えつつ2階の反対側の窓から魔ゲーセンを出て行く。

最速だけあって、足音に気づいた麻紀が振り向いた時にはランサー達の姿が見当たらなくなっていた。麻紀の分身達が、ランサーの足音に反応するが時既に遅い。

ランサーには既に逃げられてしまい、また空を見上げるとミッテルトが両手で小さい光の槍を二つ飛ばしていく。

投げた二つの槍は落下し、地面に刺さる前に強く発光する。線香花火のように槍から光の針が飛び散って地面へと落ちていく。

「またあの目眩しかつ!!?」

見えなくても良い!

飛んだ方向に撃ちまくれ!!?」

麻紀の分身達に針の攻撃は効かないが、発光で標準を合わせないようにするには充分

だった。適当に乱れ撃ちしつつ逃げていく墮天使二人を撃ち落とそうとするも、全弾外してしまふ。

レイナーレが赤龍帝の力で強化させた光の槍を投げ、地面に突き刺しつつ爆発させる。分身達の何人かが吹き飛び、さやかはランサー達と同じ方向へ逃げていく。

「くそっ…全員逃げられた！

しかもあの爆発、急に威力を増したのって…まさか一誠がレイナーレに力を。

さつさと連中を追い！街の中に辿り着く前に正輝の仲間を誰か一人でも取り押さえろ！」

分身達はそのままレイナーレ達の方に走っていき、追っていく。指示をしていた麻紀のポケットから携帯の着信音が鳴り、電話を取る。

『ごめんなさい、麻紀。』

上空からアーシアを探してる最中、この街に配備されている機体が私達を攻撃してきたわ。

特に青い機体が厄介なの…神羅が私たちを守る為に前線で戦ってくれてるけど。

他の場所からも増援が来てて、進む事が出来ない…このままじゃアーシアがあのはぐれ悪魔に連れ去られてしまうわ』

I s t の領域に踏み込んでいる以上、リアス達が狙われるのは分かっていたことだっ

た。久野が用意してくる敵機体は無尽蔵に増やし、何体撃破してもキリがなかった。

「なら今は撤退するしかないね…アシアを取り戻す前に君達が全滅してしまう。」

それだけは避けなくちゃ」

『その方が賢明ね。レイナーレ達の邪魔がなければアシアを連れ戻す事が出来たのに…悔しいわ』

「仕方ないよ。僕もアシアを探すのに尽くすからさ、気を落とさないで欲しい。」

僕もさつき取り逃してしまった。まだアイツらは街の奥には入ってないからもう少し頑張るよ。

君達がい魔を放つても街に配備されてる無人機達にバレるだろうし、奥へ入った時の対策は僕がちゃんと考えがあるから。

アシアの二人組を見つけたら、ちゃんと君達に報告するから！」

『そうね、助かるわ…それなら先に引き上げるわよ』

こうしてリアス達の電話を終えると、麻紀は溜息をつく。

偽物とはいえ赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手のバランストレイカーの禁じ手バランストレイカーを使える神羅がいるのに、それでもリアス達が

苦戦して弱音を吐いている。

嫌な知らせを聞いて気分を悪くした麻紀は、リアス達に撤退するよう伝えた。

（神羅以外は、全く役に立たないじゃないか。

…無人機相手になんて苦戦するか、理解に苦しむよ)

かつてライザー眷属を相手に優位になっていたリアス達だったが、今では代役の神羅だけが1stの領域を進め、リアス・朱乃・子猫の3人は彼に守られているだけの姫様ポジションでお荷物になっている。

彼女達への力不足に呆れを通り越して失望していた。

彼はあの場でレイナーレ達を取り逃したことに苛立ちながらも舌打ちし、今まで明るく気丈に振る舞っていた声が段々と声色を変えて募っていた憎悪を吐き出していく。

「ほんつとうに…誠司を見殺しにして僕を裏切ったリアス・グレモリーと彼女の眷属達だけは最期まで頑張ってくれ。死ぬまでコキ使って、僕の為に命を尽くして貰うからね」

麻紀は死んだ誠司のことを思い出し、腑が煮え繰り返っている。

親友である誠司が死に、裏切った彼女達だけがのうのうと生き残った事に対する怒りと、彼らに対する殺意が全く消えていない事に。

死んだ魚のような目で、彼はそう呟いだ。

「港にいてから…ウチらずつと逃げてばつかだし!!?あれだつて上手くいくかどうか分

かんなかったのに、心臓悪過ぎてマジ最悪っ!!?」

ミッテルトがかなりイラついているが、麻紀達を相手に戦っている余裕はない。士郎とランサー達に合流し、何処に移動するか走りながらも話していく。

「なんとか上手く脱出できたみたいだ…でも何処に移動する? あいつらすぐにでも俺達を追ってくるだろうし、どうするんだ?」

「…上空を見渡したら、逃げた方向に街があったわ。私が前に出て案内するから、そこまですぐ移動しましょ」

「分かった!」

「そこならアイツらが下手に撃つことだって」

背後から数人の走る足音が聞こえている。生身ではない麻紀の分身達は疲れを知らず、すぐさま士郎達を追ってきていた。

「あいつら…まだ俺達を追ってきたのか!?!?」

「しつこいわねっ…!」

遠くから見ると、15人の分身達が士郎達の元へと向かっていく。今度は、防弾チョッキとヘルメットを装着してサブマシンガンを用意していた。

その中の分身達の一人が、麻紀の容姿へと変わり声を出す。

「まさか…あの一誠が、赤龍帝の力を正輝達に与えるとは思わなかったよ。しかもレイ

ナーレ相手に：本当にビックリした。

一誠の大馬鹿が、余計なことをしたせいで囲い込みが失敗になった。どういう方法で、赤龍帝の施しを受けたかは知らない。

でも僕にとつては、そんな事はどうでも良い。

一誠とアーシアが生きているのか、死んでいるのかも然程問題じゃない。

肝心なのは、「君達の誰か一人でも生け捕りにする」ことだ」

そのまま士郎達が走って行くと、街が見える。

麻紀の分身達に背後から追いかけてきており、更に街に近づいたと同時に別の結界が張られていく。

「また結界？？今度は誰が：：！！？」

道路には1stが侵入できないよう雷光2機とサザーランドを5機設置されている。

白兜ことランスロットが一機、転移された。

まだ武器を構えてはいないが結界に侵入した士郎達に対して無人機達は感知し、一斉に体を向けている。

「あれって確か1stの無人機達かつ：：街に配備してたなんて」

「ヤバくないこれ：：ウチらが街に入ろうとしても挟み討ちにされるって」

「でも、ここを突破するしかなさそう：：引き戻しても麻紀の他にリアス達とも相手する

かもしれない」

一難去らず、二難と増えている。

進めば無人機達を止まっても分身達を相手にしなくてはならない。無人機は街に向かおうとするレイナー達に銃を構え、侵入を阻止しようとしてくるだろう。

「それで、このまま無理矢理突破するか？」

後ろにいる分身共を相手するより、正面の無人機なら問題ねえだろ」

「このまま突っ切って無人機を相手にしたら、今度は麻紀が遠距離から撃ってくるわよ。

一か八か、あの無人機と分身達を……ぶつけさせるわ。その為には」

そう言つて、レイナーはさやかの方を見る。

1stの正確ならさやかに対して攻撃することもなく、守ってくれるのではないのか。

それを逆手に取れば、麻紀達に対する襲撃を脱することができる。

「あ、私……？無人機達を上手く利用してつてこと？」

「上手くいけば、追手を翻弄することもできる……このままだと全滅しかねないわ」

「まーたアドリブかぁ……これも失敗したら不味そうだし」

全員無事にこの場を乗り切るには1stがロリコン好きなのを予測し、絶対に無人機達はさやかには狙わないだろうという憶測での賭けをするしかない。

麻紀達を相手に三度も危機に瀕し、しかも即興で考えた案を実行するしかなかった。

「しよーがない……頼まれたからにはアタシも頑張るよ」

さやかだけが止まり、レイピアを投げて麻紀達を陽動していく。反応した分身達は彼女に銃口を向けて撃ち、無人機達はさやかが狙われるのを確認すると共に待機から移動を始めた。

さやかは無人機が来るまで銃弾を回避し続け、到着すると彼女の前に立って身体を盾にし、彼女の護衛に徹していく。

「Istの領域に入ってもないのに狙っただけでダメなのか!? でも他は逃がさない!!」

「みんな、アタシに構わずこのまま進んで!!?」

サザーランド3機がさやかの護衛に徹し、麻紀の分身と交戦する。

仕方なしに分身達が残りのレイナーレと士郎達を追っていく。士郎達が進んでいくと雷光が超電磁式留散弾重砲を発射しようとエネルギーを貯めていく。

レイナーレが光の槍を投げ、士郎は弓矢を投影し、矢を放つ。二人とも大砲の口に向けて飛ばしており、中にある弾が暴発、そのまま雷光を爆発させた。

「へえ、やるじゃねえか……よつと!」

「ランサー!」

他の機体が突破した事で白兜も本格的に動く。

MVSことメーザーバイブレーションソードを右手で取り出し、士郎とランサーに斬り掛かってきた。

「不味いつ…：分断された」

「先に行け、お前ら！」

白兜の後ろには不知火、甘露寺八江、レイナーレ、ミツテルトの4人がいる。四人の前に無頼とサザーランドが何機か転移され、道を塞いでいく。

それと同時に水分身が、道を作る為に何機かしがみついでいく。さやかが魔法で高速移動し、レイナーレ達の元へたどり着いた。

「みんなごめん！」

やっぱり、あいつら抑えるの無理だった！

「さやかや？守ってた機体はどうしたんだ？？」

「もう破壊されてる！爆発しそうだったから、アタシも逃げて来たの！」

「困になったさやかを守っていたサザーランドは、幻想殺し・武器化におけるミサイルランチャーで既に破壊されている。」

麻紀の分身達もまたさやかを追って多数侵入すると、無人機達の追加とタレットまでも転移して迎撃していく。10人の分身がタレットを破壊しようと足止めし、残りの人

数こと25人でレイナーレに狙いを変えた。

「無人機だつてレイナーレなら絶対を守るわけがない…それ以外は足を狙い撃て！」

せめて彼女だけでも連れて行くんだ！」

「あいつらっ！またレイナーレ姉様を!!？」

士郎が無理をして突っ込んでいくが、別方向からサザーランドが新たに4機出現し、スラッシュハーケンを飛ばしたが、ハーケンは士郎に当たらず、地面の食い込んでいく。士郎が勝利すべき黄金の剣を投影し、サザーランドの右足を切断した。バランスを崩し、ランサーの方へ転倒するが、槍で胴体を真つ二つにする。

白兜は他のサザーランドに任せ、士郎達を相手にしないまま、足首にあるランドスピーナーを加速させていく。

白兜の向かった先は

「おい、やめろっ…行くなっ！」

まだそつちにはっ…!!？」

士郎は他のサザーランドを相手に斬り倒していくが、同時に徒労で息切れし、声を枯らしつつも叫ぶ。

甘露寺八江と一緒にいるレイナーレが、麻紀の分身達にも狙われている事に。

「逃げるレイナーレっ!!？あの白い機体も、そつちに向かつてきてる!!？」

「つつ…?」

士郎は精一杯に声を大にして叫び、彼女の耳に聞こえるように届く。振り向けば士郎を追っていたはずの白い機体はレイナーレの元へ駆けつけてきていた。

「なんでこのタイミングでっ…?」

「…レイナーレ、お姉ちゃん!」

レイナーレの近くにいる八江は、焦っている彼女の顔を見て、泣きそうにしている。麻紀の分身達に狙撃されており、白兜はこのまま急接近してくる。

不知火とさやか白兜と麻紀達を止めようと砲撃と剣の投擲で迎撃して行くが、白兜の装甲は駆逐艦の砲弾では傷一つつけられない。麻紀の分身には当たったが、1. 2体倒されたくらいであまり効果がなかった。

「つつ…?硬いつ!」

「レイナーレさん!避けて!」

「このままだと、殺られるっ…!」

だが、白兜の取った行動はレイナーレに背を向けてブレイズルミナスを展開し、分身達の銃撃を凌ぐ。

「えっ…?」

「…なっ、何で無人機がレイナーレを守ってるんだ!!?まさか、もう1stが裏で正輝と

手を組んでたとかじゃないだろうな!?!?

こんなの、清き親友から聞いていた話と違」

分身の一人が言い切る前に白兜は右手にあるソードで、レイナーレに近づいた分身達を全て粉碎した。

「…助けてくれたのか?」

「いや、まだ油断すんな」

ランサーの言った通り、肩の荷を降りるのはまだ早かった。白兜は分身達を撃破すると、再度士郎の方へと向かっていく。

「やっぱりっ…!!?!?今度は士郎さんの方に」

「マジっ…ウチらを襲う気で」

MVSを鞘に納め、士郎一人を相手に高威力のバーストモードのヴァリスに切り替える。

一才の容赦をしない。

「身体は剣で出来ている…っ!!?」

白兜はヴァリスを構え、士郎に狙いを定める。迎撃はできないと判断した士郎は、防御する為^ロに詠唱を唱えつつ右手を突き出した。

「熾^ロ天覆^アう七^イつの円^ア…っ」

アーチャーと同じ防御用宝具を展開しようとしたが、白兜の電源が切れて停止する。構えていたバリスは撃つこともなく、身体はぐったりとし、頭は垂れ下がっていた。

「と、止まったのか……うわっ!?」

他の無人機も停止状態になり、士郎達の緊張が解く。身構えていた士郎の肩の荷が降りて放心したままだったが、突然士郎の携帯電話の音が鳴って驚く。

携帯を取り出すと電話画面には？表示され、電話に出る。

『無事か、衛宮士郎。そこにある白兜と他の無人機の機能は、私が停止させておいた』

「……何で俺の電話番号を？機体を停止させたって、アンター一体」

無特定の無人機には暴走しないよう、ゲフィオンディスプレイが内側に組み込まれている。

その装置によって機動源であるサクラダイトの活動を停止させた。

『話は後だ。機体が再起動する前にあるビルまで移動しろ。そこに辿り着くまでは私の指示に従ってもらう。』

兎に角、私が抑えている間に街の奥まで進め』

「……分かった。

みんな、立てるか？」

「何とか……」まで誰も怪我は負ってないわ」

士郎達は彼の指示通りに、街の奥へと移動していく。道中結界が展開されたが、戦闘にはならず近くには無人機達として利用していたナイトメアフレームが待機している。

大槍と大砲を手にしているグロースターと、刀を持っている無頼が機能を停止したまま配備されている。

「全くウチらに襲ってこない…てゆーか、街の中にまでこんなに用意してるなんて」

「本当なら、奥へ入ろうものなら困んで潰すって事になつてたんでしょうね」

侵入した士郎達に対して全く反応せず、電話をかけてきた男の指示通りに言われた場所へと向かっていく。

12 / 3 深夜23 : 30 街ーマンションビル

『よし、ここまで来ればあの連中も迂闊に入ってこれない。』

1stの罫もこの場所には設置も、傍受されないようにもしておいた。

これで君達と安心して話すことができる』

「助けてくれてありがとう…でも、俺達のためにどうしてここまで」

『…そろそろ明かすでしょう。これから私が乗っている機体を君達の目の前まで移動させる。』

たどり着いたら一時停止するつもりだが、君達は攻撃しないで頂きたい。

私の姿を見て貰えば、自ずと分かるはずだ」

ビル近くにある無頼がゆつくりと移動し、レイナーレ達の前に姿を表していく。先程の無人機とは違い、手を挙げつつ士郎達に敵意がない事を証明する。

士郎達の前で止まると、無頼の中から誰かが降りていく。

「あつ、アンタ……確かワルプルギスの夜との決戦前に訪ねてきた」

「こうして君達に会うのは二度目だったか」

黒いマントと付けている仮面には見覚えがあつた。士郎達が1stの包囲網を突破し、ここに辿り着くまでに助けていた。

「……そいつが、俺達に電話をかけたんだな？」

「助けてくれたんだ。移動してた時に、機体を止めたのもアンタのお陰か」

「その通りだ。深夜での活動は子供が彷徨かないからオート機能で任せている。

だから、私がある程度の停止や起動をさせても咎める事はない。二人は私のことを初見のようだが、ゼロと呼んでもらって結構だ。

君達を助けたのは口頭で伝えなくてはならない事がある。

だから、こうして出向いている」

「それなら俺達の仲間について今何処にいるか知っているか？唐突な転移で他のみんなは散り散りになっているんだ」

「君たちの仲間なら少なくとも鹿目まどか、巴マミ、佐倉杏子の二人は無事なのは確認済みだ。

彼女達はこの領域にいる。たとえ何者かに襲われてもI s t が徹底して守るよう手厚くしてくれるだろう。」

だが、それ以外の詳細を言うことはできない」

I s t が統制している場所にいることも聞いて、この街のどこかに必ずいると知り、同時に友達が無事であることにさやかは安心する。

「3人が無事で良かった……！」

でも、ほむらはまだ確認できてないの？」

「ああ。彼女だけが、未だに見つかっていない」

「そうなんだ……でもほむらなら一人でも何とかなるでしょ」

さやかは残念そうにするが、ほむらのことだからなんとかなると気を取り直す。

「ゼロ……俺達、正輝からの電話でバス停の所まで移動してほしいって事を頼まれているんだ。」

ただ、麻紀達と接触して闇雲に逃げていたから今何処にいるのか分からなくなっている。

何か地図があれば俺達も助かるんだが」

「なら地図も人数分渡すとしよう。」

フェイト・テスタロッサの家は、既に高町なのは家近くに引っ越している。

だが君達がバス停まで辿り着き、正輝が来るのをずっと待ったとしても、それを狙って1stと2ndが襲撃してくる可能性があるからな」

「襲撃って…合流する前に正輝達に携帯で連絡する事ぐらいは」

連絡を傍受されるかもしれないが、正輝と合流出来ないよりはマシだった。

「残念だが…本日の23:00以降に1stは2ndの同盟以外の他の通話機器を遮断されるだろう」

「なんだって!?？」

「だから、1stが解除をするまでは携帯での連絡は不可能になる。他の誰かに携帯電話を貸してもらおうか、なんとか街にある公衆電話を探す事だ。」

それも不可能なら、彼女の念話を頼りに動くか、別の方法を模索しろ」

1stは盗聴ではなく、連絡の遮断を取った。彼にとつては盗聴する必要が無く、仕掛けた罠に引っかかったりする時点で何処の位置にいるか特定できる。

いずれ合流する場所に向かうのだから、そこに待ち伏せの無人機を量産することになる。

ルルーシユの言う通り、どうしても連絡が取りたいのなら良心的な誰かに携帯電話を借りるか、公衆電話を見つけること。

電話先は正輝達にかけても繋がらないから、連絡先が分かる場所とすればなのはの翠屋ぐらいいしか分らない。

「…正輝達との合流は、簡単にはさせてくれないって事ね」

「I s tがこの街に罾を張り巡らせている以上は、可能な限り教える。

今から、絶対に狙わない人物を挙げていく。

まず、美樹さやか」

「ああうん…やっぱりアタシか。

確かに狙ってなかったよ」

「次にミツテルト」

「…え？ウチ、ロリっ子認定されてるの？」

「あと艦娘についてだが、少なくとも幼少はセーフだとアイツは言っていた。

つまり不知火、君も狙う事はないだろう」

久野が用意した無人機達はさやかとミツテルト、不知火を狙おうとせず、あの場で狙っていたのはレイナーレ、衛宮士郎、ランサーの3人だけだった。

「確かに…二人と同じく、無人機達には狙われなかったわね」

「そして、その子も対象外だ」

「…待ちなさいよ、この子は男の子でしょ。」

さっきの機体が急に守ってくれたのは驚いたけれど」

「いいや。」

男の格好をしているが、その子の性別は女だ。

この街にある全無人機には、男か女かの識別反応が備えられている。

そういう事に関して、奴はかなりうるさいからな」

「貴方…本当なの？」

八江はゼロに自分が女である事を明かされ、顔を赤らめている。

「そ、そのっ…はい」

「なるほどね。無人機達が急に守るように行動をとったのはそういう事だったの…」

あの場面で流れ弾に八江が当たるのを危険視し、最優先の標的を衛宮士郎から子供を抱えたレイナーレを狙っている麻紀の分身達に切り替えている。

麻紀が久野と正輝の二人で手を組んでいると誤解していたが、

「それなら、その子を抱えながら移動すれば狙われることも」

「勘違いするな。あの状況下でその少女の命が麻紀の分身達による射撃で危険に晒される確率が高かったら守っただけのこと。」

抱えながら移動するのは手だが、あまり得策ではない。

抱えて街を移動したとしても、久野が設置した結界は貼られる。一定の罨が作動しない代わりに高確率で屋上と空中に無人機を転移させて、上から頭部を狙撃されるだけだ」

「…いずれにしても、さつき名前に挙げた四人以外の私達が移動する時は慎重に動けつてことを心掛けないといけないわね」

「ああ、そういう事になる。」

無人機は敵として攻撃してくる事もあるが、方法によってはさつきみたいに利用することも可能だ。

最後に、正輝達の元に辿り着いたら海鳴市に紛れた偽の民間人にも気をつけるよう警告してほしい。

I s t は結界を民間人と君達で区分けするようシステムに組み込んでいるからと全く気にしていないが、どうも嫌な予感がする」

「…偽りの民間人？一体どういうことだ？」

「私からの助言はここまでだ…これ以上は手を貸している事をI s t に感づかれる。」

本格的に協力するのはまた後になるだろう。

朝になれば、今度は無人機達を相手にしなければならぬだろう。

君達の健闘を祈る」

そう言ってゼロは無頼に乗り、ランドスピナーを回転させつつその場から去っていく。士郎達を助け、1stがが統治している領域での言伝を残して。

「偽りってどういう事なの？」

それとも、最後はただ意味深な事を言ってるだけなのかしら？

…そんなことを正輝に言ったとしても、私みたいに分からない反応するわ」

「でも、1stの側近であるゼロが言うのなら何かしら意味があるんだろう」

「合流してからって言ってたのだから、今考えるのは面倒よ。二つ目は正輝に伝えた後にでも考えましょ…私達は逃げるのに精一杯なのだから」

「…麻紀達の次はあの無人機達、か」

まだ人が乗っていないだけ相手をするのは気が楽だが、1stの仕掛けた罠によってランダムエンカウントみたいに移動毎に何度も遭遇するのを想像すると、それも面倒になる。

ゼロが無人機を停止させて助けたおかげで、街を難なく進む事はできた。このまま麻紀との戦闘後に街を移動すると考えると、レイナーレ達はかなり辛い戦闘を強いられる事になっていただろう。

12 / 4 深夜1:30 屋上ビル

こうして一誠とアーシアを助け、代わりに自分達が狙われる事となっていたものの、1stが監視している領域へと踏み入った事で麻紀の襲撃から身を守ることができた。

さつきみたいに麻紀達が手を出す事は難しいが、麻紀達から無人機の襲撃になるだけで危険だという事に変わりない。

転移して早々に、ひたすらに追手を退いていくばかりで殆どくたびれている。

案内してくれたビルの屋上へと移動し、全員一息つく。

「ああやつと…やつと撒いたね…」

途中からゼロの指示に従って行動した事で麻紀達の手から逃げきれた。なんとか休息できる場所にたどり着けたことで、ゆっくりと地べたに座り込んで休めている。

「この屋上で寝るのか?」

「もうこんな時間よ。このまま移動するのは流石に厳しすぎるわ…私含めてみんな疲れたでしょ。」

電話連絡は…ゼロって男の言うとおり、もうできないみたいね」

レイナーレは携帯の時計画面を全員に見せる。

全員が目覚めた時は9時頃だったのに、このドタバタ騒ぎのせいで

「うっわ…もう深夜1時半」

「そう言われれば、ウチも流石に眠たくなってきた…てゆーかここまで来るのにマジしんどすぎ。」

「ここんとこ頑張りすぎてたし、もうウチは寝るからね」

街を見下ろすと殆どの人が実家やホテルなどに帰宅しているため、今は人が少ない。

久野が用意した結界は常時作動させている。

「下手したら…この海鳴市中に罾が張られてるんじゃないのか？」

「正輝さんと合流するのも、これだとすぐには無理そうですね」

既に街全体が、久野の領域と化している。

その場所に土足で荒らしている敵正義側は見つけ次第殺害し、殺者の楽園の介入も容認せず、全く手を出さないのは中学生以下の少女とこの世界に住む民間人のみ。

危険区域の中心に、レイナーレ達は罾を回避しつつも辛うじて生き残っていた。

「士郎、当面は魔力を温存しておいた方が良さそうね。」

合流する間に襲撃されることも考えたら…」

「…なら、俺はなるべく戦わない方が良いのか？」

「一番厄介なのは結界で閉じ込められて、逃げ場を失うことよ。あと…間違っても緊急事態以外は魔術を酷使しないで頂戴。」

貴方まで倒れたら、一体誰が指揮系統を取るの？ 不知火と彼女のサーヴァントが代わりにやるなら貴方から頼みなさい。

さやかも強いのは確かだけでも、統率はした事はないのだから」

「ど、努力するよ……もし無理そうなら、二人にもお願いしてみる」

この状況下で、結界破壊における士郎の投影魔術はかなり重宝される。とはいえ、士郎の性格柄上いくら忠告しても助けるために魔力を奮発しそうな気がしなくもなかった。

「ああもうつ、色々ありすぎて……本当に疲れたわ……本当に頭痛い。

私も寝るわよ」

「おう、お疲れさん。

黒羽の嬢ちゃん達は特に頑張ってたもんな」

鉢合わせした兵藤一誠とアーシアのこと、麻紀の豹変ぶりと久野の無人機の襲撃。度重なる連戦で、ランサー以外は全員くたびれている。

「何で貴方だけ元気なのよ……」

「俺のやってた事は逃げるだけ逃げて、無人機相手に少し戦ったくらいだからな。戦いを避けてくれたお陰で、戦う余力が十分有り余っている。

それに、他の英霊を知ってるならこの程度で疲弊するほど柔じゃないことぐらい知っ

てんだろ？

俺が外を見張ってるからお前らはもう寝とけ」

今すぐに接触した麻紀達のことを正輝達に知らせなければならなかったが、I s t が携帯にハッキングして盗聴される可能性が高い。

港に転移されてから休む間もなく、深い眠りについた。

12 / 3 7 : 30 ビルの屋上

日の光が差しても温度は低く、特に冬の季節で外で眠るというのは体に堪える。既にレイナーレとミツテルトの身体には、さやかと不知火が既に引っ付いていた。

二人とも墮天使の羽毛を拝借することで、寒さを凌いでいる。ミツテルトにはまだ眠ったままで不知火の身体を暖めており、レイナーレはさやかの寝息で起き上がっていない。

「んっ…あれ？レイナーレさん」

「ちよつと寝苦しいんだけれど…私達の羽を毛布代わりにしてるわよね」

「あ、ごめんなさい。」

だって本当に寒いんだもん。

そもそも私達、防寒着なんて持って来てないし……

この寒い季節に、二人は身体を震わせていた。

人間よりも丈夫である悪魔や墮天使は、温度差に影響があってもどうにかできていた。

「貴方達ねえ。士郎に頼んだら寝袋とか用意して……ああそうね、ごめんなさい。」

そう、だったわね」

レイナーレが寝ぼけていたのか、士郎には襲撃に備えて魔力を節約しなければいけないと忠告したのを思い出した。

防寒の方法がない二人にとって、レイナーレ達の羽は布団のように心地の良いものだった。

「しょうがないわ……もう少し寝て良いわ。」

全員起き上がってから動くわよ」

「はい」

全員が起き上がるまでの間、午前中ずっとビルの屋上で眠りつつ疲労が完全に回復するまで寝ころんでいく。

——正輝達と合流するには、まだ時間がかかりそうだ。

3 話思慮分別（レイナーレ・士郎ルート）

12 / 3 8 : 30 ビル屋上

「これで、全員起きたみたいだな」

「ふう…結構寛いじゃったね」

レイナーレ達一同は、全員起き上がっていく。

レイナーレとランサーの二人は一番早く起き、偵察も兼ねて近くのコンビニに向かい人数分の弁当を買いに行っている。子供を狙わないさやかと不知火に行かせた方が無人機に襲われることなく安全に買いに行けるが、警官に職質されかねないことも考えて行かせなかった。

残りのメンバーは携帯を持っている人は電源をつけて、正輝に連絡が繋がるかを確認していた。

不知火は携帯を所持しておらず、体育座りでみんなが操作しているのをボーッと眺めている。

「やっぱりダメっす…」

「……本当にゼロの言う通りになったな。」

他のみんなも一緒みたいだし」

八江がミツテルトの携帯を横から見えていくが、ゼロが言った通りにIstの能力によつて電話やメールによる連絡ができないようにされている。

「…俺達の連絡を盗聴してくるかと思つてたけど、連絡手段そのものを絶つてくるなんてな」

これで正義側に所属している者を対象に携帯も繋がることはできなくなっている。連絡をするにも、さやかかの念話を頼りに動くしかなかった。

「待たせたな。近くのコンビニで人数分の弁当、買つておいたぞ」

「どれが好みが分からないから、適当に取りなさい」

青のシャツの格好になっているランサーと私服のレイナーレ、不知火の3人がレジ袋を持ちつつ、袋から弁当を取り出していく。取り出した弁当はそばろ、幕の内、カレーと様々な物を用意して地面に置いた。

円で囲んで、弁当を食べながら話していく。

「それで、バス停にはどうやって行くんだ？」

地図は貰つたけど、街から目的地に辿り着くまでだと遠くなるんじゃないのか？」

「ここからは無人機も私達を襲ってくるでしょ。戦力だと心許なくて難しいのは、他のみんなもそう思ってるよね」

「一誠とアーシアのことは、もう十分守ったわ。寧ろ感謝して貰いたいくらいよ」

「…二人とも、無事だと良いけど」

「もう気遣う余裕はしないっすよ…もうあんな心臓に悪い場面は懲り懲りっす」

少しレイナールは昨日のことで考え事をしながらも弁当を食べる箸を止めて、口を開いた。

「それと…一誠とアーシアに会ったこと、麻紀のことなのだけど、暫くの間はこのメンバーだけ黙っておきましょう。」

この揉め事が終わってからのか、やむ終えない事情で話すまでは他言無用よ」

「えっ…言わなくて大丈夫なの!!?」

「正輝に黙ってて良いのか?」

「…電話の時に正輝に何もなかったことを嘘ついて関与したこと、逃したことも言うつもり?」

あの時黙ってたのは私達が戻って報告したところで、今の正輝は絶対にパンクしているからよ。

…余計混乱させるだけだわ」

同盟を組んだ正輝の姉と竹成の二人がまだ来ていないのなら、余計正輝の頭を抱えるのは目に見えている。

「あの二人とはもう会うこともないもの…お互い、その方が絶対に良いって思ってる」
「今更言うのもなんだけど、本当に放っておいて良いのか？」

あいつらには行くあてだって」

「さあね。野垂れ死ぬか…適当に誰かが拾ってくれるんじゃないの？」

それに、時空管理局っていう組織ってたでしょ。少なくとも面識もあつたんだから、二人の保護くらいはしてくれるんじゃないの？

私達だって、敵の懐に入っているんだから心配してる余裕なんてない。

敵がリアス達だけじゃないってことも」

「敵がリアス達だけだったら、こんなに悩む事は無かつたのにな。もう面倒臭いことに…いや、そうだな。もうなってるんだつたな」

仲間だったはずの一誠が逃げ出し、記憶改竄によって追放された事も。街に無人機が配備されている以外にも、レイナーレ達は状況が完全に把握しきれていない。

「もしかしたら最悪結界を解除させて…海鳴市全域を戦場にしても構わないんじゃない

のかしら」

「流石に大袈裟過ぎないか？」

実行したら表沙汰になって大々的にニュースで取り上げられるだろ。

そもそも、そんなこと正輝以外の他の人達だつて止める。

上条達だつて絶対させないに」

「…眷属ですらあんな感じだったのに、当麻達が無事だつて保証がどこにあるの？」

墮天使だけじゃない、悪魔にだつて記憶操作ができるのだから強引な方法で表沙汰にさせないでしょ」

「そう言えばそうだったな…」

麻紀に逆らつたことで、一誠と同じように追われる立場になつている。士郎は暗雲な気持ちになりつつも、当麻達のことでも何できない。

「…上条さん達、本当に大丈夫なんだろう」

「そうだな…」

今までの麻紀とは全くかけ離れたことをしていることに、士郎は無事を祈るしかなかった。

「…食べ終えたら、移動しますか？」

「そうね」

「昨晚、ゼロが止めてたあの無人機達を…今度は正輝達と合流するまでは戦わないといけないのか」

こうして全員がビルを出て、路地裏からオフィス街に移動する。

久野のカメラやセンサーが外見で判断してるなら市民に紛れつつ、変装して戦闘を回避することもできただろう。

そんな誤魔化しでは通用しないのだから、進むにも戦うのは避けられない。

「…続々と出てきたわね」

「敵のお出ましか」

感知したか、結界が展開される。

久野の持つN M Fと無人の戦闘ヘリが出現し、レイナーレ達を行手を阻んだ。

「避けるっ!」

まず、サザードとグラスゴーが前に出て、スラツシユハーケンを飛ばす。八江をさやかが抱え、それ以外は各々の武器を手に取りつつ回避する。

「ランサー!」

「へっ、任せな」

不知火の指示にランサーは青タイツの格好と赤槍を出現させ、無人機が撃ってくる弾を軽々と走って回避する。タレットによる背後からの狙撃も、矢避けの加護で躲してい

く。

「ま、数だけはいみてえだな」

銃撃を仕掛ける前にランサーが突撃し、槍で銃器を破壊する。

「沈めっ!」

「ウチも反撃するよっ!」

不知火は大砲を展開し、戦闘へりに街に配置されたタレットに狙いを定めて砲弾を命中する。続いてミッテルトが光の槍を投擲し、線香花火の如く前方に針を散りばめさせる。さやかは水分身で無人機を水浸しにさせ、故障にしようとする。

しかし、

「やっぱりっ…ゼロの言う通り、水云々以前に私達の攻撃が効いてない?」

「そうみたいですね」

三人の攻撃は、無傷だった。

無人機達が不知火やミッテルト、さやかに攻撃しなかったが、攻撃自体が当たっても無傷になる代わりに、3人の攻撃が無人機達に対して全く通らなかった。現に士郎とランサー、レイナーレの三人だけが集中的に狙われている。

今度は小型のドローンが数機出現し、ランサーと士郎に自爆特攻を仕掛けた。

「トリース・オン
投影開始つー工程完了、全投影待機。

停止解凍、全投影連続層写!!？」

士郎はレイナーレの注意通りに宝具の投影を控えつつ、無名の短剣を飛ばして破壊する。戦闘ヘリを破壊し、ドローンを近づけさせないようにする。

後方にいたドローンは方向転換し、ランサーの方へ飛ぶ。槍の連続突きは全て命中し、爆発は不発のまま破壊された。

残りのドローンを薙ぎ払い、別方向へ飛ばすと戦車やサザーランドに衝突。

近くにいた機体も含めて爆発した。

その一方で、レイナーレは苦戦を強いられている。グロースターとヴィンセント、ナイトポリスの3機に囲まれ、光の壁を展開して身を守っていた。

光の槍を投擲し、まずグロースターを破壊しようとするが、前に出たナイトポリスの盾で防がれてしまう。もう一度槍を作り、今度は投げて爆破させたが3機とも傷一つ付かない。

レイナーレの光の槍が効かないのは、光属性の耐性が組み込まれていた。「飛行してるのもいるわねっ。

槍もそんなに効かないし、厄介ねっ……！」

「今助けに行くー！」

攻撃があまり通用せず、空中に逃げようとした所に罠として設置されたケイオス爆雷が作動。

レイナーレの頭上から2、3個出現して、針を飛ばす。さやかの水分身が、身を挺してレイナーレを庇って助けた。

分身自体には罠と敵機体が反応し、連射していく。

「アタシがフオローするから、罠のことは気にせず戦ってー！」
「助かるわっ！」

グロースターは槍を振り回し、ナイトポリスは乱射し続ける。

空にいるヴィンセントも、分身達が攪乱して身動きが取れない。さやかが水分身達で陽動し。その間にレイナーレは光の槍の伸張を伸ばしつつ、矛先をより鋭くさせる。

「これなら、どうっ!!?」

光属性の耐性であり効かないのならと、力押しでナイトポリスとグロースターを貫く。ヴィンセントは水分身で一斉に畳みかけ、土郎の弓がヒビに突き刺さったと同時に壊れた幻想で爆破した。

「おう、やるじゃねえか。

「この調子で次に進むぞ」

こうして街を移動する度に無人機が襲いかかり、オフィス街を出て、目印のバス停へと向かう。八江は常にさやかかミッテルトに抱えられて避難しつつ、ランサーとレイナーレが前線、士郎が温存して戦い続けていた。

12/4 18:30 公園近く

「…俺達のいる場所がここなら、フェイト達の家近くにあるバス停まではもう少しいだ。」

次の日にはなんとか合流できそうかもな」

「なんか、波乱の2日だったね」

「フラグになりそうだから…そういうのは到着してから言ったほうがいいっすよ。」

言ったそばから敵が出てきたら、ほんっと洒落にならないし」

さやかかの言葉に、ミッテルトがツッコむ。

昨日は単に寝ただけで、完全に疲労が取れたわけではない。ずっと戦ってヘトヘトになりながらも、士郎達は街の中を移動していた。

「…あとは正輝に連絡が取れたら良いんだけど」

「止めておいた方が良いわよ。気づかれたら、さつきよりも多勢で来るかもしれないのだから…」

ランサーは平気な顔をしつつまだ戦える感じだったが、それ以外は疲れた顔をしてい

る。艦娘と墮天使でも、長いこと移動すると気が減入っていた。

敵との接触で何度も境界が張られ、元に戻つての繰り返しが発生し、それでも前に進もうとしている。

「八江ちゃん、大丈夫？」

「はい……なんとか」

特に子供の八江には、無人機以外にも誰かに襲われることに気が立って殆ど元気がなくなつた。

「……ちよつとお金確認するから、海鳴市の地図見せなさい」

「ああ、分かつたよ」

歩きながらも士郎は地図を取り出し、レイナーレが財布を見て予備金を確認する。二人が話しているのを気になつたランサーが、二人に声かけて聞くと、まあ良いんじゃないかと言つて容認した。

「みんな、足を止めて聞いてくれ」

「え、何？」

士郎が止めるように、声をかけた。

「近くのビジネスホテルで泊まりましょう。合流場所には近づいてはいるけど、今日中に無理して到着するのは余計危険よ」

「…え、ウチらつて泊まるお金は持つてるの？」

「無いんだつたら、ホテルに泊まるなんて提案はしないわ…お金の管理が凜・士郎だけじゃなくて私にも正輝に管理を任されてたから、人数分は泊まれる。」

今日くらい、お金を使ってゆつくりしても問題なさそうだし、緊急事態なのだから正輝も納得してくれると思うの。

それでも釈然としなかつたら、士郎が顔を立ててくれるし、もしホテル代でお金かかり過ぎたら…その時は凜と正輝の説得をよろしく頼むわね？」

「この状況を話したら、遠坂だつて納得してくれる」

「え、まじ？」

「やったああ！お風呂に入れるーっ!!？」

「ウチも疲れたあつ…足重いし、ほんとダルかった」

「…貴方達二人は、そんなに戦つてないでしょ」

疲れ顔だったさやかとミツテルトは歓喜へと変り、レイナーレは二人に呆れていた。昨日のように野宿することなく、ちゃんとした宿泊所に泊まれることに喜ぶ。

1 2 / 4 1 8 : 3 0 ホテル

早速ホテルのメインロビーに入り、レイナーレと土郎の二人がチェックインの手続きをする。ミッテルトはやつと休めると楽観的になっているが、さやかは嬉しい反面、心配そうに念話をする。

『あの、レイナーレさん。もう入ってから言うのも何だけどさ…良かったの？だって私達のことを監視カメラで見られたりでもしたら』

『それこそ、ホテルで待ち伏せされて襲撃を受けてるわ』

『ご、ごめん…気になってて。』

それなら、お言葉に甘えて休むよ』

さやかは気まずそうになり、受付から二つの鍵を受け取った。レイナーレは鍵を土郎に渡し、エレベーターに乗る。

同じ4階と隣同士の部屋に決まり、部屋割りはレイナーレ・ミッテルト、土郎・ランサー・不知火・さやか・八江の二部屋に分け、一泊2日で泊まることになった。

12/4 20:00 4階

土郎はドアを2回ノックし、レイナーレがドアを開ける。

「…入って良いか？」

「どうぞ。もう風呂は済ませたわ」

「いや、風呂は済ませたって…ちゃんとした格好をしてもらわないと」

「いざとなればあの戦闘服に切り替えれるわ」

レイナーレの格好はバスローブを着ており、士郎を部屋に入れる。

「そういう問題じゃ…もう良いか。」

ミツテルトは一緒じゃないのか？

「さやかと八江ちゃんのところに行くって言って、遊びに行ってるわよ」

士郎は目のやり場に困り、戸惑いながらも諦めた。

「ホテルに入るのすら危なかっただろうし、活動的に動くのも館内の監視カメラで見られたりでもしたら」

「それ、さやかにも念話で聞かれたわよ。」

予約しようとする際に、とつくにホテル前で待ち構えられて襲撃を受けてるって返答したわよ。

港に着いてからずっと逃げて戦っての繰り返しばかりで、みんな疲れが溜まってる…貴方も、私も、全員が減入ってるわ。

今やらないで、いつガス抜きするのよ。

また野宿なんてしたら、全員のフラストレーションが貯まるわよ。

特に私の顔を立ててもミツテルトなんかかなり抑圧されて、爆発しかけていたんだも

の。ここまで辿り着いたのも、さやかと不知火は無人機の陽動に協力してくれた功労者なんだから。

八江つて子を庇いながら戦うのだから、その子以外が倒れたら守りようがないでしょう？

私だつて体を勞りたかつたし」

「それは分かるけど。もし結界が作動して、道通りだけじゃなくホテルの中に襲いかかつてきたら」

「なつたらなつたで、なるようになるしかないわ。ホテル泊まるのだから、疲弊して会つたにしても待ち伏せされるかもしれないでしょ？

元々、辿り着くのだからグレモリーの娘達に会つたせいで遠回りするしかなくなつたんじゃない。

それで、ここに來た用事つて何なの？」

最初の判断が早ければ、リアス達と接触する前に立ち去る事ぐらいはできただろう。アーシアは生き残り、一誠は神羅に始末されることになるが、転移されたばかりのレイナーレ達にとっては彼らの内情など知つた事ではない。

「ああ、正輝達との合流のことで話がしたかつたんだ」

「…その話は明日の朝にしなさいよ。私達にできることなんて回復に専念して、次の日

の朝に万全の策を考えるしかないわ」

「そんなに呑気で良いのか？」

「今日できることは、早く寝て休むことよ」

レイナーレが呆れながら、士郎に言う。

「私達は麻紀の内情を知って、それでも正輝達の元へ辿り着けるかどうかも分からない……下手をしたら、この中の誰かが死ぬかもしれないよ。」

八江つて子が側にいたことと、ゼロが私達を助けてもらってなかったら、少なくとも私が挟み撃ちの形で撃ち殺されて死んでいたわ。

或いはお人好しの誰かが庇って瀕死になってた可能性だっただけかもしれない。

私達は都合良く無事に逃げ切れたの」

麻紀が人質で使った子供を連れてきてしまったとはいえ都合良く無人機が助けたことも、ゼロによる支援のおかげでこうして運良く生き残っている。

「…そんな顔してまだ、私の判断である二人を生かしたことが気になってるの？」

「いや、そのっ……」

「顔に出てる」

「い、い、いめん。」

なあ……何で一誠達を生かすようなことにしたんだ？ ミッテルトだって納得してな

かつたろ？」

レイナーレが憂鬱そうに士郎を見つめ、開けていたカーテンを閉じつつ身の回りの片付けをしながら質問していく。

「そうね…折角だから、当ててみて頂戴？」

「あ、当てるって…それじゃあ二人が不遇だったから同情して情けをかけたのかなのか？」

「違う」

「なら、麻紀達に狙われていたから俺達とあの二人で分断させて敢えて泳がせたとか？」

「少し違うわ」

レイナーレは目を逸らし、瞳を閉じてため息をつく。もし彼女が利己的で考えていたのだとしたら後者は当っていたかもしれないが、反応からして期待外れの回答に呆れていた。

「もういいわ。聞いた私がバカだった…」

「俺もレイナーレ達がいづくとしたらそれくらいしかないんじゃないと思うだろ？」

それじゃあ、レイナーレはあの時何がしたかったんだ？」

士郎は納得してない様子で、レイナーレに疑問を投げた。片付けを終えた彼女は席に座り、紅茶を少し飲む。

「…正輝からはある程度私とミツテルトのことを知らされてるんでしょ？私がアーシアの神器を引き抜くのにも失敗して、仲間二人も殺されたことも」

「それはまあ…あいつらと敵対してるって事は俺達も知ってるけど」

悪魔と墮天使における敵対意識と、見下した連中を見返すためにアーシアの持つ神器を奪つてたこと。しかし、儀式を始める前に襲撃されたことでアーシアの神器を奪うことは失敗した。

正輝が責任持つてレイナーレ達を保護し、それが原因で同じ正義側同士との抗争となり、守られてる事に肩身が狭い思いをしていた事も。

「…少なくとも、あの場で私を襲う機会はいつでもあったわ。それでも側にいたランサーって人が刺してたかもしれないなかったけれど」

「…アイツも、俺達がここにいてることがバレたなら始末した方が良くって言ったし」

「逆も然りよ。八江って子供が私か一誠のどちらかが殺したことを見て…その現場を見られたら、彼とその女の子は確実に重度のパニックを引き起こす。

ただでさえ情緒不安定な上に、二人の子供まで事故といつても手にかけてようとしたのだから。

暴れたとなると、麻紀達に気付かれるでしょ？」

「…それなら、あの二人に同情したってのはあながち間違いなかったんじゃない」

「たとえ殺したとして、終わった後にあの状況通りの事が明るみになったら、どうなるかことぐらい分かるでしょ。」

「確実に揉めるに決まってるわ」

レイナーレは殺した後のことをちゃんと考え、配慮していた。対して、ミッテルトは殺す事を優先させていたが、今までのことがあつてか野放しにしてはいけないと警鐘を鳴らしていた。

「不遇だったから同情したってのは違うわよ。確かにアジアには謝ったから同情したって風に見えていたのでしょうけど…少なくとも貴方達にも私達のことでも迷惑をかけてたからね」

「迷惑って俺達にか…？それは、正輝がレイナーレ達を入れても良いって判断をしたからで」

「知ってるわ。正輝はリアス達を引き入れた麻紀と敵対するって分かってたから、船に入れた。」

そもその話、私達が船に乗っていないければリアス達と敵対する必要はなかった。麻紀と正輝の価値基準が相反してたとしても、敵意を以って戦うことも。

私達が正輝に助けられたとしても、心のどこかで少しは人間を見下してたこともね」「レイナーレとミツテルトが見下してたのは…俺と遠坂や、まどか達と響達に対してもか？

それはっ、当初はそんな気はしてたけど」

「ええ…でも絶対に口には出すことなんてなかった。横柄な態度なんてしたら、助けてもらった正輝だけじゃなくてセイバー、アーチャーの三人に警告されていたのだから」
アーシアの神器奪取までの改心のない態度で のまま触れ合おうとするなら、正輝は心底幻滅して二人を見限っていた。至高の堕天使になるために、アーシアの神器を奪うのが不可能なら船の掌握して力を得ようなんてことをすれば既に消されていた。

達成したとしても、憤慨した彼の姉が二人を消しかけるだろう。

「でも…やっぱりさつき言ったようにレイナーレ達が船に連れて行かなかつたとしても…正輝と麻紀の意見が合わないのなら。」

結局、アイツらと揉めるのは時間の問題だっただろ」

「些細な喧嘩をしたところで、敵組織を討伐するって目的は一緒なのよ。命の奪い合いをするような一線を超えようとしたら、貴方達のような暴走を止めなきゃいけない仲介役が必要でしょ？

でも結局、協力とか利害の一致をするどころか…互いに憎み合う形になってしまっ

た。

そして、私達が船にいて、襲われたことで正輝の怒りを買った。彼が麻紀達全員を本気で潰そうと動いたことと、リアスと眷属が口先だけしか何もしてくれなかった無能な麻紀を裏切ったことも。

それらを踏まえて、今に至るわ……大元の原因は至高の墮天使として力を欲していた私
が、事の始まりだったの」

「……」

「私も、ミッテルトも墮天使だから、今まで墮天使としての勤めとして殺してきたのが、勝てる相手だからって調子に乗って見下していただけ……自分の力を過大評価してたのだから尚更よね。」

……リアス達に消された方が、正輝と彼が連れてきた仲間に来てこんな苦悩を背負わせることもなかったかもしれないわ」

「ちよつと待ってくれっ!?」

アイツはそんなこと絶対に思っていない!

船にいるみんなだって!!?」

「取り返しのつかない事になったら、本当にそう言い切れるの?」

レイナーレ達に加担した敵だということで、一誠達はまどか達や響達にも飛び火していたかもしれない。彼女らにも襲撃され、被害を受けてしまったのなら彼らと敵対しているレイナーレ達にも怒りの矛先を向けられることになる。

さっきの兵藤一誠の生殺与奪の件も、本当に判断を見誤れば正輝と響以外にも、仲間内で揉める可能性は無いとは限らない。

「またグレモリー家が画策して私達を嵌めようとしてたのなら、あの場で二人を殺さなきゃいけないかった。」

でも、そうじゃなかったから逃したの」

「…アーシアに謝ったのは？」

「半分は私の利己的な事であの子を利用していたこと…もう半分はあの子が許す許さないにしても、私自身が侮蔑して嘲笑っていた頃のままだと前へ進めないから。」

助けてくれた正輝が、最悪私達だけでも味方になる為に。

だから、あの子に謝ったの」

「……そうか、そういう事だったんだな」

あの状況を思い返すと色々考えてたんだなどと、士郎は頷く。

どうしてレイナーレが敵だった二人を見逃したのかを。ミッテルトも終始一誠達を

許せなかったが、それでもレイナーレの言うことを聞き、かつ見損なうことはなかった。「こういうのもなんだけど……さ。」

俺からは船に入ってから成長してると思うよ、二人とも……少し、理解はしたよ」

「正輝があの場合にいたら、真っ先に殺してたかもしれないわ。そうなったら、もう私だけじゃ止めようがないわ」

その言葉に、試練編の時に見せた正輝の憤慨した表情を想像すると、士郎も苦い顔をしつつ同意する。まあアイツならやるかもしれないと。

蘇生の機能があつたとしても、試練編でレイナーレやミツテルトの不意を狙つて殺した。

特に加害者だつた一誠に対しては、事情があつても聞く耳持たないだろう。

「それと、死んでも良いなんて絶対に言っちゃダメだからな……特に正輝には」
「分かつてる」

レイナーレはコップの取っ手を手に取り、少し口にする。

「話が長かつたわね……紅茶、少し冷めちゃった」

「ごめん。それ、温めるのか？」

「アイステイーにするから良いわ」

レイナーレは立ち上がると冷蔵庫の氷を取り出し、紅茶の中に入れてつつ時間を見る。既に10時に回っており、寝る時間になっていた。

「…そろそろミツテルトもこっちの部屋に戻ってくるでしょうし。

飲み切ったら、もう寝るつもりよ。

正輝達との合流に成功するとは限らないから、貴方達も早めに寝なさいよ」

「そうだな」

士郎は部屋を出て行く前に、レイナーレの方を見る。

「そのさ…正輝は、自分のことについて俺達に話すことはそんなにしないからさ。隠し事も多いし、俺達にも分からない事だつてあるけど…正輝だつて2人を信頼した上で側にしたんだ。

理解者がいてくれて良かったと思ってるよ」

「そう…彼がそう思ってくれてるなら」

そう言つて士郎は、部屋を出てようと扉のドアノブに手を伸ばした。

「…おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

さやか・ミツテルト・八江・不知火・ランサーは士郎達が話している間に少し遊んでいる。

「そつか…訳もわからず、気づいたら船に入れられたんだね」

「お母さん、お姉ちゃん…」

「ちーつす。レイナーレ姉様から許可もらって遊びに来たって…え、何事？」

八江が何故麻紀の船に入れられたかを聞き、盾代わりにされた挙句、訳の分からない見知らぬ世界へ転移され、泣きそうになっていた。

「もう嫌だよっ…」

「…ティツシュ取つてきます」

鼻水を啜り、目の周りが赤くなっていた。ミツテルトも泣いていた八江を見て、来たばかりで状況が良くわかってない。

不知火は八江にティツシュ箱を手渡し、八江は軽く頭を下げた受け取る。

「えーつと…そうだ！」

テレビだけじゃつまらないだろうし、ホテルの人に貸してもらったんだー！

士郎さんに投影魔術で作ったら、魔力を無駄に使わせるなって怒られそうだし。

せつかくだからみんなで遊ぼうよ！

ランサーさんも来て！

八江ちゃんもいつしよにやろう！

「…え、トランプっすか？

別に良いけど、10時までっすよ」

「俺はブラックジャックのディーラーくらいなら、参加してもいいぜ」

さやかかの提案を聞いてぞろぞろと集まるが、八江はまだ暗い気持ちになっている。

「今は、したくない…」

「八江ちゃんは見ただけで良いよ？

そんな気分じゃないだろうし、参加したい時は言っつてね」

「うん…」

八江は体育座りしつつ、3人が遊んでいるのを眺めていた。

7並べ（一回）

ミツテルト「ちよっ出せない！

2のハート出していないの誰っすか!?!?」（脱落）

不知火「…さやかさん、目が泳いでる」

ミッテルト「なら絶対さやかっスよね!!?」

真つ白になっているさやか「アタシ、モウ出セナイ」(脱落)

ミッテルト「え?じゃあ誰が」

不知火(何も言わずに2のハートを出す)

さやか「不知火ちゃん!!?」

ミッテルト「あ、生き返った」

7並べ(2回目)

さやか「::5のダイヤ、隠してるでしょ」

ミッテルト「ウチ持っていないよ」

不知火「私も持ってません」

さやか「嘘つけ!

誰も持っていないこと無いでしょ!」脱落

ミッテルト「ソッスねー(そう言ってる5のダイヤを出す)」

さやか「やっぱり持ってたじゃん!!?」

ブラックジャック(1・2回)

ランサー「おう、それじゃあカードを配るからな」

不知火「あつ…」

さやか「あー引くんじゃなかったね不知火さん…それじゃ、あたしは引いて。

あ、超えちやつたよ」

ミツテルト「アツハハハ！これでウチとさやか以外は全員自滅してるっす！そのままキープしとけば良かったのに、17留めてるウチの一人勝t…」

ランサー「19だ」

ミツテルト「なんでえええええっ!??!」

2 回戦目

八江「じ、19」

ミツテルト「ウチは20で！」

さやか「あたしは、17でキープ！」

ランサー「21つと」

ミツテルト・さやか「ちよつとランサー（さん）、強すぎるって!!?!」

八江「ふふっ…」

一・二回ともオーダーをしているランサーの一人勝ちで終わった。遊んでいるのを見て、暗い表情だった八江が少し笑っていた。

「…八江ちゃんも、一緒にしたい？」

それともまだ眺めとく？」

「ちよつとだけなら…やりたい」

さやかがもう一度誘い、八江も参加して楽しむ。前にやっていた修学旅行と同じ気分のままトラップで盛り上がり、寝る時間までは呑気に楽しく遊んでいたのだった。

4 話急がば回れ（レイナーレ・士郎ルート）

12 / 4 8 : 00

ホテルにある朝のバイキングを済ませ、全員でレイナーレの部屋へと移動していた。
「ホテルの朝食、結構おいしかったね」

「そうね、八江ちゃんとミッテルトの二人と一緒にケーキお代わりしてたものね」

八江、ミッテルトときやかかの3人は美味しい物欲しさで色々と皿に盛っていたことを思い出し、恥ずかしげに目を逸らす。

「まあ…休む為に宿泊したんだから、それくらいのことでは気にしないわよ」

「あ、うんっ。そうだったね」

レイナーレの部屋に到着すると、海鳴市の地図を持っている士郎が広げて机に置く。

「それじゃあ本題に入るわよ。私達が今いるのはこのホテルで、ここからフェイトの家近くにあるバス停まで行くことになるのだけど」

「…またさつきみたいのに、戦うことになるんだらうな」

「昨日と同じように少しづつ距離を詰めて、別のところでもう一泊するわ」

今回も、移動中での戦闘は避けられない。

バス停に向かうだけでも戦闘と罠を突破しなくてはならない。仮に強引に合流場所へ向かい、正輝達に合流すると必らず邪魔が入る。

何連戦も戦えば疲弊し、合流するまでの持久戦のこと、その上で八江を庇いつつ戦うとなれば長時間待ち合わせ場所に留まることはできない。

「あ、そうだつ……アタシからも言わなきゃいけないことがあつたんだ!!？」
「何か言い忘れたことがあるの?」

「土郎さん、ちよつとマーカーある!?!？」

さやかは土郎からマーカーを貸してもらい、そのまま地図に記入していく。

「えつとね……これをこうしてつと。」

宿泊中に水分身を偵察に向かわせたりしたんだ。今書いたところは私が偵察に向かわせた場所だよ。

蛇口とか、マンホールの下水道から移動してる」

「……匂いとかつくくんじやないの?下水道から通つたのなら、当然汚れてるでしょ」
「匂いと汚れとか不浄物は魔法でどうにかしてくれるつて。」

あと、下水道には罠は貼られてなかつたよ」

「そんな所まで調べる事ができるんですか……」

さやかがしてやったって顔をし、聞いていたレイナーレは微妙な反応をする。

「調べるも何も…不衛生過ぎて、通る人もいないから罫を張らなかつたんじゃないの？」
「そうとも限らねえぞ。」

通路どころか根城にする奴だっているからな」

「へえ、そんな人もいるんだ…」

ランサーや士郎達のような聖杯戦争の知識では大抵の魔術師は直接的な戦闘を避け、使い魔を使役しつつ魔力を温存する為の隠れ蓑を探し、拠点にする。大きな霊脈の上から市内全体の間から魔力を集める寺があれば、教会のような霊的なものから防ぐ結果もある。

対して下水道はそのどちらでもないが、人目につかず隠れる場所としては使われ、更には拠点にしやすいよう魔術で改変される事もある。

「下水道に罫が張られてないってことは、罫を張った張本人もそこにいないの？」

「あんなデカブツを動かせるとしたら、広くねえと無理だろ。タレットやら小型ドローンとか、人型の兵器を使ってんならともかく戦闘ヘリやら、大型無人機のデカブツを何十機か投入してばかりだからな。」

下水道に罫を張ってねえのは、単に俺達がその場所を通るなんて考えずに、街中で十

分だと考えてなかったとかなんじゃねえのか？」

「機械に指示送るにも電波が通らなかったとか？」

場所によってはさ、電波が繋がりにくいとか」

巨体ロボばかりが襲ってきているが、罨や小型の機体を下水道に設置されてもおかしくない。

I s t がもし機械を電波で操作のなら、後者が正解だろう。

しかし、今は無人機を仕向けた人を探すのが優先ではない。

「その話は、また後にしなさい。」

それで、貴方が向かわせた水分身達は正輝と接触することができたの？」

「うーんっ…3人くらい行かせただけど、昨日より全く容赦しないっていうか。」

全然通らせてもらえないんだ」

「いくら少女でも…分身は例外ってことね」

「まあそうなっちゃうかーって思ったよ。分身が大丈夫なら、正輝さんでも同じ方法をしそうだし」

(つーことは、下手したらルーン魔術を使った探索も、探知されてたってわけか)

さやかが笑って話しているのをランサーは聞きながら、そう思った。これで何処の場所でも、姿を隠しても気付かれてしまうことが判明した。

「分身が無理なら、変装のような外見を装ったりするのも不可能みたいね」

「それも試したよ。でも、すぐバレてさ…上空からビーム砲とか、掌から赤い波動を放つ特殊な機体まで出てきたし。」

ホント幼女以外の敵は躊躇なかったなー。

ハハっ…とにかく、私達が待ち合わせにしてるバス停が中心として…バス停の東と北側へ私達が進むんなら近道できるけど、かなり危険な無人機と罠が仕込まれてるから通らないことを勧めるよ」

「うげっ…マジで容赦無ねーっスね…」

遠い目をしながら気力のない声で偵察結果を報告する。1stのシステムが本人ではなく分身だと認識し、躊躇なく攻撃するように組み込まれている。

街中に罠を仕掛けている1stが、容姿を隠したり、欺くことを許さずに徹底して調べている。

「逆に、正輝達のいるマンション周辺に強力な機体が設置されているんじゃないのか?」
「そうかもしれないわ。」

さやかの話が本当なら、家に近づくだけでも大変そうね。今日のところは、なるべく近くまで進むことを考えないといけない。

ただ、どうにか接触して連絡できるようになるまで近づけるかが…」

「待ってくれ。さやかちゃんだけじゃなくて、俺からもみんなに伝えなくちゃいけないことがある。」

連絡のことなら、俺がどうにかしたから安心してくれ」

「どうした、坊主？」

今度は、士郎が手を挙げる。

彼もさやかと同じ、何か言いたげな顔をしていた。

「安心して…：私達の持っている携帯は連絡出来ないようにされてるのよ？」

さやかか念話が可能な範囲でないと不可能よ。

それとも他の人に借りたり、公衆電話とか使って連絡するの？」

「違う、そうじゃないんだ。」

「今から取り出すよ」

士郎は自分の右ポケットからある物を取り出す。彼は以前持っていた携帯とは違う別機種のものを取り出し、全員に見せた。

「それ…：新しい携帯電話？ 私達が所持した物には繋がれなかった筈だと思うんだけど」

「いや、他の人が持っていた携帯電話を投影して密かに連絡しようと試みたんだ。」

何とか繋げることに成功して、こつちの現状を伝えることはできた。

正輝には『何時だと思ってるんだ』って怒られたけどな…」

携帯電話は、一般市民が手に持っていたものを見て投影魔術で作り、正輝に連絡していた。

ある程度の動向を見られている以上は公衆電話やホテル内の電話、自分達の持つ携帯電話は妨害されてしまうが、民間人の携帯電話を使って連絡しているのならIstの包囲網に気づかれない。

「さやかは水分身を向かわせて、士郎は深夜に携帯電話の作成を試みたのね…もう早く寝なさいって、私全員に言わなかったかしら？」

「深夜の時間帯なら出来るかなって…悪い、声をかけるべきだった。正輝にも、申し訳ないことしたなって思ってる」

「あーうん…アタシもやる前にみんなに言うべきだったよ。ごめん」

さやかと士郎の二人が勝手に調べ、もう実行してしまったのだから怒っても仕方がないと、レイナーレは溜息を吐く。

「動きたいならランサーとか、私にも一言かけなさいよ…それで、どれくらい近くなったの？」

「このホテルからマンションまで7kmくらいだそうだ。今回は襲われなかったから良かったけど、また更に近くに泊まるのは流石に危険過ぎないか？」

今日、合流するのも危ないのは分かんないけど…」

「さやかへの偵察した場所に危険な罠があるのなら、無理でしょ。少しずつでも近づいて、徒歩でも問題ない距離になってから。」

ああそれと…あの無人機も罠も置かれてない下水道なら安全だから通るとか言わないわよね？

絶対に却下よ」

「えっと…うん。」

流石にアタシもそこまでは考えてないかな」

「俺はそこまで気にしねーが、その様子だと下水道は無しに決定だな」

無人機に襲撃されない上に安全が保証されてたとしても、不衛生な所へは行きたくない。ランサーは霊体化して移動することも可能だから気にしなかったが、それ以外は嫌そうな顔をしている。

「ホテルを出たら、昨日と同じように外へ出て…街を移動するわよ」

12/4 13:00

昼飯は既にホテルでサンドイッチを購入し、休憩を挟んで移動していた。

家近くに出没した強力な無人機達との戦闘を避け、徒歩で遠回りしつつ全員で周りを

見渡していく。

レイナーレ達は遠回りし、狭い道へ移動すると無人機が出現した結界とは少し違うようなものが張られる。閉じ込められたことで戦う準備をしたが、さっきまでとは異様な空間を感じる。

今までとは違う結界が、展開されていた。

「無人機じゃ…ない?」

Istが仕掛けたものなら無人機やタブレットが所々に出現し、狙い撃ってくるばかりだと身構えていたのに全然出てこない。

目の前に出てきたのは、異様な化け物達だった。

数匹もの液状のスライムや大きい蛙が頭上から落下し、地上には山賊のような格好と棍棒を持った青色の豚が6体出現する。レイナーレを見つけたと同時に、棍棒を持ちながらも早歩きして迫ってくる。

「…あれって敵なの?」

青い豚ことボコブリンが高く飛びかかり、持っていた棍棒をレイナーレ達に向けて振り下ろした。

「アアアツガ!!?」

「うわっ、攻撃して来た!!?」

「敵って事で良いみたいっすね！」

まずレイナーレとミッテルトが光の槍を投げ、爆発させてボコプリン3体を吹き飛ばす。液体の化け物であるスタチューも襲いかかってきたが、ランサーの薙ぎ払いを一撃食らっただけで倒される。

「なんだコイツら…」

「上から新手が来ます！」

最初にいた敵を全て倒すと、今度はライガを掴んでいるグリフオンの群れとモリブリンを持つ大きい鳥のカーゴロック、プロペラの羽をつけたピーハットが飛んでくる。

モリブリンとライガが地上に下り、ランサー達を襲撃する。

「ちっ、見たこともねえ化け物が続々と湧いて出て来やがる。魔物か…？」

とにかく飛んでいる敵は墮天使の嬢ちゃん二人に任せるぞ」

「それにしたって、数が多いわねっ…!!？」

ミッテルトは光の槍を線香花火のように爆散させ、複数もの針が魔物達に突き刺さっていく。

光の槍は悪魔だけではなく、魔物にもまた効果は絶大だ。

それが針となると威力は衰えるが、広範囲に散りばめられる事で何体かは飛行しきれずに墜落し、消滅した。

敵一体一体はそこまで強く無いが、とにかく数が多い。

「やリーっ！」

「さやかは八江ちゃんの側にいてくれ！」

トレース・オン
「投影開始！！？」

「私も手伝うよ！」

士郎は投影魔術で干渉・莫耶を形成し、八江に近づいてきた敵を反撃する。さやかは八江の側にいつつ、何本もの剣を周囲に出現させて、それらを投げ飛ばす。

グリフォンとは違い、何十体もいたピーハットとカーゴロツクは光の槍どころか、矢と投擲された剣を受けただけでも倒せる。

「コイツら簡単に倒すことはできるけど、また増えてるし！」

「とにかく、八江ちゃんを守るんだ！」

レイナーレ達は、とにかく防衛に徹していた。

なるべく全員離れず、八江を中心に背中合わせに戦っている。

ランサーは、モリブリンとライガ達を相手に戦っている。薙ぎ払ったモリブリンの槍を飛んで避け、そのまま頭上から足で蹴り飛ばした。

（…コイツの攻撃、他の魔物に当たってねえか？）

モリブリンの持つ槍の薙ぎ払い、他のモリブリンだけではなく、他の魔物にまでそ

の攻撃に巻き込まれている。

英霊で槍を使いこなしているランサーからして見れば、そんな隙だらけで拙い戦い方をしたらまあそうなるだろと若干呆れ顔になっている。

ランサーは、モリブリン達よりも出てきた魔物の中で一番厄介なライガ達を警戒する。

(チツ：むしろコイツらの方を先に潰すか)

ライガはモリブリンの振り回しを見て、巻き込まれかねないと離れて動く。遠回りし、この場で一番弱い八江だけを狙おうとしている。

「囲まれてるっ…武器を持っていない八江ちゃんだけを狙おうと」

違いとしたら幼い少女にまで襲いかかっていることと、危険度が無人機よりもかなり低かったこと。

警戒していたライガを、ランサーがすぐさま撃破した。

魔物を数分で全員倒したことに一同、微妙な顔をする。

「なんか、呆気なく終わったね。

敵は多かつたけど…一体一体が弱くなかつた？」

敵を全員倒したと同時に結界が解除されると、さやかが拍子抜けしたような反応をする。

「俺達の実力なら、大したこと無かったってわけだな」

「良かった…」

「でも、俺達だからどうかできて…無関係な人達がこれに巻き込まれたら殺されてるな。」

こんなこと、時空管理局って組織が黙ってないだろ。

そういうえばあの人達は今の現状を知らないのか？」

「仮に知って管理局が到着したとしても…この街に置いてある罠や無人機達を設置してる奴が絶対に介入を許さないんじゃないの？」

…仮に知ってても、手が出せないわ」

無人機の結界だけではなく、魔物が出現するようなものまで仕掛けられていた。無人機以外のものでも反応するよう二重に仕掛けたにしても魔物が幼女、少女を襲っているのだから仕掛ける訳がない。

「さっき出てきたの…まるで魔物のように見えたが」

「まあ人間じゃないとして、俺達のこと殺す気で襲ってきたもんな」

海鳴市のことをまだよく知らない不知火は、士郎に聞く。

「あの…この海鳴市は詳しくくないのですが、元々は魑魅魍魎なところだったんですか？」
「この街はそういうところじゃない。誰かが持ち込まない限り、あんなのが蔓延るなん

て事は絶対に無いんだ。

ただ管理局も来れない、あの無人機達を仕組ませた張本人もこんな罠は仕掛けない……一体誰がこの罠を仕掛けたんだ？」

無人機以外の他に、魔物まで別の何者かがまた別の罠を仕掛けられている。

しかも、I s tはそのことを気づかないまま。

無人機に子供に対する攻撃を無力化しているのに、子供まで襲う罠など仕掛けるわけがないのだから。

「誰が仕掛けたとかっていう話以前にさ……これって、かなりヤバくない？あの無人機達もそうだけど……さっきの魔物まで街中とか沢山出てきたらさ。

しかも、気づいたのがウチらだけとか尚更……」

ミツテルトの一言に、全員が沈黙する。

さつき出現した魔物達が突如現れ、海鳴市の民間人達を巻き込んで襲うことを考えたら。この罠が他のところに何十個配置され、それが起動するとなると混沌が起きるので無いのか。

今やこの海鳴市は様々な罠が配置され、無法地帯と化している。

「…今の私達じゃどうすることもできないわ」

「ああ、最優先は正輝達との合流だ。

その後に動かないとどうしようもない」

あの戦いで少しい詰めたが、全員すぐに考えを切り替えた。

「私も…下水道には無人機はいなかったから調子に乗ってたけど、あんな罠を見て急に不安になったかな。

私の調べてない所に張られてるなら…流星に正輝達が無事だったら、このことも確認してるよね？」

さやかは朝に報告した時は上機嫌だったが、戦いを終えて急に不安になった。

12 / 4 18 : 00

その後も道中に出てきた無人機やタレットを破壊しつつ遠回りをし、レイナーレ達は旅館に泊まり、一泊する。

「さやかが連絡網になるんだから、体調管理だけはしっかりするんだぞ。

俺は深夜に連絡しないと無理そうだし…」

「うん……とゆうか、私じゃないと無理っばいよね」

「二人が突破口になるのだから、明日はお願いね」

今回は難しい話をするともなく、次の日に正輝達と合流する為には準備を着実にするとして、その為にさやかかの念話と分身が鍵になる。

彼女の力が必要不可欠として、今度こそ余計なことをせずには休むことに専念するようレイナレはさやかと土郎の二人に伝えた。先日のホテルのように独断で探索することをせず、魔力を温存するようにと釘を刺している。

夕食と温泉を終え、全員が10時30分まではゆっくりしたり、遊んだりしていた。

さやか、八江、ミッテルト、土郎の4人でトランプを用意しつつ、ブラックジャックをしている。土郎がオーダー役になり、3人にカードを配っている。

「ふう……疲れたわ」

レイナレは椅子に背もたれし、自販機で買ってきたジュースを飲みながら3人が遊んでいるのを眺めている。

手札をよく見ると、ミッテルトは7・1・10の18でキープし、さやかは10・1・

11と22で自滅している。八江もまたコールし、4のカードを引いたことで合計16だったのが20となる。

「よし、それじゃあ見せるぞ」

士郎は合計19でセーブしたままにしており、八江の一人勝ちになった。

「あーギリギリつか」

「八江ちゃんの勝ちだな」

「良かった…」

八江も最初は士郎達のこととも恐れていたが、今では笑顔を向けている。

3人が楽しく遊んでいる中で、不知火だけが遊びたいという気分になれずに自室へ戻っていった。

彼女が、最初に宿泊した時に遊んでいたのは彼女自身の気を紛らわすためだった。正輝の仲間とは初対面であることから、納得はしたけど釈然とはしてない。

特に、堕天使と悪魔絡みに巻き込まれた時は彼らと関わって同行したら危ないんじゃないのか。

「……このまま事情を聞かされないまま敵味方の判断だけさせられて、しかも事情

も教えてもらえないまま私刑を是とするなら、流石にレイナーレ達に敵視することはしなかったが、彼らを信用しきれないままランサーの二人だけで分断して行く事も考えていた。

その心配も杞憂に終わり、もう少しで正輝達に合流できることを喜ぶはずなのに、何故かできなかった。

夜空を見上げて、別のことで頭を悩ませていた。

「よう、こんなどころで呆けてんのか？」

マスター

ランサーが気にかけて、不知火は彼に反応して顔を向ける。

彼女の顔は元気がなく、顔を見た後に俯く。

「悪いけど、貴方に私の悩み事を話したところで…意味なんてないわ。艦娘特有のことだから、一緒にいたランサーでも多分わからないと思う」

「悩み事ねえ…俺は英霊で、マスターのような艦娘じゃない。艦娘特有の苦しみを、完全に理解して受け止めることは出来ねえかもしれないが、誰にだって言わなきゃ分かんねーこともあると思うが。」

「ま、話す話さないはアンタに任せる」

ランサーにそう聞かれ、不知火は少し考えてから悩んでいたことを話した。今ここに
いる艦娘は不知火のみで、話を理解してもらえぬ相手はいない。

「他の艦娘達のことを考えてたの：私は、こんな悠長にしても良いのかなって。私以外
の艦娘も、同じ目に遭ってるとなると私だけが安心できる場所にいるから。」

最初は知らない場所に飛ばされて、悪魔とか、子供を盾にしたりとか：無人機の軍団
とか。

理解が追いつけなくて、深く考える時間もなかったから、その場に合わせて動いただ
け。

私自身一体どうなるか全く分からなかったし、

私以外にも転移されてるから：同じ目に遭ってるんじゃないかって。

転移される前に襲撃してきた艦娘も、関与してないとは限らない」

「確かに、強制転移で俺達以外も移動したからな。恐れてるのは、他の艦娘がこの街で騒
ぎを起こすことか？」

不知火は頷く。

他の艦娘が市民に危害を加えることが平気なら、同じく強制転移されてらんじやない

のかも。

「無人島にずっといた摩耶とか、五十鈴とか、朝潮とか、浜風も…大丈夫だと思いたい。特に提督から虐げられた艦娘は、提督と同じ人間っていう人種を憎んでる。」

人間にだって良い人もいるけれど…それが割り切れずに襲うことだつてある。襲ってきた艦娘達までも私達と同じ状況だとしたら、私の知らない何処かでこの世界へ転移され、誰かを無差別に襲うか…意味も分からずにあの無人機達に襲われて犠牲になつてるかもしれない」

「なるほどな…あの無人島で起きた強制転移で他の艦娘達が知らない世界に放り出されて、訳も分からないまま蹂躪されて殺されたり、街の人間を襲うつて心配してるのか」「少なくともあの場で襲つた人全員に、余裕が無かつたわ。もし私達と同じ境遇なら当然…正常な思考はできるわけがない。」

提督と同じ人間を敵視してるなら、手当たり次第に攻撃して加害者になることだつて」

「…艦娘じゃなくとも、無人島には人間もいただろ。追い詰められたアイツらでも何ら変わらないんじゃないのか？」

「それもそうだけど…艦娘の方が艦装つて兵器を持つてるから被害は大きい筈よ」

「仮に暴れてんなら、とつくにニュースになつてるか、俺達みたいに結界に閉じ込められ

て何処かで戦ってんだろ。

んで、今頃は暴れた痕跡を抹消されてる。

知り合いの艦娘か、或いは無人島を衝撃した艦娘達が消されたかまでは分からねえよ」

それを聞いた不知火は、青ざめた顔をする。

ニユースになってたら今頃各地で大騒ぎになっている。街の人達は何気ない日常を暮らしており、艦娘の情報は一歳出てきていない。

無人機に異端扱いされ、消されてる可能性の方を思い浮かんでしまった。

「そう…分かったわ。

知り合いだけとかなら、正輝に聞いたら分かるかもしれないかもね」

「ま、それはアイツに聞けばいいだろ。

正輝も深く関わってたんだ。

仲間だけじゃなくて、知り合いの安否のことも考えてるだろうよ」

（レイナーレと一誠のような墮天使と悪魔の一件もそうだが…艦娘のことも確実に絡みそうだなこりゃあ）

「なら、艦娘のことじゃないけど…街中に入って少しずつ落ち着いたけど、それが順調過ぎてて逆に嫌な予感があるの。

敵や罠もあつたけど、問題なく突破できるものばかり置かれてる。私達を監視してるなら誘導されてるかもしれないって頭が過ぎてて。

私達はホテルに2回宿泊してたのに全く襲撃、してこなかったし：邪魔ばかりしてるアイツらは一体何がしたいの？

合流を阻止したいなら、気が抜いてる所を叩く機会なんて幾らでもあつた。私達を監視して、正輝達と合流したところを一気に狙おうとしてるの？」

不知火の質問にランサーが上を見上げつつ少し考え、彼女の質問に答えた。

「あー：そうだな。無人機を置いている奴は、もしかしたら対して難しいことは考えてねえと思うぞ」

「え？」

「奴が策士なら、幼少まで危険に晒すような罠の設置もあるか徹底的に調べるんじゃないのか普通？さっきの魔物の罠だって、幼少を守ることが前提で動いてるなら看過できないだろ。」

一時的とはいえ八江って子まで麻紀って男に襲われそうになった時、無人機が味方側になつたくらいだ。

大体、集まった所を一気に叩くつー考えなら、俺達が宿泊してる時点で襲われてい
る。

確実に殺すことが目的なら罠に入ってきた連中の進行を邪魔して消耗させるより、刺
客を何人か用意して安息の場を襲撃した方が、一番手っ取り早いからな。

それをしなかったつてことは、下水道も路地裏も、館内のような狭い場所を仕掛ける
となると都合が悪いとか、敢えて俺達を泳がせてるつてことはその気になればいつも
潰せるつてことで軽く見られてるか、見下してるんじゃないのか？

俺達を羽虫と例えて、蜘蛛の巣を何重に用意しておけば悶えて苦しんで勝手にくたば
るつて。

自ら出向く事なく、くたばつてくれればな。

さつきマスターが言ったような、合流してから潰すつてことはありそうかもな」

「相当舐められてるわね……」

「無人島みたいに追い詰められて弱った人を使わなっただけ、幾分かはマシだが」

正輝達に嫌がらせしたいだけで考えが浅いのか、それとも力を温存したい為に街の至
る所へ適当に罠を張つて害虫駆除したみたいに勝手に倒されるのを期待しているのか。

そこまで考えてないのだとしたら、その両方の意味を込めて邪魔されないように何重
にも罠を設置したこともあり得る。

「ランサーは…明日のこと、どう思ってるの?」

「明日が慌ただしくなるって事だけだな。」

考えることは、何が起きてても心の準備くらいはしなくちやいけねえくらいだ。

明日以降の事も考えるってなると、仮に無事に合流したとしても今のやばい状況を終わらせない限り、安住の地は無いと思つた方が良さそうだしよ。

当然、戦うことは避けられねえ。

なるようになるしか言えんし、その場で起きたことに善処して最善を尽くすしかない。

ただまあ目先に荒事が起きる可能性が高いつて事が分かつてるなら、それなりの心構えができる。その為にレイナーレって女が、もう一泊家近くに泊まろうって話をしたんだ。

墮天使の二人だけならともかく、俺があ坊主と知り合いだったのもある意味運が良かった。

俺が坊主を知ってなかったら、まだ状況だつて変わつてたかもしれない。一誠とアーシアだったか? アイツらとのいざこざどころか、協力し合えるかどうかで、ここまで順調に合流することすら容易じゃなかったんじゃねえのか?

最初は敵味方の区別がまだハッキリしてなかったからな。

下手したら俺達とあの墮天使の間に溝が出来て、もつと拗れていたかもしれないからうしろよ。

マスターも、正輝達と衝突してまでつてのは考えてないんだろ」

二人が長々と話している途中に、誰かかの足音が聞こえる。話し声が聞こえ、ミツテルトとさやかか喋りつつ、ランサー達の元へ向かっていた。

「おい二人とも、私達もう疲れたから寝るからね〜」

「ふわああっ…レイナーレ姉様から今日の散策は絶対しちやダメだからすぐに寝ることつすよー！」

「おう、お疲れさん」

ミツテルトが欠伸をし、さやかか遊びすぎて疲れた声を出して伝えていた。ランサーが返事をして、聞いた二人は部屋に戻っていった。

時計を確認すると既に夜の11時になり、もう寝ないといけない時間帯になっている。

「…そろそろ、寝ましようか。

色々考えるのも疲れた」

「そうしろ。俺はまだ起きておくから、マスターは明日に備えて寝とけ」

「うん…」

不知火は布団に潜り込み、そのまま深い眠りにつく。ランサーはもう1時間窓から外を見張り、問題がないことを確認をしてから眠りについた。

12/4 11:00

麻紀は、1stにある提案を持ちかけようと電話していた。彼が綺羅と取引しているのなら、彼女を騙して加担してくれないかとお願いをしていた。

『どうしてアイツらを助けたのか知りたい？』

しかも、綺羅じゃなくお前に加担しろって？

お前：：僕に喧嘩売ってるの？君達は美樹さやかだけじゃなく、あの小さい幼少にまで銃口向けて、その上撃ってたでしょ。

撃ち殺そうとしてた時点で、お前と取引なんて論外なんだよ』

しかし、1stはキレ気味に麻紀の提案を断った。

街中へ逃げているレイナー達と、それを追っている麻紀達の一部始終を見ており、聞く耳を持つことはない。

八江を抱えているレイナーごと殺そうとしていたことも、既に知られていた。

『そういうわけだから、手を組むなんて絶対に御免被るよ。』

何処に隠居してるかは知らないけどさ、見つけたら叩き潰すから隅でビクビク震えな

がら待つてろよ、この命知らずが。

今こうして僕と連絡してる時点で、君のことを逆探知してるんだ。

この電話が終わったら、すぐ特定して潰してやるからな？」

自慢げに挑発されても麻紀は恐怖せず、動じない。麻紀は諦めたようなため息をつき、Istとの手を組むことを断念する。

「…なら、君は誠司つて人を覚えてる？」

『は？誰そいつ？なのはちゃんとか、まどかちゃんのような少女とかは結構覚えるんだけど。』

ソイツが綺羅に殺されて、それで恨んでるなら勝手にやってくんない？

名前からして男だよな？

てゆうか、最期の遺言がそれでいいの？

どーでも良い奴の名前なんて、一々覚えてられな』

死んだ親友のことを聞いたが、久野は無関心だったから返事の途中で電話を切った。麻紀が電話している場所は公園であり、その周囲には誰もいない。

「ああ誠司…彼も駄目だったみたいだ。

頑張つて準備しないといけないね」

麻紀は立ち上がり、公園近くにあった電柱に触る。その柱には大量に張られていた

バーコードを眺めながら不気味に笑っている。

「バーコードとえーlistに逆探知されたとしても、特定することは絶対に不可能だ。
【なぜなら、本物の海鳴市に彼はいないのだから】

5 話白昼堂々①（レイナーレ・士郎・正輝ルート）

《レイナーレ視点》

12 / 5 9 : 15

合流場所のバス停へと徒歩で向かう準備をする。レイナーレ達は旅館のチェックアウトを済ませる前に、まずさやかが正輝と念話できる範囲に入っているか確認していた。

「おーい、正輝との念話が繋がったよー。」

10時に合流するってさ」

「…やつと合流できるのね、私達も行きましょうか。準備は出来てるの？」

「昨日と同じ天気なら、まあ大丈夫だと思うよ」

さやかがそう自慢げに言い、全員チェックアウトを済ませてホテルを出る。今日の寒波は特に寒く凍え、戦う準備は出来ても外は異様に寒かったことで震えている。

「寒い…ああ、もうっ寒いって…！」

今日こんなに寒いなんて聞いてないよー！」

「だから言ったのに……本当に大丈夫なの？」

もう少しで合流するんだから頑張りなさい。

これを渡すから」

「あ、カイロ……買ってくれてたんだ。

レイナーレさん、ありがとう」

吐息は白くなっており、さやかは寒い寒いと呟きながら身体がぶるぶると震わせて歩いている。レイナーレは言ったそばから何やってるのかという目をしつつと、コンビニで買ったカイロを渡す。

士郎も八江も防寒着をちやんと着ており、ランサーは多少薄着でも平気だった。

「おい、そろそろ合流地点のバス停が見えるぞ」

旅館から約束した合流地点まで、もう距離は目と鼻の先。そこから徒歩で歩き、フェイトの家近くにあるバス停がレイナーレ達には見えた。

しかし、

《マスター、三人の魔導士が近づいてきております》

「……え？」

さやかの持つデバイスから警告が発せられたと同時に結界が出現、見えない壁により道を遮られる。やっと合流して安息つけれると思つたのに、この時だけさやかは寒さで

はなく、涙目になりながらも怒りで震えている。

「あああああつもうこんな時にいいいっ！」

一体誰なんだよもおおつ!!?」

「…この結界、魔力で形成されている。

これなら壊せそうだな」

結界を解除か破壊しなければ、通行することはできない。正輝達との合流一歩手前で邪魔され、さやかは寒さに悶えながらも、半泣きで叫ばずにはいられなかった。

士郎は、ため息をつきながらも破戒^{ルル}すべき全ての符^{ブレイカ}を投影する。

「すぐにでも壊しなさい、このままだと襲われるわよ…」

「てつきり人が少ない深夜に襲うのかと思ってたけれど…ただ破壊するにも、何重にも貼られて時間がかかりそうだし。」

さつきまで魔物とか機体とか出てきた時の結界とはまた違うな…一体誰が」

「あれ、なんか飛んでるっス…」

ミッテルトが空を見上げ、指を指していた。

結界が張られているこの状況下で、さよかのデバイスが警告した通り、レイナーレ達の元へ飛んでいる。

彼らは、飛んできている鉄球と共にレイナーレ達の方へ急落下しつつ向かってきた。

「え、ちよつと待って…まさかこのままこっちに突っ込んでくる気っ!??!? 嘘でしょ!??!?」
「はああつ!」

まず5・6球程の鉄球が、全員に突っ込んでくる。レイナーレは右手に光の槍を出現させ、同時に左手で全員に光の壁の補助効果を付与していく。

飛んできた鉄球の威力を軽減させていく。

「ああもうっ…! 無人機じゃないけど…こんな朝っぱらから襲ってくるなんて」

シグナムはレイナーレが魔力を発さずに、手から武器を取り出したことに少し反応するが、それでもレヴァンティンのカードリッジをリロードしつつ抜刀する。

「紫電一閃!」

(いや、本当に誰っ!??!?)

さやかの前に出ていたレイナーレが咄嗟の判断で光の槍を取り出し、攻撃を防ぐ。続いて、一匹とハンマーを持っている赤髪の子がさやかを挟み討ちの形で仕掛けた。

「グラーファイゼン!」

「ておあああつ!!?!?」

さやかはハンマーを刀で守りつつ、もう片方を水分身を出現させて狼男の拳を防いだ。
だ。

レイナーレとミツテルトの掌から光の槍を出現させて3人に投げつけるが、すぐ上空

へ回避される。

シグナムは、レイナーレ達二人にも少し驚いていた。

「ち、ちよつと!」

3人ともアタシばかり狙ってくるんだけど、コイツらに恨まれることしたっけ!!」

「知らない、わよつ!!?何かしたんじゃないの!!?」

「こんな連中知らないって!!?」

三人が、さやかを集中的に狙ってくる。さやかの大型魔力反応を探知し、彼らはレイナーレ達に攻撃を仕掛けてきている。

シグナムを押し返したが、防御した光の槍は今にも折れかけそうな状態になっていた。

「狙います!」

「俺も加勢す「貴方は結界を破壊することに集中しなさい!八江つて子もいるでしょうが!」あ、ああつ…」

「失敗したか…:ヴィータ!ザファイラ!」

不知火は大砲で支援攻撃し、士郎ももう片方の手で剣を投げようとしたがレイナーレが一喝されて手を止めた。対して、奇襲に失敗したことでシグナム達は魔法で空に浮遊

して身を引く。

大砲の弾は、すぐに急上昇したせいで三人とも当たらなかった。

「あの野郎…昨日の魔法少女といい、加減してたつつのには、無傷かよっ…!!?」

どうなつてんだこの街は!!?」

「…魔導士と、その一緒にいる者達もどうやら只者では無いようだな。

あの槍、魔法の類ではなかった。

全く魔力が感じられない」

「あのさ…会つてすらないアンタ達に襲われるような事を、何もしてない筈だと思うけど。」

何者なの?」

ランサーは青タイトの戦闘服に切り替え、ゲイボルグの矛先を三人に向けていた。

ヴィータの飛ばした全ての鉄球は、槍捌きで真つ二つにされている。

(こいつら、もしかして正輝が電話で言っていた4人組…なの?一人、足りないわね)

「お前達こそ何者だ。魔導士の魔法とは違う…他にも何が別の力を使っているように見

えたが」

「質問を質問で返さないで。理由も言わず、いきなり私達に襲いかかつてくるなん…つ

!!?」

お互い腹の探り合いをしようとしたが、上空から赤い光が灯されているのに気づいたレイナーレは、士郎達が巻き込まれないように墮天使の羽を広げて浮遊する。

リフレクターを展開し、赤い光から放たれる砲撃を防いだ。

「おいっ?」

すぐにやって来るなんて聞いてねーぞ!!?」

「黒い翼っ…?まさか、青い子の使い魔か?」

それに、あの砲撃は」

『あークソっ!!?能天気の話してる最中だったから絶対当たるなーって思ったのに!!?』

さっきのは確実に直撃コースだろうが!』

シグナム含めて襲ってきたヴィータ、ザフィーラの2人も彼女の背中に生えた黒い翼を見て驚いた反応をする。

「あーっ!!?あれだよあれっ!」

昨日、私が説明した飛んでる機体!

さっきのようなビームを飛ばしたりして、私の魔法で作った水分身を倒したの!」

さやか的水分身がやられたのも、レイナーレに向けて射出された赤い粒子を飛ばした正体は、ハドロン砲だった。両腕にビーム砲を兼ね備えられているガレスを2機用意している。

「ええ…レイナー姉様、どうするんスカこれ。しかも墮天使の翼まで出しちゃったからには」

「仕方ないわ。ビームを撃ってきた機体もそうだけど、見た事のない機体まであるのよ…もう力を出し惜しみするのは不味いと思つたもの。」

「相手が強敵なら、素性なんて隠してられないわ」

（家に着くまで出会つた無人機は、どれも地上を徘徊してたり、屋上で待ち構えて狙撃しようとしていたけれど…コイツらは特殊みたいね）

『あー、あーあああ…マイクチェック、マイクチェック。おい、そこにいるシグナムことピンク騎士、聞こえる？』

黒髪の墮天使はボクが相手するから、君は3人で残りを倒してよ。それと、金髪の墮天使と、青い子ともう一人…赤毛の男に隠れてる小さい女の子は丁重に扱えよ」

「だ、墮天使…？」

「んだよそれ、使い魔じゃねーのか？」

ガレスだけではなく、神虎とバージヴァルも出現する。機体から1stはボイス越しに声の高低を調節し、シグナム達に助力するよう伝えた。

（3人を同時に相手にさせるのは、流星に不味いわね…）

「…彼らの詮索は、終わってからだ。」

黒髪の墮天使とやらは奴に任せよう、他は綺羅と彼女の仲間に任せる。

まず私達3人で、あの青い子を囲んで叩く。

確実に蒐集するぞ」

「それにしたってロボット共やへりを操ったり、アタシ達に指示送ってる奴さ…なんかあの仮面の二人組のことまで知ってるようだったし。

また聞きてーことが増えたけど…最優先で闇の書のページを増やさなくちゃな」

シグナムは墮天使の存在に戸惑いながらも、1stに馬鹿にされたようなあだ名を呼ばれて嫌な顔をしつつ、墮天使相手を浮遊している無人機達を操っている彼に任せられた。

これで三組に分断され、襲われているさやかを助けに行こうにも元へ近づく事ができなくなる。

《上空》

レイナーレは光の槍を出現させ、神虎に向かって投げつける。

しかし、投げた槍は両腕のスラッシュハーケンを回転させ、貫かれる事なく弾かれて消えた。

『ああ無駄だよ。今ここに集っている僕の無人機達には、墮天使対策に光属性の耐性が

備わっている。

武器破壊も装甲も、貫くことは容易じゃなくなった。

街の奥まで進めたのは褒めておくけど、こんな風に単純な対策さえしてれば全然大したことはないねえ。こんな嘯ませみたいな奴を、どうして3rdが仲間にしたのか理解に苦しむよ。

それに：こうしてあの子達の目的を知ってもらえたのなら、僕らに協力してもらえないかな。

戦って怪我をするより幾分マシかと思うんだけど』

「どういう事？何が目的なのかしら？」

(怒りに身を任せちゃダメね：私一人だけで突破が無理なら、なんとか時間稼ぎするしかないわ)

脆弱だと見下していることに、レイナーレは目を細ませる。怒りを抑えてはいるものの、彼らの企みを探る為に質問していく。

『さやかちゃんには、ほんのちよつぴり3人に魔力を蒐集してもらおうよう支援してくれば良いんだよ。勿論、僕だって少女相手に蒐集するのは心苦しいって思ってる。少年とか、大人の男性女性だったら全然構わないけどさ。』

あの子が苦しい思いをして、魔法を吸い取られて暫くは動けないって考えると心が痛

むんだよ。

でも僕らにとつては必要な事で、殺す訳じゃないのも本当のことなんだ。あの3人に協力してもらえたら、僕の顔を立って綺羅に引き下げるよう交渉するからさ。

その戦力じゃ勝ち目なんて絶対ないよ?」

「馬鹿馬鹿しいわ…引き下がるのは、あくまで『蒐集してもらった美樹さやかには手出ししないように立てる』つてだけ。

殺すわけじゃないから安心してなんて、私達が大人しく引いてくれた方があなたにとつて都合がいいからでしょ?

…私達を助けるなんて微塵も感じられないわ」

『へえ?どうしてそう思うわけなんだ?』

僕だつて心までは鬼つて訳じゃないのに』

「さやかつて子の少女達に対しては過敏に反応して、それ以外は心底どうでも良いのでしょ。この街全体に張り巡らせている無人機が、何よりの証拠よ。

口約束だけで適当に事を済ませて、用が済んだら気に入った人以外も生かすのなら初めから殺傷可能な無人機やら罠なんて張らないわ。

約束もなかった事にして煙に巻いて、私達を騙しても損する事は何一つないもの」

単純に目的達成までの手間が省けるだけで、それ以外のことはI s tにとつて、どう

でも良いと考えている。彼が持ちかけた交渉の話し自体、要約すれば『どんなに頑張っても勝ち目ないから、仲間を売って命乞いしろ』を言っているようなもの。

レイナーレ達側からしても、抵抗せず大人しく殺されるという事を承諾するわけがなかった。

「……ここにいるさやかと八江のような少女以外はどうかろうと、貴方の心は全く痛まないことぐらい予想がつくわ」

『…勿体無いなあ。君らが僕の提案に乗って欲しかったら、こんな手間は省けたのに』

「こんな大部隊連れてきておいて、望み通りのことをしたら見逃すなんて…絶対にあり得ないわよ。」

そもそも貴方があの3人の目的を知っていたとしても、私達に本当のことを言うとは限らないもの。

信用できるわけではないでしょ」

『…あーもう良いや、お前と話しても時間の無駄だった。

僕の交渉に応じてくれないなら、さやかちゃんと金髪の墮天使、もう一人の子供以外の全員は始末するよ。

たった君一人で、どこまで足掻けるかなあ?』

(ほんと随分と得意げに…舐めて勝ち誇っているのは、私一人を相手にしているからでしょうね)

レイナーレを呆れながらも笑うIstは、勝ち確定の戦いで嘲笑っている。目の前にいる無人機を倒したところで、また増援を呼んでくるのは目に見えている。

だが、神器や宝具のような切り札を何も持ち合わせてない。

(ミッテルトが光の槍を閃光火花みたいに散らせるのなら、私は特殊な光の鉄壁と異常屈折で錯覚させる。

…ただ問題は、その小細工がコイツに通用できるかどうか)

『取り敢えず、身体の一部は消し飛ばしてもらおう?』

久野はその奥にいたガレス一機に指示し、ハドロン砲を発射させる。しかし、

『…はあ!??なんだよそれっ!??』

レイナーレに撃ったハドロン砲は跳ね返され、ガレスの機体を中破させた。

【ミラーコート】

対特殊攻撃における光属性の反射技。

物理攻撃を防御する光の壁・リフレクターと違い、敵の特殊遠距離攻撃を反射させる。

「…残念ね。これで、もうさっきのビーム砲を迂闊に撃てないわよ?」

『こんな姑息な技まで覚えていたなんて。それとも君らが光の槍で刺したり投げること

しか能が無いから、正輝が覚えるように指示してたのかなあ？」

「無人機を自動操作させて、高みの見物きめてる貴方に言われたくないわ。さつき大したことないって言って私達を馬鹿にしたことが、自分に返ってきただけでしょ」

実弾ならミラーコートは反射できないが、対面している無人機に搭載しているのはハドロン砲のみ。1stの発言に、レイナーレを少しイラつくのを抑えながらも挑発を挑発で返していく。

(さつきの反射で青い機体だけが自滅してくれば問題なかったのだけれど…)

『へー、でもそれってさ？』

神虎は腰にある剣を取り出し、パージヴアルは回転させてランス状にしていく。

2機は接近戦に切り替え、レイナーレに近づこうとする。ハドロン砲と天愕霸王重粒子砲のようなビーム砲を封じたからといって、倒せなければ何の意味もない。

強力な機体を前にこの逆境を覆せる方法は持ち合わせておらず、不利な状況に変わらない。さつきの反射で神虎を撃破すればなんとかなったが、先程の緊急強制転移によって回避されている。

「なっ…っ？」

『ビーム砲を使わなければ良いだけだし、不利な状況に変わりない。』

アサルトライフルのような実弾とか、神虎のMVSとかで良いんだからさ。

そもそも話、君ら墮天使達が持つ力の源が光なんだから、封殺すれば攻撃も防御もできないんじゃないの？

今度は光耐性を止めて、吸収できるようにした。魔剣こと光喰ホーリーレイザー剣のアレンジ版だ。最初つから光を吸収しなかったのは単に手加減してたんだからさ…もう戦う前から勝負は付いてんだよ!!?』

(小細工以前に、私達墮天使の対策を…!!?)

墮天使は武器を形成する光が源なのだから、それを封られれば後はもう背中の翼で飛ぶことしか何もできない。

『ああそれと…君らの顔を見て、少し思い出したよ。君といがみ合ってた長髪の赤髪女とその取り巻きの悪魔達が前日の夜にこの街の上で飛んでてさ。赤鎧の奴は中々に面倒だったけど、それ以外がピンチになったら日和ってたんだ。』

上空から街を見下ろして何かを探していたかは知らないけど、よりにもよって僕の領域テリトリーで固まったまま浮遊しててさ。

上空にいたソイツらは、マジに格好的だったよ』

(長髪の赤髪…コイツ、グレモリー家の娘と眷属とも戦ってたのね。)

まだ得意げに自慢してるし、私のことをいつでも消せるって感じて勝ち誇ってる…)

レイナーレは自衛のために、なんとか槍の原型を留めるために小さくさせて持つ。それを機体に投げつけたところで機体を貫くことはできないことも、光の力が微弱な状態で争った所で勝てないことは理解した。

あくまで、防御する為に両手で構える。

『光の出力を抑えて槍を短くても、意味なんて全然ないのに…そんな武器で一体どこまで戦えるのかな？』

「…それで、私をどうするつもりなの？」

『僕の要望に全く応じてくれないし、かと言って君をここで殺してしまったら守護騎士達も、はやてちゃん未来を汚しただろうって言及されるからしないよ。』

だからまあ、まず君を人質にして他の仲間達を動けないように…』

Istが得意げに話をしている最中に、不視界から飛んできた10本の剣がパージヴアル含めた無人機に首元に刺さる。

刺さった剣は大爆発を起こし、周囲の無人機をドミノ倒しのように巻き込んでいく。

『な、なんだっ…？！』

時間をかけて性能を明かすIstの傲慢さが、既に正輝達の救援に駆けつけていることに気づかなかった。

(私だけだったら勝ち目は薄いことくらい分かる…だから時間稼ぎの為に有頂天な貴方

との下らない自慢話に付き合ったのよ)

『まさか、もう正輝達が来やがったのか…幾ら何でも早すぎだろ!!?』

「…来てくれるって、思ってたわ」

剣を飛ばした方向には正輝、響、浜風の3人が既に結界内に入り、守護騎士達を相手に戦っている。結界に入った正輝は、レイナーレを助ける為にシャドーを10体出現させ、気配遮断で隠れつつ偽・螺旋剣を一斉に射出、壊れた幻想でパージヴアル含む無人機達を破壊した。